

図書館の視る世界

この世界のあらゆる出来事をきちんと書き残し、後世に正しく伝えるのは重要である。それは人類が何よりも重視し、成し遂げるべきことである。

なにをして。

なにがあり。

なにが起きたから今があるのか。

『歴史』とは自身が生きるこの世の全てを正しく記し、自身が生きる世界をより良いものにするために必要不可欠のものである。

この大地の全てを記録していた『歴史書』は、中央部の大きな図書館に厳重に保管されていた。

国民にとってそこは故郷も同然だった。

この国の全ての者が歴史を重んじていた。

しかし、ある日。歴史書を保管している図書館で火事が起きた。轟々と燃えていく図書館の火を止めることはできなかつた。

水をかけてしまえば本が駄目になってしまう。

何人も図書館の中に入り、歴史書を持ち出そうと試みるが、それも上手くいかなかった。

多くの者は、ただ涙を流すことしかできなかった。語り継ぐべき歴史が、今まで歩んできた過去が消えていくのを見ることしかできなかった。

資料一つ、全て余すことなく燃えた図書館に全員が絶望した。

しかし、そこで一人の男が言った。

「自分はここにあった本をいつも読んでいた。すべてを覚えている」

周囲の者たちは驚いた。

男はそんな周囲には目もくれず、一枚の紙に何か書き出した。

そこには図書館に保存されていた歴史書の一ページ丸々、筆写されていた。

男は本当に全ての歴史を正しく覚えていたのだ。

皆、そのことに喜んだ。

だが、全ての歴史を書き記そうと話し出したとき、問題が出てきた。

男一人に歴史を書き写させたとして、また燃えてしまったらどうする？

いや、それよりもまず、もう成人している男が死ぬまでに書き写しきれるのか？
難しくないか？ いや、不可能ではないのか？

希望はすぐに絶たれ、皆が新たな悩みを頭を抱えた。

そのとき、若い女性が手を叩いて声を上げた。

「脳は保存できたはず！ 本にせずとも脳ごと歴史を保存してしまえばいいのよ！」

女性の言葉を聞いてその場にいた人たちは皆、目を見開いた。

雄叫びあげたかと思えば、皆が歓喜に顔を歪め、興奮した様子で脳保存計画についてそれぞれが話し出す。

「確かに！ そうすれば歴史を正しく残せる！」

「それなら老化がくる前に保存しないといけないんじゃないか？」

「脳の老化を調べる者が必要だ」

「あと、脳の情報を確認できる機械もいるわね」

「もういつそのことこれからは脳を歴史書としないか?! あの人のように賢い人に歴史書をやってもらえばいいんだ!」

「それなら子供うちから賢い子には教育をしないと!」

「ああ! これで歴史は守られる!!」

お祭り中であるかのように騒がしくなる皆を見て、歴史を記憶していた男性は茫然として立っていた。

誰も彼に許可も取らず、脳保存計画、優秀な人材の『図書館』化を進めていた。

男性は、もう誰も目を向けていない燃えて消え去った図書館に目を向ける。

そして、感情を一滴零すように笑った。

「これからは俺が図書館ってことか」

眩いた男の目はやる気に満ちており、恐怖や嫌悪の感情は微塵もなかった。

彼も心から望んでいたのだ。

正しい歴史の受け継ぎを。

「そうして何よりも歴史を重んじる、ノート歴書国が出来上がったんです」

先生は昔話を終えると、黒板に背を向けてこちらを見る。

この国の者なら誰でも子供のころに読み聞かせされて知っている、我が国が出来るときっかけの御話。

「この国の歴史を紡いでくださっているのは誰かな？」

「四名の図書館様とそれぞれの図書館様とともに行動している司書様、記録者様です」

先生の質問に、スッと手を挙げた少年が淡々と答える。その答えに先生は大きく頷いて国の全体が描かれている地図を黒板に張り付けた。

ノート歴書国は四つの国が合わさってできたため、昔の国境を目印に東西南北で簡単に区分されている。

「図書館様たちは東西南北にそれぞれ一人いて、自身の担当区域で歴史を記録しているね」

東西南北には図書館、記録者、司書と呼ばれる者がそれぞれ一人ずついる。

図書館の役割は全ての歴史の記録であり、記録者の役割は図書館の護衛。

司書の役割は図書館のサポートと図書館が『歴史書』になった際に次の図書館になる、所謂図書館の後継者の役割をしている。

「図書館様たちの記憶力や心身に異常が見られた場合は、図書館様は歴史書となるが、歴史書とはなにか分かるかな？」

「歴史書は図書館様が集めた記録を保存した状態を指します」

自信があつたので手を挙げて答えれば先生は「そうだね」と優しく笑つた。

「図書館様の脳を取り出し歴史書として保存する。この技術は今では再現不可能だが、機械はもう何百年も正常に稼働しているんだ」

東西南北の中心にある中央区域を指して、先生は「じゃあ」と問題を続けた。

「もう一つ歴史書に関係する大切な機械は何かな？」

「歴史書の記録を見る機械です。図書館様が生前見られた景色がそのまま反映され、スクリーン映像として映し出されます」

「その通り、歴史書は脳だから本のように記録を確認できない。けれど図書館様の記憶力で保存された記録を映像で見られるということは凄く正しい歴史を保存できることにな
る」

図書館の脳を引き抜き保存する機械と保存された脳から記録を映し出す機械。

「歴史を正しく受け継ぐことができる。なんとも美しく最高だろう？ 君たちもそんな図書館様になれるよう、頑張ろうね」

「はっ」

自分たちの大きな返事に先生は心底嬉しそうに笑って、図書館様についての話を続けた。

ここで授業を受けた人間の中から司書になれる者はいるだろうか。

図書館になるため、司書になるための教育を施されるこの施設では記憶力と賢さ、身体能力によってクラスが分けられる。

俺は図書館見習いとなる司書を育てるクラスにいる。

ここで勉強して司書になって、図書館様が歴史書になったら次の図書館に選ばれるのが目標だ。

図書館様が歴史書になった場合、次の図書館は東西南北の司書の中から優秀なものが選ばれる。だから優秀な司書になれるように頑張らなくちゃいけない。

図書館になるのはなによりも凄いことで、皆の夢なんだから。



シノカは緊張していた。

ドアノブを挿んだまま棒立ちになってもう三十分は経っている。

「はあ、ふう……すっ」

二度息を吐いては一回大きく吸い込む。

変な呼吸になっている自覚はあったが、それさえも止めることができなかつた。それくらい緊張してしまつて人間なら自然とできるはずの呼吸さえ、上手くできない。

かけていた眼鏡を外して、顔を振る。

「よしっ」

眼鏡をかけなおして今度こそ！ とドアノブを回すが手はまたそこで止まり、ゆっくりとドアノブを戻してしまふ。

「やっぱこわいよおおおお」

「何が怖いん？」

「え？ うおわつた?!」

「ククククッ、お前いい反応するなあ」

情けなくそう零すシノカの横から楽しそうに目を細めて声をかけた男は、口元を口当てで覆い隠し、深く被っているフードで目元も陰になつていて見えない。

顔が全く見えないその人物にシノカがびくびくしているが、男はシノカの肩に腕を回し

て「いくで！」と叫び、ノックもせず勢いよくドアを開けた。

シノカが三十分も開けなかつた扉をいとも容易く開けて、男は慣れた様子でシノカを巻き込んだまま中に入つてゆく。

部屋に入り、周囲を見渡すと天井につくほど高く大きい本棚が壁一面を覆い隠していた。本棚の中には本がびっしりと並んでいて、真ん中にある螺旋階段が異様な存在感を放っている。

見上げれば三階までは視認できた。どうやら螺旋階段を中心に吹き抜けになっているようだ。少し覗き込めた他の階も本棚で埋まっている。

「おはようメイさん！ 言つてたコーヒー豆買つてきたで！」

シノカと肩を組んだまま男が叫ぶと上の方から小さく「はーい」と返事が聞こえた。

「ありがとうございますドグさん、ここまで持つてきて頂いてもよろしいでしょうか？ 今、手が離せなくて」

姿は見えなかつたが上から聞こえた声はとても落ち着きがあつて、大人な雰囲気を感じ取れた。

「また両手いっぱい本抱えとるんやろ！ 図書館がそんなことしたらダメだつて何度も

言うたやん！」

ハッとしたように駆け出したドグと呼ばれた人物は怒りながら階段を勢いよく登っていく。

それを追いかけると、両手で十冊以上の本を持っていた男性がドグから本を取り上げられていた。

「これくらい大丈夫ですよ」

「他の図書館は平気でもメイさんはダメなの！ よわよわなんやから！」

「じゃあドグさん、それを向こうの机まで運んで貰ってもよろしいですか？」

「おう！ あ、お前も手伝ってな！」

「え、あっはい！」

大きな声で返事をしたのはいいものの、本はドグが全て持っている何をすればいいのかとドグに視線を向けるとドグは机に向かつて歩きだしていた。

「メイさんよく転ぶから、隣歩いて机まで来てほしいんや」

「分かりました」

そんなことでいいのかと、シノカがメイさんと言われていた『図書館』であろう男に視線を向けると彼は何もなかったところで躓くところだった。

「あつぶな！」

咄嗟に腕をつかんで、メイさんが転ばないように引つ張る。前のめりにはなつたが何とか転ぶことはなかった。

目を見開いたまま固まるメイさんに声をかけると、彼は体制を直して胸を押さえた。

「えっと大丈夫ですか？」

「びっくりしました」

ただびっくりして胸を押さえていたようで、すぐに笑顔になるとメイさんは「ありがとうございます」と言つて、机に向かつて歩き出した。

警戒しながらメイさんについていくと今度は転ぶことなく、たどり着いた。

「メイさん、記録を始める前に挨拶しとこうな」

椅子に座つてすぐ本を開こうとしたメイさんの手から、ドグが本を奪う。

「あ、すみません。そうですね」

本に視線を向けて、高くあげられたそれに悲しそうな表情をした後メイさんは立ち上がつて、洗礼された所作で一つ礼をした。

「西の図書館をしています、イールイ・メーレントと申します。長いのでドグさんのようにメイと呼んでください」

「西の記録者。ドグ・陶兎とうとや、よろしくな」

「こちらで司書をさせていただくことになりました、シノカ・ペンテユです。よろしくお願ひします！」

「よろしくお願ひします。シノカくん」

「よろしくつ、シノカ」

「はい！ メイさん、ドグさん」



俺は『司書』だ。

歴史を記録する『図書館』の状態を施設に報告し、不備がないか確認するのが役割であり『図書館見習い』として図書館を間近で見るのが仕事である。

「あちっ」

冷まさずに口を付けたコーヒートの熱さに、思わず声を上げてしまう。

五月蠅くしたことで『記録』の邪魔をってしまったのでは？ と心配になりコーヒートを飲みながら優雅に本を読むメイさんに目を向ける。

メイさんはシノカの声が聞こえていかなかったのか、その目は本から離れることなく、ペラペラとページをめくっていく。

本当に読めているのか疑問を抱いてしまう程、スピーディーに捲られていくページ。メイさん瞳が左右に忙しく動いているところを見るに、ちゃんと全部読んでいるのだろう。

「ふう……シノカくん、退屈じゃないですか？」

いつの間にか全ての資料に目を通し終わっていたメイさんが本を置いて笑っていた。

「大丈夫ですよ！」

「そうですか、それならよかったです。ドグさんはいつも「暇だから早く終わらせてえな」とおっしゃるので、とても退屈な思いをさせてしまっていないか心配だったんです」

ふわふわと花や蝶が舞っているようにほのぼのとした空気を纏って、春を思わせる色素の薄い緑色の瞳を細める。

この人があの西の図書館なんて、今でも少し疑いたくなってしまおう。

「ドグさんってあんな感じの人なんですわね」

「ええ、私と彼と君の前任の司書の三人でいるときからなので、初めて会った時から彼は変わりませんよ。ドグさんは施設で育ったので常に周囲に人がいるのが当たり前だったんですよ」

メイさんは新しいコーヒーを準備しながら答えてくれる。ドグさんが記録を取りに出ていく前に「コーヒーと紅茶だけはメイさんシクらんから安心し」と言っていた。

だが、何もないところで転びそうになっていた姿を見たすぐ後では、その言葉を信用できず、いつでも助けられるように身構えとく。

「ドグさんの噂は施設でも聞いてたので、あんなに無邪気な人だとは思わなかったです」

「ふふっ施設でも随分可愛がられていたようですよ。兄のような恩人と双子のような親友がいるとおっしゃってましたから」

「そうなんですな」

危なっかしさもなく完璧な所作で淹れられたコーヒーを受け取る。先ほどとは違う少し甘めな香りがとてもいい。

カップを口元に寄せ冷ますために吹けば香る良い匂いに思わず頬が緩む。

「先ほどより甘いものなので、お砂糖はいつもより少ない方がいいと思いますよ」

「はい。……ん！ これすっごくおいしい！」

「シノカくんは甘いものの方がお好きなのだったので、同じものでの飽き回避も兼ねて変えてみました。気に入っていただけたようで良かったです」

「へえ、あれ？ 俺甘いもの好きなんて言っていましたっけ？」

「いえ、おっしゃってはいませんよ」

組まれた足の上に、カップと皿を軽く置いてメイさんはすらすらと言葉を紡ぐ。

まるで、先生が生徒にポイントを説明して問題を解いていくかの様に、メイさんきおく記録した内容を『歴史書』から引き出していく。

「角砂糖三つにミルクを少し。一杯目のコーヒーをお出しして、すぐに視線が角砂糖に向かっていたことも含めれば、コーヒーが苦手でお砂糖を自由に入れられるか確認なさったのかと思っただんです」

「お、俺がコーヒーを飲もうとした時にはもう本を読んでいたよな？ 見てたんですか？」

「ええ、見てたというよりは見えていたが正しいですかね。視界の隅で貴方が動いていたのを覚えていただけですよ」

コーヒーを一口飲んで、首を傾げたメイさんは「ね、簡単なことでしょ？」といった風に笑っているが、何も『簡単』などではない。

俺はコーヒーが苦手とバレないよう、メイさんの視線が完全に本に映っているのを確認してから、コーヒーに手を付けた。

それに記録というかなり体力と集中力の使う作業中に、視界の端に映っていた俺のことをハッキリと覚えていることなんてできるのか？ 自分だったら絶対に無理だ。

「流石ですね、俺だったら記録中は記録のことで頭一杯になっちゃいますよ。多分目の前で誰かが腹踊りしても気付かない自信しかないです」

「慣れが大きいですね、シノカくんも図書館になれば自然とできますよ。周囲を見ていないと危険な状況で急いで記録している時なんかは、危機を察知できないといけませんから」

「そんな状況あるんですか？」

「頻繁にはありませんが」

大きな缶を机の下から出すと、メイさんはそれを机に置いた。そして、天井近くにある窓に目を向ける。

「休憩にしましょう、ドグさんもいっしょに食べませんか？」

缶の蓋を開ければ、その中には綺麗に並び詰め込まれた色とりどりのクッキー。見るからに高級そうで「絶対に美味しい」と食べてもいないのに断言できる。

「メイさん、ありがとうおな」

窓に向かって手招きをすれば、そこからドグさんが飛び込んできた。かなりの高さから着地したのにも関わらず、足が床に着いた音が全く聞こえない。

猫が降り立った時のように、しなやかで静か。瞬きの間に隣に座っていたドグさんはもくもくとクッキーを食べていた。

「ドグさん、コーヒー飲みますか？」

「んー、ミルクがええ」

クッキーを頬一杯に詰め込むドグさんを見て、メイさんはホットミルクを作り出す。

状況の変化に頭が追いつけずボーっとしていると、唇に何かが押し付けられた。

驚いて少し身を引き、押し当てられたものを見ると美味しそうなクッキー。それを持つ手を辿ればドグさんがいた。

視線が交わったままクッキーをずっと口に押し付けられる。

食べなければ永遠に続きそうだったので、そのまま噛みつけばやっどドグさんの手が離れていった。

啜えたままのクッキーを掴み、かみ砕いて、口内へ招き入れる。シンプルなプレーン。塩が少し多めで塩味と甘みのバランスが絶妙だ。

「うっま」

「クククツ、うまいよなコレ」

「沢山ありますから、どんどん召し上がってください」

ホットミルクをドグさんに渡して、メイさんは深く椅子に座る。その膝の上には、紙の

束が置かれていた。

ドグさんはもう新しい記録をもって帰ってきたようだ。

新しい記録に目を通し始めたメイさんに構わずドグさんはホットミルクとクッキーを交互に食べては満足そうに口角を上げていた。

フードのせいで目を見ることはできないが、リスのような頬を見る限りクッキーが好きなのだろう。

ずっと見ていれば、ドグさんがこちらを見ながら「これ食いたいんか？」と持っていたものを差し出してくる。

「違うんです。ただ、室内でもフードを取られないのはなぜなのかなって」

「あー、まだやから」

「まだ？」

「おん。まだ」

随分含みのある言い方が気になったが、話は終わりともいう風にドグさんがホットミルクに口を付けたので、追及するのはやめた。

一番小さなクッキーを摘まんで、ドグさんはそれをメイさんの口元に持つていく。メイさんは資料から視線を動かさず、それを口腔内に迎え入れては何も言わずに食べた。

リスの様に頬にクッキーを詰め込むメイさんと、そんなメイさんが面白いのかどンドンクッキーを詰め込んでいくドグさん。

ぱっと見、悪戯っ子と天然なお兄さんにしか見えない。
想像していたよりも二人ともずっと人間らしい。

仲良くやれるのか、上手くできるのか、ミスしがちの自分では叱られてばかりになるのではないか。そう思い、怖くてドアを開けられなかった。
しかしそれは自分の杞憂だったようだ。

よかった、この二人となら上手くやっていけそう。

二人に気づかれぬように息を吐き、口いっぱいにくッキーを詰め込まれて苦しそうなメイさんにコーヒーを渡す。



「メイさん！ほんと気を付けてよ！」

「すみません。そんなところに紙があるなんて思わなくて」

「メイさんが自分で落としたんでしょお？」

西の司書を初めて、二年目。

司書としての仕事にはかなり慣れた。好奇心の塊である図書館と悪戯好きな記録者への対応にも。

こちらは、どちらかと言えば慣れるしかなかったのだが。

「ドグさんが図書館の目で見た方がいいと判断したのはこの町ですね」

「なるほど。では三日後にここを出しましょう」

「今ある記録はそれまでに終わるの？」

「ええ。二日ほどで終わりますから、一日は準備に回せますよ」

ドグさんから渡された資料と本で埋まった机に向かい、メイさんは嬉しそうにしていた。

そういえば自分が来てから、ここ『西の図書館の書室』からメイさんが出るのは見たことないな。

めったにない外出で嬉しそうなんだ。

「ふふ……ふふ、ふふ……」

物静かなメイさんは、記録中は特に喋るところか物音ひとつ立てなくなるのだが、今日は時折声を漏らして笑っていた。

資料とともにドグさんから俺宛てに届けられた手紙に目を通す。

『おれ、まだ、こっちおるから。とちゅうで、いっしょなる。メイさんをたのんだぞ』

どうやら、ドグさんはメイさんが彼の帰りを待たずに出発することを分かっていたようだ。

文字を書くことが苦手なドグさんが一生懸命書いてくれた手紙に再び、目を通す。

たった三行だけのそれを見て、嬉しくなる。

ドグさんとの合流地点まで自分はメイさんの護衛を任されたのだ。

まだまだ護衛をできるほど強くないが、ドグさんとの合流地点までの短い距離なら、図書館を任せてもいいという判断が記録者から下ったということ。

光栄なこと、とても名誉なことだ。

武器の整備をしないと。あと、何かあった時に薬とドグさんに繋がる緊急通信装置の動作確認も必要だな。

やるべきことを脳内にリストアップしつつ、ドグさんの手紙の返信を書く。

嬉しそうに鼻歌を歌いながら、手紙を書くシノカに目を向け「くふっ」と小さく笑みを溢したメイは、早く仕事を終わらせようと資料に目を戻す。

資料に隠すように挟まっていた付箋には『とおくからみてるで、あんしんしてな。シノカには、メイさんがいったの、つたえたで』と書かれていた。

シノカの受け取った手紙と同じく拙いながらも、頑張って書かれたのが分かる。それを、小さく畳んでメイはポケットに仕舞った。

「全く戦えないのは迷惑をかけてしまうから、少しでも動けるようになりたいです」

そう言って、苦手な運動と戦闘訓練を頑張り始めたシノカにちよつとしたプレゼントをあげたい。

ドグはその言葉に深くため息を吐いて、フードがとれてよく見える鮮やかな紫色の瞳を
瞼で隠す。

「ダメって言ってもどうせ強行するんやから、相談してくれただけええとしますよ」

瞼から再び現れた瞳は、ベルフラワーのように華やかさと優しさを含んでいた。

「ええよ。けど！ オレはいつもより遠くから護衛することになるから気をつけてな。駅
で合流するまでやけど、ほんつと気い付けてな」

ドグに詰め寄られたメイは「私そんなに信用ないですか？」そう言つて頬を掻くが、ド
グは勢いよく頷いた。

「分かりました。ドグさんと合流する駅までは、目移りしないよう気を付けます」

「おん。まあ、本当は普段からそーしてくれたら万々歳なんだけんが」

「おほんつ、ほらドグさん、早く行かないと遅くなってしまうですよ」

背中を押してドグを玄関の方へとメイが連れてこうとするが、記録者として鍛えられて
いる彼の身体はピクリとも動かない。

「わざつとらしい咳だわあ。んじゃ、行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい。お気をつけて」

メイの手から逃れ、助走をつけて大きくジャンプしたドグは窓の淵に座る。手を振つて
メイの見送りの言葉を聞くと、満足そうに笑いフードをかぶり直して窓から外へ飛び降り

ていってしまった。

ドグが仕事で出ていく前の出来事を思い出して、また笑みを溢してしまふ。

メイの警護とは、西の図書館を守るということ。メイ本人はそんなに特別なことだと感じていないが、司書や記録者を目指すものなら一度は憧れる立ち位置だ。

一年頑張ってきたシノカにとって良い記録となることを願い、未だに鼻歌を奏で続けるシノカにメイは目を向けた。

「では、いついきましよう」

「くふふふふ、そんな緊張しなくても大丈夫ですよ」

「ううっ、分かっただけだお」

雲一つない晴天。

久々の外に大きく深呼吸をする。背を丸め、指をイジイジと動かすシノカを見れば、目の下に薄っすらと隈がある。

あまり眠れていないようですね。

緊張しすぎてしまったのか、晴天をそのまま瞳落とし込んだような澄んだ綺麗な水色に涙で幕ができる。

天気雨のようで綺麗だと言ったら、怒られてしまいますかね。

零れそうな涙を掬って、落ち着きなく動いていた手を握る。

「はぐれてしまうことがないように、手を握っていてくださいますか？」
「手え？」

「はい。頼りにしていますよ、臨時護衛さん」

大きく見開かれた眼がパチパチと瞬けば、何とか決壊しなかった雫が溢れる。しかし、新しい雫を作ることなく、綺麗な水色は太陽の光を反射させキラキラと輝いた。

「任せてください！ 俺、絶対無事にメイさんをドグさんとの合流地点まで連れていきますから」

自信満々に私の手を引いて歩き出したシノカくんに着いて行く。

一瞬、何かが光って眩しさを感じた。

光ったのは木の上、光の反射するものなんてないはず。歩みを進めたまま木の方をよく見ると、ドグさんがたっていたのが見えた。

私と目が合うと、すぐに姿が消えてしまう。

目で追えないその動きは、さすがとしか言いようがない。

「メイさんどうかした？」

「いいえ。何でもありませんよ」

シノカくんの隣に並び、駅に向かって歩いて行く。

彼の年齢からすればかなり大きい歩幅も、私と比べればまだまだ幼い。シノカくんの小さな歩幅に合わせてゆつくりと歩く。

ドグさんは私の歩幅に合わせるというて聞かないので、こんなにゆつくりと歩くこと自体があまりなかった気がします。

ああ、そういえば、昔もこんなことありましたね。

あの頃は、私も若かったので、小さな彼との歩幅が大きく違うということはなかったはずですけど。

とても、懐かしく感じます。

シノカくとゆつたりと話しながら少しずつ進んでいけば、駅に思っていたよりも早く到着することができた。

汽車と呼ばれるソレは大きくて、大きくて、もう本当に大きかった。

本を読んできたから、文や絵で見たことはあつたけど、こんなにかつげえなんて思わなかつた。

ふと屋根を見ればそこに立ち、こちらに手を振っているドグさんがいた。一瞬で姿を消した彼を確認してから、汽車に乗り込む。

「ドグさんは一緒に乗らないんだね」

個室に入って窓からどんどん変わる景色を覗く。

メイさんと二人きりの空間。まったりとした空気と外の忙しない風景は、まるで時間の流れが違うように錯覚させられる。

「記録者は図書館の近くにいることはできませんから」

「護衛なのには？」

「ええ、記録者は諜報活動もしているので、記録者であるとバレてはいけませんよ。だから護衛は駆け付けられる距離で隠れて行われます」

タバコを啜え、火をつけようとメイさんがマッチを出す。煙は苦手ではないが、服が臭くなるのは嫌だ。

換気しようと窓を開けると、ピュッと水が入り込んで器用にタバコだけを濡らした。

驚いて窓を見れば、木の筒が上から下がっており激しく揺れて、上に引っ込められる。

濡れたタバコを見て、「厳しいなあ」と唇を前に尖らせたメイさんはタバコを諦め、餡を口に含んだ。

差し出された一粒を食べれば、口いっぱい広がる蜂蜜の風味に頬が緩む。メイさんはもう一粒手に取ると、それを投げた。

窓の外に出たそれを上から伸びてきた手が取り、またその手は上に引っ込められる。どうやら、この部屋の上にはドグさんがいるようだ。

それから今向かっている町について話していると、瞼が重くなってきた。

「昨日はよく眠れなかったようですし、着くまで休んでいた大丈夫ですよ」

「で、も。けいごが」

「警護もしつかりと果していただきました。無事ドグさんと合流できたのはシノカくんのおかげですから」

頭を撫でる手は少し冷たいけど、柔らかくて優しく、心をポカポカにしてくれる。

「おれ。やく……たてた？」

「ええ、とつても」

霧がかかったように意識がはっきりとしなくなる。視界も薄暗くなつては少し明るくなつてを繰り返した。

「ドグさんもいますから、安心してください」

そうだ。ドグさんがいるなら、俺の臨時警護はおわつたんだ。

「おれ。ずっと、ね、むかつた……んだ」

「頑張つて警護してくれてありがとうございました。シノカくん、おやすみなさい」

よかつた。役に立てた。

おれ、ちゃんとできたんだ。

真つ黒に染まっていく目の前と、頭を撫でられる感覚にひどく安心した。ふんわりと香るコーヒートの匂いでメイさんが近くにいることがわかる。

おやすみなさい、メイさん。

声に出来ていたかもわからないが、それだけ呟いて俺の意識は途切れた。

「すげえ！ 人がいっぱいいるよ！」

「はい、中心部に来ると活気が違いますね」

はぐれないよう、駅までの道のりと同じ様にメイさんと手を繋ぐ。

人で溢れかえっている町は活気づいていて、そこから中から人の声が響き渡る。

施設では騒がしいこともあったけど、この一年は穏やかで静かな日々を過ごしていたから、うるさいと感じることも懐かしい。

眠った後なので、余計に元気が有り余っている。

メイさんの手を引いて「行きましょ！」と進めば、彼は「ふふふっ」笑いを零しながら隣に並んでくれた。

そこからが思ったよりも大変だった。

まず、今回『図書館』であるイー Lui・メーレントがわざわざ出向いたのは、その事件の深刻さからだ。

国家遺産とも言われる絵画や宝石。それらが盗まれている。しかも、その盗まれた物は

闇市へと流れ、法外な値段と方法で売買されているらしい。

歴史を重んじるこの国では、それは大罪である。

国家からの要請により、この大罪の記録と対処を命じられた。

記録をするには正しい事件の全貌を知らなければならぬ。対処とは闇市に流された国家遺産の回収と売り手と買い手を突き止めることである。

そして何より、記録者であるドグさんが図書館が必要だと判断した。

以上のことから、図書館であるメイさんが現地に行つて、調べたほうが良いということになった。

実際に被害にあつた場所を巡り、そこに残る情報を集める。メイさんの中に記録された歴史と擦り合わせ、変なところがないか探す。

それだけをやるはずだった。

たつた、それだけを。

「見てください!! これはすごいです! 私初めて見ました!」

「メイさんっ、危ないから!」

こんなにメイさんが好奇心旺盛な人なんて知らなかったっ！

道路だろうが関係なく突っ切っつて気になったものを見行こうとする体を、羽交い絞めにして捕まえる。

文献で見たことがあるものも、写真や絵で見たものも自身の目で見るのが何より重要だ。それが一番正確な記録ができるのだから。

『だから本当は全てを見て記録したいんです』

そう言って悲しそうに瞳を伏せたメイさんを見たときは可哀想だと思った。

ドグさんはメイさんを記録に連れ出すのは「絶対にダメ」だと言っていたが、他の図書館では、自分から記録をするために現地に赴く人もいる。

図書館が記録のために現地に行くことは、規制されてるわけではないのだ。ただ、ドグさんの記録者権限で止められていた。

そんなに過保護にならなくてもいいのに……なんて思っていた自分を殴りたくなる。これは、現地視察禁止にしたくなる気持ちもわかる。

「メイさんっ！」

「シノカくんあれ！ すぐくないですか！」

「分かったからっ！」

指を混じ合わせるように繋いで、走ろうとする体を何とか歩かせる。

隣を歩いていくリードをつけた犬のほうが落ち着いているくらいだ。もう、メイさんのほうこそリードがいると思う。

何とか宝石が盗まれたという家に着く。ここで、今日回らなければいけない場所は最後だ。

その家はとても大きく、まさに豪邸といった見た目をしていて。

「国家から派遣されました、イルと申します。『太陽の涙』が保管されていた場所を見せていただけますか？」

いつもの様に落ち着いた声色でメイさんはそう言って、出迎えてくれた恰幅のいい主人に微笑む。

さっきまで犬とどちらが早いか決めるために「かけっこしたい！」と走り出そうとして

いた人と同一人物には見えない。

現場に着くたびに何度もみた切り替えの早さだが、自分はそんなにすぐ切り替えられない。

引き攣る頬をなんとか和らげて「ノカです」と偽名を名乗る。

自分はまだ司書として日も浅く、噂されるほどのこともしてないが、メイさんは名乗っただけで町中の人がその姿を見に来ようとするとするほどの有名人だ。

図書館の容姿は伝わっていないが、名前は誰でも知っている。

偽名は図書館であるメイさんを危険な目に合わせないために、絶対に必要なものだ。

「国家の方ですか、お待ちしておりました。どうぞ、こちらです」

主人は人好きする笑顔で、俺たちを招き入れた。

メイさんと繋いでいた手は離さずに進む。何かあってもドグさんがいるから大丈夫だとわかつている。

でも、少しでもメイさんを自分が守りたくて手はずつと繋いだままいた。

メイさんは俺の意思を汲んでくれているのか、離そうとはせず、握り返してくれる。

奥の書齋に案内される、書齋中にある隠し扉をの鍵を開けた主人は「ここです」と言つて中に消えていく。

メイさんを後ろにして、先に入ると、そこには多くの宝石や美しい絵画が飾られていた。そういったものに疎い俺でも、ここにあるものが高級で貴重なのがわかる。

メイさんは中に入ると、一周ぐるりと中を見渡して真ん中にある、空のケースに近寄つた。

蓋の部分が変形しているケースの周りを何周もぐるぐる回りながら見る。

「触れてもいいですか？」

「ええ、どうぞ」

長方形のケースは開いたままなので、中にふかふかのクッションが入っているのが見えている。ケースの中身はもちろんなかったが。

そこに入っていたはずの宝石『太陽の涙』は雫の形をした、オレンジ色の手のひら程の大きな宝石だ。

雫の形と太陽の光をそのまま取り込んだような美しさから『太陽の涙』と呼ばれている。

長方形ケースを見る限り、無理やりケースを壊して鍵をこじ開けたのだろう。

ケースを見た後、メイさんは書斎につながる入口へ行き、そのドアを調べた。

「この鍵はいくつあるんですか？」

「私の持っているこれと、寝室に隠していたものの二つです。寝室の鍵がなくなっていたのでそれを使われたんだと思います」

ドアの鍵穴をなぞって、考え込むようにしたメイさんは、視線を部屋の中に戻して、また周囲を見渡す。

「なるほど……。盗まれたことに気づいたのはいつですか？」

「通報をした日です」

「最後に太陽の涙を確認したのは？」

「その一ヶ月前ですね」

まるで探偵かの如く、知っているはずの情報をわざわざ主人に聞いている。

ここに来る前に、そんな内容は書類として渡されたものを見て記録したはずなのに。覚えていない風に装っているメイさんは、ケース持ち上げてもう一度それを凝視した。

「このケースの鍵は？」

「あ、それはこの部屋のここに隠しているんです」

主人が指したのはひととき大きな絵画の裏。それも、事前に記録したとおりだ。

「鍵には気づかなかったんでしょうね」

そう言って笑った主人に、絵画に近づいて鍵の場所を確認したメイさんは一度頷いて、やっと主人と目線を合わせた。

「はい、わかりました。もう大丈夫ですよ」

「ありがとうございました」

「いえ、お邪魔しました」

メイさんと軽く頭を下げて家を後にする。大通りを抜けて、どんどん進んでいくと人通りの少ない場所までやってきた。

あの家でも、特に得られたものはなかったなあ。

思わず零れ落ちたため息と同時に、メイさんの歩く速度が上がった。

仕事中にため息にメイさんを怒らせてしまったのかと、その顔を見るとメイさんが口パクで何かを言っているのが分かった。

おわれてる、ドグさんとごうりゆうする。

追われてる?!

後ろを振り返りそうになるのを堪えて、メイさんに合わせて大股で歩く。

横目でメイさんの口元を見れば「みつつでみぎ」と繰り返していた。二つ目の路地を通り過ぎたところで「はしれ」繋いでいた手を離して駆け出す。

後ろのほうから、いくつかの足音が追いかけてきているのが分かる。

本当に追われていたんだ！

縛れそうになる足を何とか動かして、三つ目の路地に駆け込んだ。

その瞬間、隣にいたメイさんが消えた。驚いて急ブレーキして止まった時、何かに体を捕まえられた。そのあと、すぐに浮遊感に襲われる。

視界が真っ暗で悲鳴を上げそうになると「しっ！」と叱責された。

顔を左右に振って、顔に被さった布をとれば視界が開ける。

路地の横にある家の屋根の上に引き上げられたようで、自分がさつきまでいた路地が下に見えた。

俺の胴体を掴む腕を辿る。どうやら俺はドグさんに小脇に抱えられているらしい。

ドグさんの隣には伏せるようにして、メイさんもいた。

二人の視ているほうに同じように目線を向ければ、三人の男が路地裏に入ってきた。タバタとうるさい足音は後ろから迫ってきていたものと同じで、こいつらが追いかけてきていた奴だったのだと分かった。

ドグさんは俺を抱えたまま体をゆっくりと動かし、身を屈める。

乱雑に外された口当てを気にする様子もなく、ドグさんは俺を降ろして、メイさんの方を抱えた。

ゆっくりと動いた口を見ると声はないが、それが意味を持っていることが分かった。

さきに、めいさんを、あんぜんなどこへもつてく。しのかは、ここでたいきしろ。

流石のドグさんでも大人のメイさんと身長の高い俺の二人を抱えて、屋根の上を音も立てずに飛び回るのは無理だ。

メイさんが心配そうにこちらを見るが、それに微笑んで大きく頷く。

ドグさんは「すぐもどる」と伝えると口当てを直す。一瞬吹いた強い風に瞬けば、そこにはもう二人の姿はない。

ドグさんが帰ってくるまで、バレないように息を殺していないと。

追手はまだこの辺りをぐるぐるとしている。張り詰めた空気に、呼吸がしづらい。

うまく息ができなくて、酸素を求めて大きくなりつつある呼吸音を両手で必死に抑え込む。

幾らか経ち。何とか正常な呼吸に戻ったときに、追手の一人が壁を殴り怒気を含んだ声を上げた。

「クソがつ！ どこ行きやがった！」

立ち止まった男は怒りが収まらないのか何度も「クソつ！」と馬のように強く地面を蹴っている。

なんであの男はこんなに必死になって俺達を見つつけようとしているんだ？

少しだけ……。気をつけて覗き込むと、男の苛立ちが思った以上に酷いことが見て取れた。

頭をガリガリツと乱雑に掻きむしった男は心底悔しそうに、思いもよらぬ言葉を吐き出した。

「――、――！」

舌打ちとともに静かな路地に響くその言葉を、うまく脳に記録できない。

「へ……なっんで」

思わず漏れた言葉に追手の男がゆっくりとこちらを振り返ろうとしたところで、身体に強い浮遊感と軽い衝撃が走る。

「アホ！ なに声出してんねん！」

「そんなことよりっ！ メイさんは!？」

ドグさんの激しく上下する肩と焦った声に、男に気づかれる前に俺を回収しようとして急いで来てくれたのが分かる。

でも、そんなドグさんよりも俺の頭の中はメイさんに危険が迫っているのではないか。嫌な想像をしまして、苦しくなる。

「はあ……だいじょーぶ、メイさんは安全なところに隠れとるよ。あの人、自分が狙われてたんの気づいとったし」

「よ、よかったあ」

「お前はメっメイさんの心配よりさっきのことを反省せえ！」

咬みながら説教を始めたドグさんに謝って、適当に相槌を打ちながら思考に耽る。
あぁっ頭が痛い。自分の小さな頭じゃダメだ。わかんない。

ドグさんに抱えられたまま、どんどん切り替わる景色に目を移す。

『せっかく、西の図書館を手に入れるチャンスだったのに！』

男は確かにそう言っていた。

でも、それが本当なら、メイさんの正体がバレていたということ。

どうして、いつから、なんで、どこからバレたんだ。考えれば考えるほど分からなくなる。
酷くなる頭痛に目を閉じた。

「なるほど、そう追手の一人がそう言っていたんですね」

ドグさんに連れていかれたのは、町の中でも人通りの多い道に面している少し寂れた宿屋。

宿屋の中は外見とは違いとても綺麗にされていた。

大きな町には図書館や国の重職のための秘密宿があると聞いていたが、どうやらここがそうみたいだ。

俺が付いたときには、メイさんはもうコーヒーを飲みつつ休憩をしていた。

メイさんとドグさんに先ほど男が言っていたことを伝えると、メイさんはコーヒーから口を離して微笑んだ。

「やはりそうでしたか」

「やはりって、メイさん知ってたの？」

コーヒーを一口飲んで、困ったような顔で笑うだけのメイさん。煮え切らない態度にモヤモヤしてきて、知ってたならなんで教えてくれなかったんだ、とイライラする。

モヤモヤイライラと頭の中で色んな感情が混ざって、目の奥がつんと熱くなった。

こんなことで泣くなんてかっこ悪くて嫌なのに。

目に力を入れて涙が零れないように必死になっていた。

すると、ぽんぽんと頭を撫でられる。横を見るといつの間にか隣にいたドグさんが「メ

「イさん」と咎めるように言う。

「シノカ。メイさんな、お前だけやなくてオレにも何も言っつてへんよ」

「え？」

嘘だ、顔を上げてドグさんを見ると、ドグさんは肩をすくめてメイさんに恨めしそうに視線を移した。

「この人の悪い癖や、確定していないことは言わへんねん。長い付き合いやからだんだん察せるようになったんよ」

「隠し事をしているつもりはないんですけど、不快な思いをさせてしまいましたね。シノカくんごめんさい」

「ううん、……俺だけが仲間はずれなら嫌だっと思ってただけだから。そうじゃないならいいよ」

「ありがとう、シノカくん」

申し訳なさそうに眉を下げているメイさんに、『今回は許してやろう』なんて心の中で偉そうに言っつて、メイさんの座るソファの隣に腰かけた。

「あれ？　そういえば、ならなんでドグさんがいたの？」

ドグさんに何も伝えてないなら、さすがにあのタイミングで助けに来ることは難しいのでは？　いくら二人が長い付き合いでも何も言っていないとそこまで完璧な協力プレイが可能なのだろうか。

「それは、あの屋敷で太陽の涙の保管場所を見せていただいている間に呼んだからですね」「呼んだっていうか、備えとけって感じやったけどな」

メイさんが俺とドグさん用に淹れてくれた紅茶を飲みながら、二人の話に耳を傾ける。

「こちらの意図を完璧に読んでくれると分かっていたので、確かに少し雑な連絡になってしまいましたね」

「雑すぎるわ、無音で二回だけ通信かけてきただけやったんやで？」

頬を膨らませて口いっぱいパンを頬張りつつ器用に喋るドグさんは通信機を指さした。

「あの場で連絡を取ることではできなかつたんですよ」

「ん？　あの場って、太陽の涙が保管されてたって場所？」

机の上に大量に置かれたパンの中から小さなものを取って、齧り付きながら問えば、メイさんは小さく頷いてパンを手を取った。

「私たちはあの豪邸におびき寄せられたのでしょーう」

大量に置かれたパンを机の隅に積み直して、メイさんは地図を広げた。そして今日回った場所に丸をつけていく。

町の中心部で被害が多くある中、最後に行った豪邸は少し離れた場所にあった。

そういえば、豪邸から帰る道は人通りの少ない道だった気がしたけど、あれは奥まった場所に豪邸があったからか。

「他の被害があった場所は場所同士が比較的近いんですよ」

地図を見ると確かに最後に行った豪邸以外は隣接しており、近場に密集している。

「そして、明日回る予定だった場所も近くにありません」

青でつけられた丸も、一本の大通りに沿うような感じで集まっていた。

「近場なら一気に盗めるからでしょうね。どこかの重要文化財が盗まれたとなれば、他の場所の警備が厳しくなるのは分かっていますでしょうし」

「同日に二つの地域で一気に、ってことはかなり手馴れてる奴らの犯行やろーな」

メイさんとドグさんが四つ目のパンを食べ終え、新しいパンを手にとったのを見て、こちらが気持ち悪くなる。

眉間に寄った皺を隠さず、半分だけ食べたパンをメイさんに押し付けて紅茶を飲む。押し付けられたパンを三口ほどで食べ終えたメイさんは豪邸の場所に大きな印をつける。

「ここから大通りに出るには、この一本道しかありません。路地はあっても行き止まりも多いこの道なら土地勘のない者を捕まえるのなんて容易いでしょう」

「ましてや図書館なんて、記録者とは違って訓練も受けてない運動もできなさそうなやつなら簡単やと思うやろな」

「じゃあ、相手は初めからメイさんが来ることをわかっていたってことなの？」

もしそうだとしたら……どこから情報が漏れたんだ。メイさんがここに来ることは司書の俺と記録者のドグさんしか知らないはず。

俺は決してそんな重要な情報を外に漏らしてない。ということは……。

チラッと目の前で未だにパンにかぶりついているドグさんを盗み見ると、目が見えないのにガツツリと長い前髪の奥の瞳と目が合ったのが分かった。

「うづんっ。阿保なシノカくんのためにゆーとくけど、オレじゃないからな。お前より長いこと記録者やってんねん、そんな初歩的なミスせんわ」

「ご、ごめんさい」

ふんっ、と声を出してそっぽを向いたドグさんに疑ってしまったのが申し訳なくなる。

確かに優秀で有名な記録者の彼が、情報漏洩なんてつまらないミスはしないだろう。

じゃあ。俺がなにかしてしまったのか？ そうだとしたら、どうしよう。

ぐるぐるとどこで情報が漏れたのか考えるが全く思い当たりがなくて、どんどん焦りだけが積もっていく。

「シノカクんのせいでもありませんよ」

ぎゆううつ、と膝の上で握った手を両手で取って微笑んだメイさんは「情報が漏れたわけではありません」そう言っただけの頭を優しく撫でる。

「こういつた歴史に大きく関わる事件には、歴史の記録をしている図書館が出てきやすいというのは予想ができることです。シノカクくんは悪くありません」

「むしろ、そのことを予測できんで図書館をここに呼び出した記録者であるオレの責任や」奥歯を強く噛みしめ、口元に寄せられた拳がギリギリと音を立てそうなほど握りこんだドグさんはとても悔しそうに「オレは何年記録者やっとなるんや」と自身を許せない様子だった。

「お二人とも、ご自身を責めるのはやめてください。確かに危険はありましたけど、私が行ったかいはありましたよ」

片手で俺の頭を撫でたまま身を伸ばし、ドグさんのことも撫でながら、温かな声には似

合わぬうつそりとした顔でメイさんは笑った。

「恐らくですけど太陽の涙は盗まれたのではなく、わざと盗ませたんだと思います」

「なにそれ！」

「まじかあ、面倒なことになったなあ」

驚いたのは俺だけでドグさんは大きなため息を吐いて、天を仰いだ。

そのまま「クッソだるうつ」と愚痴をこぼし始めた。呆れた表情で驚きは感じない、もしかしたらドグさんは薄々分かっていたのかもしれない。

そんなドグさんに笑いながら、メイさんはゆっくりと説明を始めた。



この窃盗事件の話聞いて、まず違和感を覚えたのは場所と数。

個人や小さなグループでは賑わう町でバレずに窃盗なんて難しい。しかも、その窃盗した品物の数、場所の多さ、これは素人には無理です。念入りの計画が必要でしょう。

場所で特に気になったのは窃盗が起きている所が密集している中、一つだけ違う区域か

ら窃盗されていることでした。

ここには何かある、そう思いドグさんに話そうとしたときには、ドグさんの方から現地に來てほしいと要請が來たんです。

ドグさんもこの窃盗は何かあると思っていたんでしょね。

そして気になっていた窃盜場所。

最後に行った豪邸のお屋敷ですね、あそこに着いてご主人のお顔を見たときに『ここは窃盜されていない』という一つの仮定が現実味を帯びてきました。

彼は歴史的重要な寶石を盗まれた人間という顔には見えませんでした。他に回った盗みに入られた家や施設の人たちは悲壯感漂う顔に国家からの使いだという私たちにも疑惑の視線を向け、警戒していましたから。

しかし、彼は私たちを疑うことなく招き入れ、質問もそこそこ保管庫を見せた。まだ、保管庫の中には太陽の涙ほどでは無いとはいえ、歴史的遺産になりえるものが多くあったのに、ですよ？

私ならそんな怖いことできません。

だって、国家の遣いを名乗った窃盜犯かもしれないじゃないですか。

ご主人の態度で疑いがさらに強くなっていました。一番驚いたのは保管庫の中を見たときです。

綺麗すぎるんですよ。

あれでは、どこに太陽の涙があったのか下見をしたことがあったとしか思えません。

下見はどうかして行なつたと仮定しましょう、しかしそれなら新たな疑問が残ります。

『太陽の涙』を入れていたケース。鍵がついていたそれを犯人は蓋の部分を変形させ、無理やり開けています。

下見があつたのなら、鍵があることに気づいていたはず。

それなら、鍵の対策をしている筈です。

だって『太陽の涙』の由来はその見た目からだけでなく、零れ落ちて弾ける涙のように脆く儂い宝石です。

つまり、蓋の破壊を行えば本体を傷つける可能性が高いんです。

下見から犯行まで完璧な犯人たちが、そんな有名な話を知らないわけがありません。

しかし、犯人は強硬手段をとつたんです。おかしいですよね？

それにケースの中に態々ふかふかのクッションを入れていたご主人も勿論それを知っている。なのに『太陽の涙』が壊れていないかの心配は一切していなかった。

これも普通ではあり得ません。

そして犯人は、宝庫に繋がる隠し扉の鍵は手に入れていた。それも、ご主人の寝室からとつてきていました。

ドアのカギ穴を確認したときに傷や歪みは確認できませんでした。

一番丁寧に扱うべき宝石入りのケースは雑に扱われていて、ドアなんてどうでもいいとはちやんと鍵を探されている。

そう考えると、この窃盗はおざなりな窃盗犯によるものに聞こえます。

では、ここで一つある仮定をして、もう一度現場の整理を行いましょ。

その仮定内容は……。

ご主人も窃盗犯の中で、この窃盗は自作自演で、獲物を呼び寄せるためにした大掛かりな罠である。

そう考えると、すべてが変わって見えてきます。

『寝室の鍵がなくなっていたのでそれを使われたんだと思います』

なんてご主人は言っていました。が、寢室にあったという保管庫を開く鍵もご主人が自分で持ってきて開けた。そして仲間に預け、無くなったと主張する。

宝石に傷がつかないよう、ケースを壊す前にケースから太陽の涙を取り出し、鍵をかけてからケースを壊す。

そのほうが窃盗された感じも強くなりますからね。ご主人に疑いは向きにくいでしょう。

ご主人はケースの鍵の場所を知る、唯一の人ですからね。

それと私がケースの鍵を隠していたという絵画を見たとき、違和感があったんです。

他の絵画や重要な品は、ご主人が一ヶ月放置していたこともあり、少し埃がついていました。

けれど、そのケースの鍵がある絵画だけは埃が人の手形状に取れていました。

埃が消えたことで浮き出ていた手跡は二つ。しかも、大小と大きさが違いました。

大きな手の人と小さな手の人が絵画に触れて、その先にある鍵に触れたということです。

『鍵には気づかなかったんでしょうね』

なんてご主人は言っていました。が、少なくとも彼以外にもう一人は、鍵を隠していた絵画に触れているんです。

それは、ご主人に仲間がいた証拠になるでしょう。

では、なぜご主人とその仲間が大量の窃盗と、自作自演まで行なったのか。

一番に浮かぶのは、それをすると何が起きるかです。

多くの重要な遺産が盗まれ、窃盗犯は集団として動いている。また重要な遺産を奪われる可能性がある。

歴史的重要な遺産がこんなに奪われたことは、歴史としての記録は必須であり、これ以上起きてはいけないことです。

つまり、それは、この区域を担当している図書館が派遣される可能性がある。ということです。

西の図書館。イールイ・メーレント。

世界最長で最大記録量を保持する図書館であり、その脳の価値は計り知れない。

西の図書館を捕まえることができれば、百人が一生豪遊してもお釣りがくるほどの生活ができるのは誰にでも分かることです。

「以上のことから、この窃盗は歴史的遺産と図書館を狙ったものと考えるのが妥当でしょう」

そうやって、淡い緑色の瞳を細めて笑うメイさんは、苦しそうに見えた。



説明を終えたメイさんはドグさんに目星のつけた怪しい場所を教え、調査してくるよう
に言った。

もし、相手の本拠地が分かるようなら危険にならない程度に追跡するように伝えると、
ドグさんは嬉しそうにコクコクと頷く。

その姿は、まるで犬が好物の前でマテをしつつ尻尾だけを激しく振って前傾姿勢になっ
ている様子にそっくりだった。

「ドグさん、できそうですか？ 多分相手は組織的に動いています」

「大丈夫やって！ 本拠地見つけたら、記録できそうな書類もとってくるな！」

オレ記録者やもん！ と胸を張ったドグさんに微笑んでその肩に手を乗せ、目を合わせ
る。

「無理だけはしないでくださいね。いってらっしゃい」

「……おん、いつてくる」

フードを深くかぶり直して、窓の淵に足をかけたドグさんが「あ」と振り返る。

「シノカ、オレがおらん間メイさんを頼むな」

「はいっ！」

「クカカツ、これで安心やな！ んじゃ、今度こそ行ってくるわ！」

「いつてらっしやいー！」

穏やかに口角を上げて笑ったドグさんは口当てを付けると、窓から飛び出していった。

窓から身を乗り出し、顔も見えなくなったなか、ひらっと軽く振られた手がとてもかっこよく見えた。

ドグさんなら、心配ないだろう。

窓から外を見ても、もう屋根を駆け抜ける影すら見えなかった。窓を閉めて部屋を見ると、ドグさんがいなくなつて少し広くなった部屋はなんだか物足りなくて寂しく感じた。

窃盗犯のアジトの捜索に行ったドグさんから、それから三日に一度必ず手紙が届いた。内容は報告だけ。返事も書けぬほどいろいろな場所をすごい速度で動き回っているドグ

さんから『たぶん、ほんきよちのぼしよ、みつけた。きたのなか、おく、いつてくる』という手紙が届いた。

本拠地が分かったのか、と安堵して次の報告を楽しみに待とうとメイさんと笑いあったのに。

その報告の手紙から一週間経っても、ドグさんからの手紙が届かなくなった。

「ドグさん……」

通信機に向けて語り掛けても、返事もなければ自分の声が彼に届いているのかも分からない。

目の奥がじんじんと熱くなる。

ドグ・陶兎。ドグさんは記録者の中でも最強と謳われている。

施設にいるときに受ける体力調査。かなりキツいと有名なそれを彼は常に満点を取り続け、諜報活動のテストでもいつもトップを獲得していた。

勉強は苦手だが、身体の使い方は一等上手く抜群のセンスと才能の持ち主。

司書になるための教育を受けていた自分でも「西の記録者は最強だ」と、よく聞いていた。

そんなドグさんにもしもの事なんてありえないって、思っていたけど。

でも、もしも、連絡も取れないようなピンチの中で独りになってしまっているんだっただら。

敵に捕まってしまっているようなら、助けに行くべきなんじゃ……。

『シノカ、オレがおらん間メイさんを頼むな』

クソツだめだっ！ 俺が動くつてことはメイさんが危険になってしまう。

記録者でもなく、戦闘の才能もない自分にはメイさんを守りきる自信がない。ああ、俺は、なんて……。

「俺はなんて、役立たずなんだろ……」

溢れてきた涙をメガネの下から無理やり入れ込んだ拳で拭おうとする。うまくいかなくて、痛くて、もっと流れてきたけど優しい涙の止め方なんて知らない。

ドグさん戦闘訓練が辛くて涙が滲んだ時、ドグさんは笑いながら硬い手の平で頭を痛いほど撫でてくれた。痛くて文句を言いながら怒れば「すまんって！」なんてもっと大きく

笑って服を被せた硬い親指で涙を止めてくれた。

もう、ドグさんのしてくれただけ泣き止み方しか覚えてない。一人の時にどうしてたかなんて覚えてない。

だって、人は一度幸福を知ってしまったらそれを忘れられなくなってしまうんだから仕方ないじゃないか。

どんどん流れ落ちる涙が口にまで入り込んで、しょっぱい。

ぎゅうっと閉じた瞳が写す闇に勝手に怖くなってきて、椅子の上にいるのに膝を抱え込んで顔を埋めて座る。

上下する肩にうまく吸えない息が苦しい。温もりを求めて、自分を自分で抱きしめると、頬が暖かく包まれた。

ゆっくり顔を上げると、優しく穏やかな緑が俺の目を覗き込んでくる。

「シノカくん」

ドグさんと比べてやわらかで、触り心地のいいハンカチを付けた親指が目尻を撫でた。優しさで慈悲を感じるメイさんらしいその触れ方に安心するのに、ドグさんと違いすぎ

る感覚に悲しくもなる。

えぐえぐと泣き止まない俺にメイさんは心配そうにゆっくりと瞬き、涙を拭っていた手で、そっと両頬を包むと俺と目を合わせる。

「一緒にドグさんを迎えに行きましょう」



メイさんに手を引かれて馬車や汽車に乗り、街から離れていく。

あそこで待つていないとダメなんじゃないの『俺たちだけじゃ危ないよ、どこに行くの?』不安で仕方なくて、そう聞いてもメイさんは「大丈夫です」と答えるだけ。

移動する足を止めることはなくて。

メイさんの表情がいつもより強張っているような、すごく真剣なのが伝わって俺はそれ以上何も言えなかった。

連れてこられたのは西の地方と北の地方の境界門。

検問を抜けるために人が行列を作っている、俺たちが門に近づくと検査員が「こちらです」と言つて、大きな門の横にある小さな扉の方に通してくれた。

門を潜らずに抜けた先は北の地方。西の担当であるメイさんと俺がなぜ、北に？

「お久しぶりですね、メイさん」

急にかけられた声に驚いて、メイさんを隠すように前に出ようとすれば片手でそれを止められた。

にやにやと不敵な笑みを浮かべる全身真っ黒の軍服のようなものを着ている細身の男と、その男と似た形状の服を身に纏う同い年くらいの青年。

むしろ俺の横から一步前に出て男達に近づいたメイさんは優しい目をしている。

「ふふつ、キミが敬語なんて気持ち悪いね。ジン」

メイさんは男に近づくと掴む勢いで細身の男の頭をわしゃわしゃ雑に撫で「ふふつあはあは」楽しそうに笑う。

「ちょっと、やめろっ！ もう司書じゃないんだぞ！」

「はいはい。そうだったね」

「まったく……そこにいる君が西の新しい司書くんかな」

「えっ！ は、はい！」

細身の男は右手を前に出す。日の光に銀色の瞳がキラキラと反射した。

オーラというのか雰囲気独特で、どこかこの男が只者ではないと思わされる。

二歩踏み出して、差し出された手を取る。

特別背が高いわけでもガタイがいいわけでも強面というわけでもない。それなのに圧倒されてしまうのはなぜなんだろう。

「初めまして。ワタシは北の図書館、ジン・M・ベルガーネ」

「はっはじめまして！ 西の司書、シノカ・ペンテユです」

月を思わせる濃い金色の髪を靡かせて、微笑むジンさんはまるで舞台の主人公のようで自分とは違う次元の人に思えてくる。

「確か、シノカくんは十二歳だったかな？」

「は、はい」

「その若さでかなりの高身長だな、同い年でもスイエとはかなり差がありそうだな」

ジンさんがそう言つて振り返ると不服そうな顔をした後ろにいた青年が近寄つてきた。「俺、別にチビじゃないから。はあ」

面倒くさいと言つうようにジンさんを睨みつけると、青年は地面に片膝をつきメイさんに向けて頭を下げた。

「お久しぶりです西の図書館イールイ・メーレント様。お元気そうで何よりです」

片膝をついたまま地面と睨めっこをした状態で、先ほどと同一人物には思えないほどハキハキと話す青年。

その光景を見て驚くのと同時に思い出した。

図書館は自分達、司書や記録者とは違つてかなり目上の人だということ。

そして、記録量一位の図書館であるメイさんとは気軽に話せるような関係自体が可笑しいんだ。

「スイエくんお久しぶりです。相変わらずリリアさんの教育が行き届いてますね、北は」

「ありがとうございます、どこかのジン様とは違いリリアは教育熱心ですから。リリアも褒めて頂けたと知れば喜ぶでしょう」

「むっ。スイエよ、今ワタシを馬鹿にしなかつたか？」

「さあ、何のことでしょうか？」

「ふふつ、もう大丈夫ですよ。立ってください」

ついていた方の膝を手で払って砂を落とすと、青年は無表情のまま俺の方を見た。

「司書のシノカさんは初めましてでしたね。北の記録者しております、スイエ・ピースと申します」

「あっ、西の司書、シノカ・ペンテユです」

ジンさんはこの人と俺が同じ年と言っていた。

同じ年で、こんなにも差があるのか。

自分がジンさんにした挨拶を思い出しては、恥ずかしくなる。

よろしく、と交わされた挨拶だが視線は交わることがない。彼にとって自分は見る価値もない、ということなのか。

「それでは馬車を用意させていますので、そちらまで案内させていただきます」
歩き出したスイエさんに続いてジンさんとメイさんの後ろからついていく。

「スイエそろそろ、そのかたつ苦しい言動はやめろ。二人とは長く行動することになるのだから」

「そうですね。私も気にしませんよ」

「……ワカリました。リリアさんに怒られたらお二人が庇ってくれるんすね」

「かはっ！ 今いないんだ、合流してから黙ってればバレないぞ」

先ほどから名前が挙がっている、リリアって。聞いたことがある名前に首をかしげているとジンさんが俺を見ながらニヤリと笑う。

「ユーノスキ・リリア。ワタシの自慢の司書さ」

「その自慢の司書はいつもジンさんのせいで胃痛と戦ってるんすけどね」

「胃痛はアイツの友達のようなものだろ」

ばつが悪そうに口を尖らせるジンさんは大きな馬車に乗り込み、足を組む。全員が乗ると音もなく進みだした馬車は揺れも少なくて高価なものだというのが分かった。

「シノカくんよ。ドグがいない今、メイさんからちゃんとした説明もなかっただろう？」

「え、はい」

ため息をついて「相変わらずだな」と困ったように笑ってメイさんに目を向ける。メイさんが首を傾げると先ほどより深く息を吐いた。

「簡潔に言おう。君たちの記録者と同様に、ワタシの有能な司書とも連絡がつかなくなつた」

「え、それって」

心臓が大きな音を立ててうるさくなる。

「リリアもドグと同じ闇市を捜査に行つて、音信不通になったということだ。あいつが連絡を寄せなくなるのは、何か面白いことが起きているはずだぞ」

どこか楽しそうなジンさんと、彼に向つてジト目で呆れたような、疲れているような顔をするスイエさん。

緊迫した内容のはずなのに、そんな二人を見ていたら苦しかった鼓動は正常に戻つていて、隣で心配そうに俺を見ていたメイさんの肩の力が抜けたのが分かつた。

「ドグとリリアは優秀で、なくてはならない存在だ。あの二人を失うわけにはいかないし、それに何よりこの事件の記録はまだできていない」

「闇市の場所は掴めてるんですよね？」

「北の中樞、ギリヤール町のある酒屋の地下で行われている」

拡大した町の地図を広げたジンさんは酒屋に丸を付け、そこから線を引く。

「この酒屋は、一見さんはお断りでな常連に紹介されなければ入れない。しかも、地下に行くとなると合言葉も必要になる」

「なるほど」

「しかも酒屋スペースの先は複数の部屋と道が不規則に続いている。一階から地下に行くにも迷路のようになっていて通路を進んでいく必要がある」

「面倒だね。通っていたりリアさんもいないしどうするんすか？」

スイエさんの言うとおりだ。

リアさんが酒屋の常連に近づき仲良くなって何度も通っていたらしいが、リアさん本人がいなくて今、リアさんの紹介で入ることもできない。

「方法がないわけではないのでしょうか？」

沈黙を破ったのは不機嫌そうに眉間に皺を作るメイさん。ジンさんに向けて、早くと急かす様に顎を動かす。

「クククッ、そう急かさなくても話すとも。シノカとスイエ、お前達に重要な任務を与える」

流れる汗にゴックと飲み込んだ唾の音は俺からなのか、スイエさんからなのか。

「お前たち二人には『商品』として潜入してもらおう」

緊張と高揚で震える体に鞭打って、ジンさんの言葉の続きに耳を澄ます。

「危険でかなり高度な任務だ。出来るか？」

「はー」

出来るなんて分からないし、不安だし、自信なんて全く無かった。けれど、ジンさんに問いかけられると何故か反射的に返事をしてしまった。

ニマニマと満足げに笑って、足を組み直したジンさんは「では、作戦内容を説明する」と酒屋の見取り図を取り出し、楽しそうに話し出す。

「今回ワタシ達は客としてではなく、商人として酒屋に入る」

「商人のフリはジンと私。商品はシノカくとスイエくん担当ってことですな」

「そうなるな。シノカとスイエには悪いが少し粗末な恰好をしてみらうぞ」

「それくらい大丈夫っす」

「ここにいる監視役に商品を見せ暗証番号を伝え、出品料を払う。それだけで簡単に中に入れる」

酒屋の裏にある扉を指して扉の両サイドに小さな丸を書く。所謂、正面突破。

一瞬身震いするが、隣にいるメイさんとんとんと背を叩いてくれているので今から緊張していく体から力が抜けていく。

今、こんなんでも本番大丈夫かな。

不安になって唇を噛みしめると、額に軽い衝撃を感じる。前を見ると俺の額に人差し指を押し付けた状態でジンさんがこちらをジッと見ていた。

「大丈夫だ、寧ろそのまま緊張している。そのほうが悪い商人に捕まった無垢な少年感が出るからな」

「へ……。ありがとうございます」

全てを見透かしてくるような図書館二人の行動に驚きながらも、とても安心する。俺を俺として信用して必要としてくれている。

二人の期待に応えられるように、スイエさんの迷惑をかけないように頑張ろう。

「もう大丈夫です、説明を続けてください」

両頬を一度叩いて、ジンさんとメイさんの声に耳を傾ける。

絶対ミスしないよう、作戦内容を一字一句違わず、脳に焼き付けた。



「申し訳ありません、ご予約はありますか？」

出来るだけ大きな背が小さく見えるように、真っ暗な中で背を丸めながら震える右手を

同じく震える左手で抑え込む。

「予約はないが、いい品が手に入ったんだ。両方とも生きが良いし何よりなかなかの上物だ」

「それに私たちは二十の八を持っていきますし、二百ほどお支払いいたします」

二十八が人身売買の暗証番号で二百は入場料。

この二つを知っているということは、酒屋の裏の顔を知っていることになる。

「確認します」

少しの揺れの後、真つ暗だった視界に光が差し込む。しかし、そこで上を向かず震える体に大丈夫だと言い聞かせ目を閉じた。

すぐにまた小さく揺れ、臉を通して暗くなったのが分かった。

「なるほど、失礼いたしました。品物の確認をいたしますので先の部屋でお待ちください」

「ああ、ありがとうございます」

ガラガラと響く音に、作戦の第一段階が成功したことに安堵する。

コン、コン。

上から鳴った音は俺を心配してくれているものだというのが分かる。コンと一度ノックを返して、力が入りすぎていた肩を下す。

「失礼するぞ。上物だ、丁重に扱ってくれ」

「はい、かしこまりました」

ガラガラとうるさかった音が止まり、また小さな揺れとともに視界が明るくなった。

「出てきてください」

よく聞いたことのある声なのに、いつもの白茶色ではない黒い髪のメイさんが上からこちらを覗き込んでいる。

うつすらと開かれた瞳は金色であの温かい緑が恋しくなるが、なにより笑顔なのに一切優しさを感じさせないその表情に恐怖を感じる。

ゆっくりと酒樽の中から出れば、地面に背を丸めながらしゃがみ込むスイエさんの姿が目に入って、思わず「ヒュッ」と喉が鳴る。

「座らず立て、しっかりと見てもらえんだろう」

そんなスイエさんの腕を掴んで無理やり立ち上がらせたジンさんも声だけは彼と同じものだ。だが、髪は茶色で目は黒い。

変装のせいでジンさんだと知っているのに、違う人に見えて、本当に人身売買の商人に見える。

メイさんはひたすらニコニコ笑っていない笑顔で俺の肩を掴んだまま隣に立っている。

いつもの彼とは、似ても似つかない雰囲気が異様でうまく息が吸えない。

図書館って演技力も求められるのお？

バクバクなる心臓に、乾いてきた口の中が鉄の味が広がり、喉が痛みを訴える。

「なるほど、確かに。これはかなりの上物ですね」

「だろう？ 利用者様のお眼鏡にも叶うと思ってな」

「ええ、きつと。このような良き品をどこで手に入れたのですか？」

腰に拳銃を挿した男は、俺とスイエさんの周りをぐるぐると回って見て、立ち止まり髪や顔に触れてくる。

髪はその毛並みと染めてないかを確かめるみたいに、旋毛から毛先までを流れるように見られ。顔は顎を掴まれ傷がないか見られた後、目を覗き込まれた。

「それは教えられない。こんなにいい品が取れる場所を簡単に言っちまえば商売あがったりだろう？」

「急いで連れてきたので汚れていますよ、磨けばもっと美しくなりますよ。病気もなく、まさに健康優良児です」

特売品を売りつけようとする店屋の店主みたいに俺たちを売り込む二人に、男はゆっく

り頷いた。

「商品の状態の確認、大丈夫です。お二人とも控室にどうぞ、ご案内いたしますよう」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

男は胸に手を当て二人に深く頭を下げると、二人を連れて外に出ていく。途中振り返って奥に向かって声をかけた。

「オイ、新しい商品だ。洗ってしっかりラッピングしておけ」

「「かしこまりました」」

出てきたのは二人の女性。如何にもメイドです、という服装で小さく頭を下げた彼女たちは手に持っていた手錠を俺たちの両手につけた。

メイさんとジンさんは控室と言っていた部屋に連れていかれてしまっていて、もう姿は確認できない。

押し込まれた風呂場でタイルで冷たい地面に座らされたまま、温いお湯をかけられる。

可動域が狭くなった手に不安感が募る。

上物であれば跡が残ることを恐れ、手錠があつても緩いだろう。そんな手錠程度スイエにとつてないも同然だ。そうジンさんは言っていた。

ここまで彼の予想通りであるが、この手錠が緩いのかどうか、俺には判断できない。チラチラとスイエさんのほうを見るが、いまだにオロオロとしている彼に煽られて自分も不安になってくる。

演技なのか、手錠がきつくて驚いているのか。どっちなんだろう。

全身を洗われて着せられたのは、ひらひらとした布で水色を基調に作られた綺麗な服。隣のスイエさんが青を中心に、可愛らしい少年のような服を着せられてのを見る限り目の色と合わせた服を着させられているんだろう。

手錠を引かれ、メイドさんたちについて歩いていく。

大きな扉を彼女たちが二人掛かりで開けると、漂ってきた異臭と無数の声に顔が歪む。

「うああああああああ」

「いたい、いたいよお」

「ぎやがうがうつ、はっはっはっ」

「あすけて……」

人の声や獣の雄叫び。多くの生き物が詰め込まれたそこは、一本道の両サイドに色々な

大きさと形の四角い鉄の箱が積まれている。

箱は小さな空気穴しかないものから、鉄格子で囲まれていて中が良く見えるものまであった。

箱の中は汚れており、中にいるモノも汚れているのが遠くからでも分かった。

「うっぐぶ」

異臭の正体はその不衛生からきているのだ。想像よりも何倍も惨い光景に、逆流してきた胃酸を吐き出さないように止める。

涙が流れ中に入りたくなくて足を止めたいのに、引かれる手錠に抵抗できず、中に引きずられる気持ちで入っていく。

真つ直ぐ両側から聞こえてくる声に耳を傾けないことを意識して、薄目で浅い呼吸をして進んでいくと、もう一度大きな扉を開けた。

扉が閉じられるのと同時に聞こえなくなった声。やっとしつかり吸えた空気の中の嫌な匂いを出しきるように深く息を吐く。

扉から進んですぐ、綺麗な木製の扉の前で手錠が外された。

「こちらで呼ばれるまで待つようにしてください」

「何かあれば紐を引き、ベルを鳴らしてください」

メイドたちは口早にそう言うと、木製の扉を開き、中に押し込んだ。

ガチャッ、カッカッカガチャン。

振り返った時にはもう扉は閉まっていて、いくつもの鍵がかけられる音だけが響いた。



「リリアさん！」

「ん？ スイエ？！」

隣にいたスイエさんは部屋の奥に目を向けた瞬間、走り出した。

部屋の奥の一面は鉄格子で覆われ檻のようになっていた。しかし檻の中は綺麗な部屋でその中の大きな椅子に座っていた男の人がスイエさんを見て驚いた顔でいた。

リリアと呼ばれた男性は檻から腕を伸ばして、スイエさんの頭を撫でる。

「スイエ、何でここにいるんだ？」

「あ、それは」

「いや、やっぱいいわ。どうせあの人が行くって聞かなかつたんだろ？」

困ったふうに笑った男性は金色の目を細めて訝しげな顔で、スイエさんからこちらに視線を移す。ジッと俺を見た後、目を大きく開けて一人で勝手に納得したのか小さく頷いた。

「お前は西の司書シノカだよな？　俺は北の司書、ユーノスキ・リリア」

こちらを見て笑ったリリアさんはスイエさんを撫でていないほうの手を伸ばした。その手を取り、会ったこともないのに俺を当てたことに驚きながら、軽く頭を下げる。

「西の司書、シノカ・ペンテユです。あの、なんで俺のこと知ってるんですか？」

「各地方の担当者達の顔や名前、基本的情報は叩き込んでるからな。特にお前は西の司書、注目しないほうがおかしい」

自身のこめかみを軽く指でノックして笑ったリリアさんは、大きな身体で気難しそうな容姿に反してとても優しそうに見えた。

「そうだ、スイエ。俺の予備の眼鏡を持ってるか？　捕まった時にコンタクトも取られて見えにくいんだよ」

リリアさんは黒を基調としたかつちりとした服にいたるところに金の装飾がされている衣装に身を包んでいる。

制服のようなソレは筋肉質で鍛えられた彼にとっても似合っているが、どこか着させられ

てる感が拭えない。

「あ、ジンさんから預かってます」

「つたく、本当にあの人は。どこまでが計画のうちか分かんないなあ」

眼鏡をかけたリリアさんはずっと睨むように細めていた目を開け、数度瞬くと軽く息を吐いた。

「捕まった時に変装で使ってたコンタクトも取られて、なにも見えなかったんだよ。睨むような顔をしてごめん、怖がらせただろ？」

「いっいえ、大丈夫です」

「そっか、ならよかったわ。さて、そんじゃあそろそろ、お前らの作戦を教えてくださいませんか」
金色に輝く目を歪めてやれやれといった様子なのに、どこか楽しそうな顔をしたリリアさんに今後の作戦について説明する。

図書館の二人が来ていることを話したが、リリアさんは驚くこともなく「だからか」とだけ溢すと悩むような素振りを見せた。

「あとジンさんからの伝言で、お前は好きに動け。というのがあります」

スイエさんが言えば、リリアさんは吹き出して笑い、腹を覆って肩を震わせた。

「ジンさんがそう言うならそうさせてもらおうわ。二人とも、悪いけどこの鍵開けれそう

「ななにかもつてない？」

「リリアさんが指したのは檻につけられた鍵。大きな南京錠で、壊すことは難しそうだ。」

「俺たちも着替えさせられてますし、何よりそんなもの持ち込めてないです」

「そうか……」

「あ、これならどうつスカ？」

「スイエさんは髪につけられていたピンを取ると、それをリリアさんに渡した。」

「ん？ いいのもつてんじゃない」

「リリアさんが檻の中から腕を伸ばして鍵穴にピンを差し込んでカチツカチャイジリだせば、カッチャンと甲高い音がなり鍵が外れた。」

「これ、鍵してるように見える感じで付けれるか？」

「了解っス」

「簡単に鍵開けを行なったリリアさんは鍵を付け直させると中から開けて、檻から出てきた。」

「うん。俺の方はこれで大丈夫だから、二人は作戦に戻りな」

「リリアさんは一緒に来ないんスカ？」

「俺は好きに動いって言われてるから、ジンの作戦がより確実なものになるように動くだけだからな。お前らと行動できないな」

「そっすか……」

眉間にシワを寄せてたスイエさんは俯むき気味で凄く機嫌が悪そうに見えた。

俺と二人なのが、そんなにイヤなのかな。

たしかに自分は記録者じゃないから、スイエさんにとっては邪魔かもしれないけど、そんな露骨な反応しなくなったっていいじゃんか……。

握った拳に力が入る。

俺自身の無力さなんて、自分が一番わかってる。でも、それでも何かしたいと思うのは、いけないことなの？

「スイエ、シノカ、不安そうな顔するな。俺がいなくてもお前たち二人で出来るってあの人が言っただら？ それなら絶対大丈夫だ」

リアさんはそう言っつて、俺たちの頭を雑に撫でる。

「はい」

小さく返事をして、顔を上げたスイエさんの目に滲む不安が、横から見ていた俺でも分かった。

俺と行動するのが嫌なわけじゃなかったのかあ。

キリっとしてて出来る人のイメージがあっただけど、そんなことないのかもしれない。

「スイエあそこから外に出れる。持ち上げてやるから、安全の確認をしてきな」
「分かりました」

リリアさんが指したのはダクト。人一人なら通れそうなソレは高い天井にあるが、リリアさんの肩を踏めば余裕で届いた。

「通れそうっスね。少し先も見えてきます」

「気をつけてな」

スイエさんがダクト入っていくのを見送ると、リリアさんは俺のほうに「ごめんな」と言いながら苦笑した。

「え、なにがですか？」

急な謝罪に一拍遅れつつ何とか返せば、リリアさんは視線をダクトに戻した。

「スイエさ、ちよつと取っ付きにくく感じるだろ？ 悪気はないから許してやってな」

「あつ！ いえ、そんな、大丈夫です。俺みたいな新人が入らないってわけじゃなさそうなのは見てて分かりましたから」

正しくは、さっきの目を見てやっつと分かったんだけど。

「気に入らないっていうよりは、ライバル意識してしまってるんだと思う」

「ライバル？ スイエさんみたいな優秀そうな人が俺なんかを？」

「なんかじゃないだろう、お前はさ西の司書だろ？」

「はい」

「俺らのボス、ジンさんはさ、昔、西の司書だったんだぞ。お前の前任があの人だった、俺らにとっちゃあの人の後釜であるお前が気になって仕方ないんだよ」

金色の目が輝いて真っ直ぐ俺を捉える。

そうだ。そういえば、西の司書だったジンさんが図書館になるから俺が司書になったんだ。

メイさんと凄く仲が良さそうで作戦を立てるときに息がぴったりだったのは、長い間一緒にいたからだだったのか。

納得するのと同時に、ちょっとムツと感じてしまう。

「俺達のボスの後釜に選ばれた、同じ年の少年。ライバルって思っても仕方ないだろ？」
リリアさんは俺の膨らんだ頬をつついて楽しんで笑った。

「同じ年……。俺、もつとスイエさんと仲良くなりたいんですけど、ガンガン話しかけてもいいんですかね？」

「あひゃひゃつ、うん、いいと思う。どんどん話しかけてやれえ？」

腹を抱えて笑ったリリアさんは、俺の頭を撫でつつ空いたほうの手で目尻に浮かんだ涙

を拭った。

「お前面白いな、気に入ったわ。同じ司書同士仲良くしような」

「はっはい！ よろしくお願いします！」

「二人とも煩くしすぎっスよ、何してるんですか」

急にかかった声に驚いて上を見ると、ダクトから顔を覗かせてムスウとしてるスイエさんがいた。

「とりあえず進めそうな所と、これ見つけたんでシノカさんも着替えてください」

投げ渡されたのは、ツナギの作業着。

ここの闇商の従業員である証拠のマークが付いてて、そういえば、ここに来るまでの道中でも何人かコレを着ているのを見た気がする。

ありえ、でも、確かこれって。

「大人ばっかりが着てましたよね？ 俺が着てバレませんかね……」

「大丈夫だろ、シノカ背が高いし。何より、今のお前は商品として仕上げられてるからかなり大人びて見えるぞ」

リリアさんが「大丈夫」と肩を叩くとホントに大丈夫な気がしてきた。

とりあえず、着るだけ着てみようとしてツナギに袖を通す。

「うん、似合ってるっスね」

「これならバレなさそうだな。よし、スイエも着替えてるだろ？ 服貸しな」

元々俺たちが商品用に着ていた服を受け取ると、リリアさんはそれを部屋の奥のカーテンの中に少しだけ見えるように隠した。

「スイエ引き上げてやってな。シノカ、ダクトに上げるぞ」

「はい！」

ツナギの袖を折って動きやすくして、リリアさんの肩に乗る。スイエさんに手伝ってもらいながら、ウゴウゴとなんとか這い上がる。

「二人とも、任せたぞ」

拳を突き出すリリアさんに頷いて、ダクトの蓋を閉めた。

ふう。一息ついてどう動くのか聞こうと前を見ると、目の前には見知らぬ女の子がいた。

「誰え?!」

「はあ？ 何言ってるんスカ。スイエですけど」

耳を塞いで「てゆーか、うるさいんで静かにしてください」そう言った声は完全にスイエさんだけど、その声を出しているのはメイド服を着た可愛らしい女の子だ。

「スイエさんって、女の子なの？ ですか？」

「いや、一緒に風呂入れられましたよね？ 俺はツナギがデカすぎるんでこれしかなかつただけっスよ」

匍匐前進ほふくぜんしんで動きにくいはずのスカートで、どんどん進むスイエさんの後ろをついていく。

「すごいね。女の子にしか見えなかったよっです」

「いや、よくあることなんで……俺はジンさんよりもリアさんよりも小さいから、潜入の時は女のフリとかよくするんスよ」

少々強張った声で答えたスイエさんに、話を終わりにしたそうだと分かった。でも、俺はガンガン話しかけるって決めているから。わざとその空気を無視して話を続けた。

「よくあるなら尚更すごいです。俺、普段は外にも出ないんで北の皆さんと一緒に情報収集に行ってるの、めっちゃ羨ましましたよ」

「……俺はシノカさんのほうが羨ましいよ。会ったばかりでジンさんに気に入られてたし、あの西の図書館の司書をやってる」

ボソボソと聞こえるか分からないくらいの声で紡がれるのは、思ってもみなかった言葉たち。

「しかも、タツパもあるし……」

更に小さな声で呟かれた内容にびっくりして、思わず止まってしまふ。

タツパって、え、ふっ、ふははっ。

「あははっ、身長のこと気にしてるの？」

「んぐっ、シノカさんみたいないな大きい人には分かりませんよ！」

「ふふふっ、ふうっ、でもスイエさんも小さいわけじゃないでしょ？ その年齢にしては大きいと思いますよ」

「同じ年でもっとデカい、アンタに言われても何の説得力もないわ」

スイエさんの声にも笑みが含まれてきたのが感じとれる。それが嬉しくて笑いがなかなか止まらない。

「ふふっふふ、あー、スイエさんにそう言ってもらえると大きくてよかつたって思えるなあ、あっ思えます！」

「さつきからソレ気にしなくていいよ、俺も敬語もさん付けもやめるから。シノカもやめな」

「いいの？　じゃあスイエよろしく」

「うん。よろしくな、シノカ」

止まっていた彼が進みだしたのに急いでついていく。まさかスイエとこんな関係になれるなんて思ってたかった。

緩んだ頬になんとか力を入れ直して、ありや？　と周囲を見る。

そういえば、ここダクトの中なのに綺麗だなあ。最近掃除でもしたのかな？
まあ、いつか。スイエとの距離が開きそうになってしまったので急いで追いかける。

「よし、降りてきていいよ」

「簡単に言うねえ」

「シノカよりチビの俺ができたんだから、当然シノカも楽勝だろ！」

すっごくいい笑顔でメイド服に身を包み見上げてくるスイエは可愛いが、言動は全く可愛くないっ！

ダクトから飛び降りて、倉庫のような部屋の中を確認した彼は、降りておいでえと下でニヤニヤしてる。

どうやら、スイエは人をイジるのが好きなタイプらしい。クソっそれを知ってたら記録者のテストが散々だったなんて話しなかったのにいつ。

「いっしょくよ」

「はよはよ」

少し離れて、俺の着地が失敗しても被害がこない場所に移動した後。顔だけ覗かせつつ、急かすスイエに煽られて、目を閉じたまま飛び降りる。

「いっとう！」

何とか足から着地できたが、バチーンという音とともに足底の衝撃が頭のほうにまで伝わる。

「うわあ、逆に目閉じたままよくいったなあ。大丈夫、シノカ？」

「飴と鞭がすぎるう、だいじょーぶう」

「うん、へいきそーだな」

お茶かけて答えれば、心配そうに下げた眉をすぐに戻して、無表情のスイエは倉庫の中を物色し始めた。

「えっと、ここでは火薬と、武器になりそうなものと、あとお……」

「火薬、武器、ライト、回収されたリアさんと俺らの荷物、そして太陽の涙の回収」

「そうだった。さすが司書、完璧」

ジンさんとメイさんの言葉を思い出さず。

『太陽の涙の所持者が図書館を捕まえようとしたなら、太陽の涙は商品にならないように隠されてるはずだ』

『一番怪しいのはこの倉庫ですね。奥まった場所にありますが、何よりこういうものは案

「外わかりやすいところに隠されているものです」

「分かりやすいところ、分かりやすいって、これ？」

「一番真ん中の棚にある綺麗な装飾のある箱。持ってみるとなかなか重いソレをスイエに渡す。」

「鍵はついてなさそう、開けてみっか」

「ええっ、まあ中身見なきゃだし、スイエさん頼みますわ」

「下手に出て人を盾にするのはどうかと思いますけど、シノカじゃ何かあったとき死にそうだし、俺が見ますよ」

スイエがゆっくりと箱を開けると、中から出てきたのはオレンジ色に輝く太陽の涙。

「すげえ、ほんとにあつた」

壊れやすい宝石なので箱に戻して、スイエさんがスカートの中に収納する。

火薬や武器は麻袋に入れて俺が持って、ナイフ数本はスイエが持ちたいっていうので預ける。

自分たちの荷物を探すと、リアさんのと俺らのがまとめて一つのゴミ箱の中に入っていたので、それをそのまま持つていくことにした。

ついでに端に置かれていた大きなライトも一緒にゴミ箱にぶち込んだ。

倉庫の鍵を壊して外に出る。この後、俺たちが目指すのは、音響室兼照明室。早くしなきゃショーが始まってしまう。早く気持ちを抑えながら、ツナギを着ていることに自信をもって堂々と歩いていく。



最初から、説明し直すぞ。

このオークションは闇商と呼ばれる、この町の金持ちが主催で行われている。そして、その闇商が扱うのは『物』だけではない。

人間も『モノ』として『商品』として出しているのだ。

ジンの声が重く響く。息を飲んだシノカは一言一句聞き逃さないように、ジンの語る情報を脳に記録していく。

そして厄介なのが、この闇商に協力してる有権者が複数いるということ。

北の地方に留まらず、西にも手を伸ばしているのも面倒ですね。

ああ、そして、そんな奴らが正しくリアを把握して捕まえたことが問題だ。

ジンとメイは写真をそれぞれ隣に座っているシノカとスイエに見せた。

そこには、変装をしていないリリアの写真や変装している北の三人が揃っている写真が並べられていた。

黒髪、金目。大柄な男が記録者？ 細身の男、図書館？ 一番小さな奴、司書？ 写真の裏にはそれぞれ、予測された内容が書かれている。

変装をしていないリリアさんがアップで映った写真には大きな文字で『黒髪に金目の大柄男。記録者、確定』と書かれていた。

リリアさんは司書であるが、そんなの小さな問題だ。

少なくとも、闇商は北の地方担当の三人を何となく理解しているのだろう。

リリアは記録者として捕まった。チツ、リリアが捕まってからこんなことに気づくとは、情けない。

ジン、冷静に。リリアさんは必ず生きていますし、無傷のはずです。

メイさんは闇商のオークション会場の地図を広げると、ゆっくりと全員の脳に刻み込むように話し出す。

闇商と闇商の息子が取り仕切っています。息子は普段は顔が良かったため、その顔を使って女の子を捕まえているようです。

ここに出入りするには商人になるしかありません。商人と呼ばれる飛び入りで商品売り込みに来る人に私とジンでなりきります。

身綺麗で傷のない美しいモノは高値で取引されるので、お二人には商品になっていただきます。

シノカとスイエに一瞬視線を向けて、また地図をなぞる。

そういうものは『上物』として、かなり優遇されます。上物は部屋があり、上物の中でも更に高級なもの。『最高級品』は上物部屋の一角の檻に入れられるので、そこにリリアさんがいるでしょう。

檻の鍵は息子と闇商しか持っていないので、彼はそこで身動きが取れずにいるはず。その檻から出すには直接行って見なきゃ分かんない。まあ、リリアなら少し手を貸せば自力でどうにかするだろう。

ええ、そうですね。

さほど悩んだ様子もなく、ただ一つの事実を言い切る。

リリアは解放したら好きに動かさせよう。アイツとは作戦を立てれんし、アイツがいる前提で考えるより、いないと思ったほうが考えやすい。

こちらの作戦を伝えれば、彼なら自分の出来る最大の働きをしてくれますよ。

ジンとメイの二人の会話がリリアを信頼しているのがわかるのと同時に、リリアの有能

さを思わせる。

メイさん、ドグさんは？

シノカが不安そうに尋ねれば、メイはふわりと微笑みシノカの背を軽く叩く。落ち着くためにとんとんと背で跳ねるメイの手のリズムはゆったりとしていた。

彼の行動は予測不可能なので、いない前提で話は進めます。彼は絶対無事ですから、そんな顔しないでください。

彼の強さは私たちが一番知っているでしょう？

メイは自信満々に言い切った。背をなでる左手はそのままに、シノカの頬をつついた右手で地図を指した。

私たちは本来のやるべきことを、やり遂げましょう。

うむ、そうだな。メイさんの言うとおりで。

ジンは歯を見せて不敵に笑うとメイさんの指す場所を見て、一度瞬く。

では、一番重要な任務内容を発表しよう。

ジンはメイと同じ場所を指す。そこは、オークション会場の音響と照明を担う部屋。

この占領を二人には任せたい。

心底楽しそうに、それでいて芯の通った真つ直ぐな視線をシノカとスイエに向けたジン

は、銀色の瞳の奥に強い想いを滲ませた。



ジンさんとメイさんの作戦を一から思い出す。一つの漏れもなく記録したはずだから、作戦通りに動けば大丈夫。

「大丈夫ですか？」

「うん、だ、だいじょうぶ」

目の前にあるのは重厚な扉。この先が俺たちが占領するべき部屋。

ここに来るまでの道のりで、何人かとすれ違ったが変装がバレることはなかった。

「ふう、すうふう」

深く息を吐いて、ゆっくり肩が大きく動くほどに空気を吸い込んで止める。

「おーつかれさっます！」

そして堂々と胸を張って、主人公の登場シーンみたいに、勢いよく二枚の扉を左右に押し開けた。

『まず、シノカが扉を開ける。そうだな何か大声で言いながらわざと目が自分に集まるよ

うにしろ』

うっすらとした照明しかない暗い部屋の中にいた男たちが、こちらに目を向け睨みつけようとしたところで、自分はぎゅううつと目を閉じた。

「ふっは」

真後ろから聞こえた噴き出す声と同時にスイッチ音。閉じているのに瞼の裏側が赤くなったのでスイエが動いたことが分かる。

『全員の視線が集まったところで、目くらましだ！ スイエがシノカの後ろから部屋の中にライトを浴びせてやれ。できるだけ強力なほうがいいぞ！』

「まぶしっ！」

「なんだ!？」

「見えなっグガッ！」

『急な光に目は対応できない。身動きがとれず視界が悪くなってる馬鹿ども十人程なら、スイエ一人で充分制圧できる』

「雑ッ魚。シノカも面白いよ」

しばしばする目を何度か開いて閉じて焦点が合うと、見えたのは床に突っ伏す大柄な男たち。

八人の男が無様に伸びていて、その中央では無傷でいつもと変わらぬ顔で立っているス

イエがいた。

「うわあ。流石、記録者」

「こー見えても鍛えてるんでね。つか早く入って閉めて、バレル」

「あつごめん」

扉を閉めて中に入れば、見たことも無い機械が大量に並ぶ。

「いけるか？」

真ん中にある椅子に座れば、スイエは心配のしの字も感じさせない声で、後ろから手元を覗き込んできた。

『制圧がすんだ後はそこで待機だ。しかしオークシヨンは始まってしまふからな、シノカこの資料に目を通して記録しておけ』

『シノカくんはオークシヨンが滞りなく進むように照明と音響を担当してください。スイエくんはそれを手伝ってあげてください』

『二人はリリアが売り出される番まで、オークシヨンがいつも通り進むように心掛ける』

『そのためには、いつもの照明と音響である必要があります。シノカくんならこの程度楽勝でしょう？』

メイさんに期待されちゃってるし、それにこの程度のこと。

「当然」

「ふはっ、ヨッシャ！　じゃあ指示だし頼んだぞ」

「まっかせろーい」

薄暗い部屋から窓の外を見れば、カーテンの隙間から黒いガラス越しに会場が見渡せる。

半円状に真ん中にある舞台を囲うように客席があり、客席のライトはこの部屋より少なくて足を照らしているものがほとんど。

メイさんが言っていた通り、客の顔が見えにくいようにしているらしい。

それは客が、この商品は不法に手に入れたものしかないと知っているという証明になる。

「よっし、集中」

機械を見て、資料の内容を思い起こしながらオークションの準備を始めた。



「さあ！　ご会場の皆様様！　お待たせいたしました！」

舞台をららんと照らす。舞台の真ん中では踊るように歩き回りながら客席全体に向けて話す男がいた。

顔全てを覆う派手な仮面に上品な服。アンバランスな雰囲気身を纏い、男は会場を大胆に闊歩する。

「今日は、上物が二品、最高級品が一品用意させていただきました。実物を見るまで詳しくは内緒ですが、今までで一番の商品だと断言できるでしょう！」

「おお」

小さく上がる歓声に耳を傾け、男は楽しそうにその場で跳ねて声を荒げた。

「今日！ここにいられる皆さんは幸せ者以外の何者でもございませんっ！」

両手の拳を胸元で握りしめ、マイクに入るほど大きな音を立てて息を吸い込んだ。

「それでは！まず一番最初の商品から行きましょう！こちらです!!」

男が勢いよく後ろを指す。

ボタンを押して男が指した先、商品のいる場所にライトを当てる。

首に巻かれた鎖をひかれ、無理やり立たされた少女の足は震え、その顔には苦痛と恐怖が滲んでいた。

「では、二十三からどうぞ」

司会者がそう言えば、次々に客席から上がる声。少女の価値を勝手に決めるソレは聞い

ていて不快にしか感じない。

「くっそ」

「抑えろ、まだ駄目だ」

照明を動かしながら、目の前で練り広げられる非人道的行為に吐き気がする。

隣で音響をいじっているスイエは冷静なふりをしてるけど、その顔が歪んで舞台上を睨みつけているのは見えている。

「三十六アルク！ 三十六アルクで決まりました！」

少女の値段が決まり、落札を知らせる鐘の音が響く。

照明が司会の男だけに戻り、また新しい商品が出てきたらソコを照らして、落札されたら鐘の音を鳴らす。

人や動物に限らず、盗難された商品も出てきた。

メイさんと盗まれたと聞き、現場確認にも行ったあの町の物。絵画から骨董品。

俺には凄いとは思えない変な形の花瓶とか、人以外にもどんどん出てくる商品はみんな高額で買われていく。

「十アルクってリイトに直すといくらだっけ」

アルクはこの闇商が勝手に作ったお金、本来の通貨はリイトで考えられる。つまりアル

クというのは簡単に言えば賭け事のお金を払って買うコインみたいなもの。

現金で買っているのはアルクというコインで、人身売買には関係ないって言えるようにしてるんだってメイさんが言ってたな。

姑息だけど、言い逃れの余地があるから客がこんなにたくさん来ているんだろう。

「えっと、一アルクが一万リイトだから十万里イトだね」

「十万里イト……」

「うん、人がたつた三十万里イトで売り買いされてると思うと、ほんと、嫌になる」

「そうだな」

どんどん入れ替わる商品と残酷な鐘の音が何度か鳴って、もういくつ商品が売られていったか分からない。

「お待たせいたしました！　ここで本日の目玉商品といきましょう！」

司会者が今までで一番大きな声を出せば、客席から指笛の音と拍手が響く。

「えっと、上物二品は最高級品の後に出しますので、最高級品が手に入れられなかった方でも！　良き品は手に入られるチャンスはありますよ」

舞台を覗き込むが、変わったところはない。

「合図っぽいのある？」

「ううん、見えない。シノカ音響も任せていい？ 俺合図探すわ」

「おけ、まっかせる！」

音響と照明に集中しながら、舞台と客席を盗み見る。

『合図はわかりやすくいく。確認したら動き出せ』

ジンさんはそう言っただけ、今のところなんの変化もないし、違和感も感じない。

「それでは！ 本日の目玉商品はこちら！」

司会者の声に合わせて、舞台全体に照明を当てる。

大きくふかふかな椅子に座らせられている人とその横で帽子をかぶった警備員が照らし出された。

椅子に座らされている人の四肢は椅子に固定させられている。なんとかそれは見えたが、顔や体は上からかけられている布のせいで見えない。

「リリアさんっ」

思わず溢れた声は震えてしまっていた。情けない、リリアさんと一緒に活動していたスイエはただ真っ直ぐとその光景を見ているのに。

スイエは眉間にシワを寄せて、舞台上にいる椅子に縛り付けられてるだろうリアさんに目を向ける。

「なんと、こちらの商品のはあの『記録者』であります！」

こちらの気など知らず、司会者はハイテンションに舞台を右へ左へと駆け回る。客席も司会者のように高揚しているようで歓声とともに身を乗り出す者まで確認できる。

「北の記録者！ まさにこれを超える商品は図書館しかないと言えるでしょう！」
司会者が客席を煽るようにそう叫べば、客席からの歓声も大きくなる。

「生きていく中で記録者を間近に見ることが出来る人なんていないでしょう！ 最初に言った通り！ やはり、今日この場にいる皆さんは世界一の幸福者と言えるでしょう!!」
司会者はヒートアップしていくテンションを抑えようともせず、その場で跳ねては椅子の隣に移動した。

その時、何度か瞬きをして、何も言わなかったスイエがふと、言葉を漏らした。

「あれ、リリア、さんじゃない？ だれ？」

疑問と焦りしか感じさせないその声色に俺は首を傾げスイエを見る。俺は驚きと困惑に染まったスイエの顔を見て、力の抜けた場に削ぐわぬ声を零す。

「はあ？」

「では！ ご覧ください！ これが北の記録者です!!」

同時に司会者が椅子の人物にかかっていた布を勢いよく取る。

「ひい！」

「え、うそでしょ!？」

ざわつとした客席からは歓声ではなく、悲鳴が聞こえた。シーンと静まり返った会場にコテンと首を傾げた司会者が椅子の方に目を向ける。

そしてすぐに「いぎゅっ」変な呼吸音を出して司会者はその場に尻餅をつくど、後ろに下がろうと震える体でもがいた。

そこにいたのは綺麗な北の記録者ではなく。

「なっなっ、なんで坊ちゃんが!？」

闇商の息子、坊ちゃんが座っていた。

無理やり着せられたのである。うりリアさんが着ていたはずの衣装はボロボロで、坊ちゃん自身の顔も腫れているのが分かる。

なんとか坊ちゃんであると認識はできるが、遠目から見ている俺には司会者が「坊ちゃん」と呼ばなければ判断出来なかつただろう。

司会者が舞台の上から下にいる警備員に声をかけようと、身を乗り出したとき、司会者の足元にナイフが突き刺さった。

「ヒイツ」

引き攣った声を上げ司会者は動きを止める。

ゆっくりと錆びついた機械のようにナイフが飛んできた方を見ると、そこには商品と一緒に舞台上が上がってきたあの帽子を警備員がいた。

「ばぶっ」

会場の視線を一身に受けているその警備員は、肩を振るわして急に噴き出した。

「あひつあひやひやひやひやひやひや！」

不気味な笑い声だけが会場を満たしていく。警備員は前かがみになりながら楽しそうに笑い続ける。

「あーっ、ひやひや、ふう」

少しずつ息を整えると、揺れてずれた帽子を深くかぶり直し警備員は懐から拳銃を取り出した。

「リリアさんだ！」

身を乗り出して、窓に鼻が付きそうなほど会場を覗き込んだスイエが嬉しそうに声を上げる。

「さてつと、全員逃げれると思うなよ？」

警備員の恰好をしたリリアさんはそういうと、舞台を照らしていた照明の一つを撃ち抜いた。

「きゃあああああああ！」

悲鳴が響いてハッとする。

ジンの言っていた『わかりやすい合図』つてもしかしてこれえ?! 分かんないけどここまで大きな動きはもう無いはず。

「スイエっ!」

「分かつてる!」

急いで会場の全ての照明をつける。暗い客席の中、我先にと逃げまどつていた客達が照らされた。

舞台上を照らす照明は鼻歌を歌いつつ、時折狂気的な笑い声をあげているリリアさんがどンドン撃ち落としている。

帽子のせいで顔は見えないが、あれは絶対楽しそうに笑つてると思う。

「あひやひやひやっ、ひやっは! 馬鹿が!」

撃ち落とされた照明が舞台の上で弾けては大きな音を立てる。

会場から逃げようとしているのに、びくともせず全く開かない扉に客たちはパニックを起こしているのが分かった。

廊下が騒がしくなってきた。事態をやっと確認した警備員たちが動き出したのだろう。

彼らがどれだけ頑張ろうとこの惨状を修復できるとは思えないが、ここに乗り込まれては面倒だ。

「よし、合流しに行こう」

「合流を目指しつつ、舞台の方に向かってリリアさんを回収しよ」

照明が撃ち落とされていくことで見えにくくなった舞台上に心配そうに目を向けて、スイエはゴミ箱の中から服を出すとスカートに隠していた太陽の涙を投げてきた。

乱暴にメイド服を脱ぎ捨てて、潜入した時に着ていた薄汚れた服に着替える。

メイド服を着ていたのは少しの間だけだったのに、その恰好のスイエは随分と久しぶりに思えた。着替え終わるとスイエはゴミ箱から火薬を取り出す。

火薬はスイエが、太陽の涙は俺が持つようだ。

俺が持つよりスイエが持ってた方が良いと思ったが「じゃあお前が戦う？」と聞かれてしまえば「自分が持ちます」以外に答えはない。

メイド服から解放されて、可動域を確かめるように軽く何度かジャンプした後。スイエは出口に手をかけた。

「シノカ、絶対後ろから出るなよ。太陽の涙が両手で抱えとけ」

「おけ。わかった」

「いくぞ」

勢いよくドアを開けて転がるように廊下に出ると、そこには五人の警備員がいた。

「侵入者だ！」

拳銃を一齐に向けてくる敵に一切の躊躇もなく突っ込む。袋から小さなボール状の火薬を投げつけ、それに向かって発砲すれば小さな爆発が起きた。

「うがっあ」

目の前が一瞬赤く染まるが、スイエが俺を背に庇ってくれたので目に痛みを感じることはなかった。

両手で目を抑える警備員たちを横目に、急いで廊下を駆け抜ける。

何人かの従業員をスイエが上手く沈めてくれるので、その後ろをなんとかついて行く。

転びそうになりながら、上がる息に気付かないふりをして進んでいくと「ストップ」急に立ち止まったスイエの背中にぶつかる。

「いつつう、どうしたの？」

スイエの後ろから前を覗くと、そこは真っ直ぐか右に曲がる分かれ道。

「右に行きたいんだけど多分多めに敵がいると思う。シノカは少しここで待ってて」「分かった」

銃はあまり使いたくないって言ってナイフばかりで戦っていたのに、スイエは拳銃とナイフを両方構えて右の道に消えていった。

「ぐあっ」

「くそがつ」

「やっやめろ！」

聞こえてくる断末魔に耳を塞ぎたくなるが、俺の両手は太陽の涙で埋まっている。

早く終わらんないかなあ、なんて思っていると背後から足音が近づいてきているのが分かった。

「えっ、うそでしょお！ スイエ後ろから来てる！」

「クソツ、もう終わるっ」

スイエが右の道から帰ってくる前に、後ろから来た敵の姿が視認できた。

警備員が三人。その手には銃が握られているのが分かる。

急いでスイエのいる道の角まで下がったけど、どんどん近づいてくる敵が俺に向かって銃口を向けたのが分かった。

「うっ」

襲われるであろう痛みに恐怖で目を固く閉じる。

肩に衝撃が走り、銃声が三つ響いた。

強い力で押されて横に吹き飛んだ俺は、壁にぶつかりながら薄っすらと目を開けた。

「はっ、はあっ、いつてえ……」

そこに立っていたのは、左頬から血を流しながら右足を抑えているスイエだけ。

追手の警備員三人は呻き声をあげながらスイエの前で床に臥せている。

スイエの手には銃が握られており、その銃口からはまだ消えていない煙が漂っているのが分かった。

「スイエ！」

「ごめん、ケガしてない？」

「俺は大丈夫だけどっ、お前っ足！ 血がすごい出てるっ」

スイエの右足のふくらはぎから血が流れている。止まりそうもない血を見て、俺の頭は上手く動いてくれない。

どうにかして記憶の中から処置の仕方をつ張り出したいのに、必要な時に必要な知識を出せなくて何が司書だっ。

「大丈夫だって、貫通してないし掠っただけだから」

目に涙が滲むせいでぼやけてしまっているが、スイエが笑顔を作っているのは見える。

「本当は二発とも避けれると思ってたんだけど、俺が上手く動けなかったせいだから」

スイエは「お前のせいじゃない」と言う。完全に気を使わせているのが分かって、もっと苦しくなる。

自分の弱さに嫌気がさす。

『シノカ、やっぱお前めっちゃ弱いわ』

ドグさんが声の中で響く。

『けどな、それは強みにもなるんや。弱いからこそ、危機感や緊急時に備えて色々なことを吸収したいって思うやろ？ それは凄いことや』

訓練の休憩中になんとなく言われた言葉たちが上がっていた息を抑えていく。

『お前はもしもがあつたときに対応できるように多くのものを身につける、自分ができないことなら説明できるように詳細に記録しておくんや、ええな？』

あの時、ドグさんが言っていたことが、今ならちゃんと分かる。

『それはオレには出来へん。司書のお前だから出来ることや』

「スイエ傷見せて！」

曇っていた脳が晴れて、体がやっと動く。ナイフを使ってツナギの袖を切った。

はつきりとした頭で、正常に動き出した脳を使って処置の仕方を順追っていく。

「スイエ、助けてくれてありがとう」

滲んでいた涙も枯れて、視界が良くなった。処置を終えてお礼を伝えれば、少し目を見開いた後、スイエは目を細めて「うん」と微笑んだ。



「はっ、はっ、スイエ大丈夫っ？」

「これくらい平気」

汗を滲ませながら、舞台を目指して走り続ける。

先導してくれているスイエは足を引きずっているのに俺と同じ速度で走っている。

「あひゃひゃひゃ！」

「近づいてきた！」

響き渡る狂気的な笑い声は、あのリリアさんと一致しない。

舞台袖についてスイエと舞台上を覗く。照明が撃ち落とされて暗闇に染まったそこで、リリアさんはしっかりと立っていた。

襲い掛かってくる警備員たちを殴っては客席の方に投げ、殴っては投げの繰り返し。

客席と外を通じるドアが閉まっているせいで、客席に閉じ込められていた人たちがソレを見ては悲鳴を上げる。

まさにカオス。

思わずひきつつた頬と濁いた笑いが零れる。

「リリアさんっ」

そんな中、慌てたような苦しさを含んだ声で、スイエは足を引きずりつつも舞台上上がっていった。

「リリアさん！」

「あひひっひい、ひっ、ふうー……スイエ？」

警備員の襟首を掴んだまま、こちらに視線を向けたリリアさんは笑みを消して、首を傾げた。

「そろそろ行きましょう！」

「あー、もうそんな時間か。ごめんな、楽しくなって夢中になってたわ」

捕まえていた警備員を客席に投げると、リリアさんはポケットから小さな四角い箱を出した。

「足止めもこれくらいしとけば大丈夫だな」

そう言うと、手に持っていた箱についていたボタンを一つ押す。カチツと軽い音が鳴ると客席の方から軽い爆発音が響いた。

客の驚く声が聞こえたすぐ後に「開いたぞ！」という歓喜に震えた声もした。

そちらに顔を向けると、客達をここに閉じ込めていたドアが開いて廊下の光が中に差し込んでいる。

それが分かった瞬間、雪崩のように通路に流れ込んでいく人々。

客達の中に紛れて、警備服や作業着の者もいた。リリアさんに投げ飛ばされていた人たちも逃げているのだろう。

「よし、アホ達とメイさんに合流しに行くか」

開いたドアから逃げていく人を確認して、リリアさんはこちらに近づいてきた。

「スイエ！ 足と顔どうした!？」

近付いてきてやつとスイエが良く見えたんだろう。ピタッと足を止めて顔を青ざめたリリアさんはスイエに駆け寄った。

「これくらい大丈夫ぶっわっ!」

「大丈夫じゃないだろ！ シノカはケガしてないか？」

リリアさんは軽々と片手で、スイエを二の腕に座らせるように持ち上げた。

「ちよつ、大丈夫だから！ リリアさん降ろして！」

「ぶふつ、俺はケガなんてないです。スイエが守ってくれたんで」

「あつ、てめっ！ 笑つてないで助けるよシノカ！」

「助けるも何も、足撃たれたのはホントなんだからリリアさんに甘えとけよ」

殴つてしようとしているが、高くにいるスイエの拳が俺に当たることはない。

煽るようにワザと「見下げられてよかったな」なんて言えばスイエは当たらないと分かっている拳を何度も振り下ろす。

スイエがそれだけ暴れているのに、リリアさんはよろめくことなく俺たちのやり取りを聞いて笑っている。

「ん？」

リリアさんが急に振り向き、奥に目を向ける。

「シノカ、走れるか？」

そっちを睨んだまま、視線はこちらに向けず真剣な声で聞いてきた。

「え、はい」

「いや、コイツさつきまで全力疾走だったんで無理っすよ、絶対ついてこれない」

「そうか、分かった」

リリアさんはスイエの言ったことに頷くと、空いていた方の手でスイエと同じように俺

を担ぎ上げた。

「えっ！ 俺は走れますって！」

「一日休憩しとけ、どうせまた走ることになるからな」

俺達二人を腕に乗せたまま、リリアさんは走り出した。

「うっそでしょ！」

「シノカうるさい、舌嚙むぞ」

「しつかり掴まっとけよ？ 絶対落とさないからびじるな！」

あんなに嫌がっていたくせに、スイエはこの状況に慣れている風で、両手を使って銃をいじりだした。

「合流地点は決まってるのか？」

「いえ、何も言われてないっすね」

息を吐いて、リリアさんは呆れたように「全く」一言零すと、走る速度を上げた。

階段を上がって行って、地下から地上一階に出る。

入り組んでおり従業員でも迷うと言われている難解な迷路のようなそこを、リリアさんはどンドン進んでいく。

迷いの感じない足取りからして、この地図がすべてを正しく記憶しているんだろう。しかもトラップのある道にも引っかけかかっていない。

時間がなかったとはいえ、自分は地下の地図しか完璧に覚えられていない。

ジンさんが『シノカは地下だけ完璧に覚えればいい』と言っていたのはリリアさんが覚えていたのを分かってたからなんだ。

リリアさんは一切、足を止めることなく進んでいく。

「なにをそんな急いでるんですか？」

「ん？ 早く脱出したいんだあつぶね！」

ずっと走っていたリリアさんが、急に後ろに飛んだ。

「うわっ」

「シノカ！」

体勢が崩れて腕から落ちそうになったが、スイエが掴んでくれたのでなんとか大丈夫だった。

「おっ！ お前は！」

角から急に目の前に飛び出してきたのは、何人もの警備員を引き連れた、オークション

の主催者である闇商とその息子の坊ちゃん。

「父様こいつ！ 檻から抜け出して俺を殴ってきたやつだよ！」

「コイツか！ 私の商売の邪魔をしようって！ お前のせいでうちの信用はガタ落ちだよ！」
顔を真っ赤にさせて怒り出した闇商は、丸い身体も相まってトマトに見える。

闇商の周囲を固めていた警備員の一人が警棒を振り上げて走ってくる。

「ふっ、とう」

俺達を抱え上げたまま軽々と警棒を避けると、リリアさんは警備員の腹に横から蹴りを入れた。

「ぐべっ」

軽く蹴ったようにしか見えなかったのに、警備員は凄いで勢いで吹き飛ぶと壁に大きな音を立ててぶつかつた。

そのまま動かなくなつた警備員を見て、他の警備員達の足が止まつた。

「ん？ なんだ、来ないのか？」

金色の瞳がうっそりと輝く。

綺麗な輝きをしているのに、怪しさと恐怖を纏つた冷たい月を思わせる瞳。睨まれた警備員達は金縛りにあつたかの如く、ピタリと動きを止めた。

硬直した空気の中で、一人の警備員の影に隠れて動いた奴が見えた。

そいつは隠れながら拳銃を握っている。高所にいる俺だから見えたが、リリアさんからは見えない位置だ。

伝えるにも声に出せば、それに反応した相手が撃つ方が早い。どうするのが正解か。

いや、もう言うしかないっ。

口を開こうとした時、手をグツと掴まれた。大きな銃声が響く。

「ぐうあああつ」

「ないすう！ つおりや」

後ろに隠れていた男が拳銃を落として、手を抑えた。滴り落ちる血が、彼の手が撃ち抜かれたのでありありと伝える。

唸り声を上げた仲間に警備員が気を取られていると、そこに突っ込んだリリアさんが残りの警備員を蹴り飛ばしていく。

「クソツ！ お前ら私を守れ！」

「父様！ まってよ！」

闇商と坊ちゃんは二人だけ警備員を連れて逃げていく。

リリアさんは目の前にいる奴らを蹴るのに忙しいから、そつちを追うことはできない。急に隣にいたスイエが動いたと思ったら拳銃を構え、逃げていく四人に向けて撃った。

「チツ」

動き回るリリアさんの上からでは、狙いが定まらない。警備員の一人には当てられたが他の三人には逃げられた。

闇商と坊ちゃんに気を取られている隙に残った敵は二人。

片方は警棒、片方はナイフを持っている。

警戒しているようで距離をとった状態を保ってくるため、場は膠着してしまった。

また厄介なのがこの二人は他の警備員よりも強いっぽくて、スイエが動く銃の警戒もしてくる。

リリアさんの両手が使えたら、簡単にこの状況を打開できたんだろうけど、今更俺達を降ろすことなんてできない。

それに降ろせたとしても戦闘面でお荷物でしかない俺と、足に怪我をしているスイエでは邪魔にしなければならないだろう。

じりじりと間合いを詰めてくる敵に、少しずつ後ろに下がる。

何か相手の不意をつければ。

「ごめんくださいあああああい!!」

「うわあああああああ！」

「クハハハハハ！」

よく聞いた声がどこから三つ響いて、何かが後ろから飛び出してきた。

「は？」

「ぶがあっ」

急に飛び込んできたその人は、目の前にいた警備員の一人に飛び蹴りをすると、啞然としていたもう一人を蹴り飛ばす。

「ぐおえっ」

吹っ飛んだ警備員に目も向けず、その人は深くかぶったフードから唯一見えるギザギザとした歯を覗かせて笑った。

「久しぶりやな、シノカ」

「ドグさん!!」

「ククッ、カカカカ！」

リリアさんから降ろしてもらい、ドグさんに駆け寄る。

心底愉快そうに笑っているドグさんの背中では楽しそうなジンさん、腕の中では冷や汗をかいているメイさんがいた。

「ん？ あ、ごめんな二人とも！ 怪我してへんか？」

俺の視線でやつと二人のことを思い出したのか、ドグさんは抱えていたメイさんと、紐を使つて背負つていたジンさんも降ろした。

「大丈夫だ！ それより楽しかったぞ！ 紐で括られた不安定な中でも疾走は初めて味わつた！ 俺とメイさんを抱えてあれだけの速さが出せるとは流石だな！」

「早くて少し怖かったですけど、怪我とかは無いですよ。ドグさんは大丈夫ですか？」

興奮した様子で楽しそうなジンさんと「ふう」一息ついて困つたように笑うメイさん。相対した反応をする二人は元気そうで怪我の一つも見当たらない。



「リリア、ご苦労だったな。お前が暴れてくれたおかげで動きやすかったぞ」

「いえ、司書という立場でありながら長い間離れてしまひすみませんでした。スイエにも負担をかけてしまつて申し訳ない」

リリアさんの肩に乗ったままいるスイエの足を見て、ジンさんは少し眉を寄せると、布の上からでも血がにじんでいるのが分かるそこを優しく撫でる。

「銃か、痛むだろう。ここから出たら治療しような」

「はい、応急処置をシノカがしてくれたので然程痛くないですよ」

「そうか。シノカありがとう」

「いいえ！ スイエが俺を守って怪我しちゃったんで！」

「スイエがお前を守ったのか」

軽く目を見開いたあと、すぐにその瞳を和らげるとスイエを見上げて優しく微笑んだ。

「しっかりと記録者の役目を果たしていたんだな、偉いぞ」

リリアさんが屈んだのに合わせて背伸びをしたジンさんは、スイエの頭を犬にするようにワシヤワシヤとかき回して撫でる。

「恥ずかしそうに「やめてくださいっ」なんてスイエは言っているが本当は嬉しいんだろ
う。」

ニヤけた頬が横から丸見えだ。

「よいせっ」

後ろから聞こえた声に振り返れば、ドグさんが開けた窓から警備員を外に投げ捨ててい

た。

「何してるの?!

一階だから投げ捨てられた人たちの怪我の心配などはないが、その異常な光景に戸惑いは隠せなかった。

「ん? あー、ここにおつたら死んでまうから。外に投げとくねん」

「どゆこと?」

「リリア、ジン抱えられるか? オレはメイさんとシノカ持つで」

疑問符を浮かべた俺を無視して、どこか急いだ様子のドグさんは全ての警備員を外に投げ捨ててリリアさんに問いかけた。

「了解、急ごう」

ちらりと後ろを見て顔をしかめたリリアさんは、ジンさんをおぶって紐で固定した。

「ジンさんすみません。不安定になっちゃうんで、自分ですがみついでてくださいね」

「分かった」

背にはジンさん、左腕にはスイエ。二人も担いでいるのにリリアさんは、ふらつくことなく自由になった右手を軽く回す。

体格がよく、力もあるリリアさんだから、司書でありながら記録者のような動きができるんだろう。

俺がジンさんの司書だったら絶対にできない。司書でありながら強い、いいなあ。

「シノカくん？ 太陽の涙は私が持つておきますよ」

「あ、はい。お願いします」

心配そうに顔を覗いてきたメイさんに笑顔で返せば、「私の両手は空いてますから」と少し安心したような顔で太陽の涙を抱き込む風を持つてくれた。

「シノカもボーっとしとらんで、はよ乗り」

両手でメイさんを抱き上げたまま、こちらに背を向けるドグさん。

リリアさんとは違い、ドグさんは俺よりも背が低い。いくらドグさんと言えど俺を背負って走るのはかなりの負担になるはずだ。

「大丈夫です。走れます」

ずっと担いでもらっていたから疲れてないし、足ならちょっと自信がある。

自分で出来ることなら、ちゃんと自分でやりたい。

「おけ分かった。ちゃんとして来いよ？」

「はいっ！」

「ドグ、早く行こう」

「分かつとるよ。リリアの後ろをついて行き、俺が先導するで遅れんなよ！」

ドグさんは自分の口当てをメイさんに着けると、走り出した。

それに続くリリアさんの後ろをついて行く。何をそんなに急いでいるのか分からないが、二人とも人を抱えているとは思えないほど速さで駆け抜けている。

ドグさんに道の指示を出しているメイさんの声と三人の足音だけが響く。

段々と上がる息に気付かないふりをしていれば、ふと肺に入る空気に違和感を覚えた。

「迫ってきたな！」

「全員布当てて、煙を深く吸うなよ！」

「は？ 煙？」

ドグさんとリリアさんの言っていることが分からず振り返れば、後ろから差し込むオレンジ色の光に漂う真っ黒な煙。

どう見ても後方で火事が起きている。

とっさに襟を掴んで鼻まで覆い隠す。

恐怖で竦みそうになる足を無視して、思考を他のことに回して感情を押し込む。

やっと分かった。

ドグさんとリリアさんがやけに急いでいたのは火事を知っていたからで、倒した警備員を外に投げ捨てていたのは火事に巻き込まれないようにしていたんだ。

そして、メイさんに口当てを付けたのは煙を吸わないようにさせるため。ようやく気になっていたこと全部が繋がった。

「ちよつと！ ドグさんどうなってるの！」

「ククッ、これやったんはオレだけやないで！」

犯人であろう彼に文句を言ってしまえば、走りながらドグさんは「な！ ジン！」と楽しそうに同意を求めた。

「アハッハハハハ！ 安心しろシノカ！ 重要な歴史的品たちはちゃんと外に逃がしてあるぞ！」

「そーい問題ではない気がしますが」

興奮気味に大声で笑うジンさんにスイエはため息と肩を落とす。

「もー、だからジンさんとドグを一緒に行動させるの嫌だったんだよなあ」

「すいませんリリアさん。けど今回は火事が起きても仕方なかったと思うんですよ」

「メイさんまでそれ言い出しちゃってたんですか?！」

最後の皆だったはずのメイさんまで「ここは燃やして正解です」なんて普通に言ってしまうから、リリアさんが絶望したように声を荒げて空いてる手で額を抑える。

「残念だったな! まあいいではないか。リリアだってここには苛立っていたらろう?」

「そーですね、舞台の上で楽しそうに高笑いしながら狂ったように乱射してましたしね」

「うるっさい!」

ニマニマと煽ってくる自分の記録者と図書館に、額に血管を浮き出させながらリリアさんは怒っているが、怒られた二人は顔を見合わせて笑っていて、全然反省していなさそう
だ。

「北の皆さんは仲良しですねえ」

「オレらも負けてへんやる?」

「ふふふっ、そうですねえ」

「クヒヤヒヤツ、ほらお前ら、あんま叫んどいたら煙吸ってまうぞ」

メイさんと冗談を言い合いつつ、その身を更に屈めた。頭を低くしながら「氣い付けてな」と俺達を気にしつつ先頭を走るドグさんに、唯一残った疑問をぶつける。

「俺達も窓から外に出ちゃえば、こんなに走る必要なくないですか？」

「ん？ それもそうなんやけど、それじゃつまらんやろ？」

「え！ そんな理由で俺たち走ってるんですか！」

「そんな怒んなや！ ちゃんとした理由も、もちろんあるで？ オレらが一番最後に出なきゃ、確認出来へんやろ」

確認？

何を確認しようと思っていたのか聞こうと、息を吸い込む。濃くなってきた煙が喉を刺激して「ごほっ」言葉ではなく咳が出た。

「シノカ、大丈夫か？」

スイエが心配そうにこちらを見ているのが分かったので、カサついて上手く出ない声の代わりに軽く笑って手を振って見せる。

まだ不安そうに覗いてくるスイエに気を取られていると、暗かった前方から光が差ししてきた。

「見つけた！ あれで最後やな！」

「シノカ後ろにいろよ！」

急に加速したドグさんとリリアさんに置いて行かれないように、絡まりそうな足を何とか動かす。

「おっさん、まてえええい！」

「スイエ！」

「はいっ！」

最後尾にいるからリリアさんの背中ので前の様子が見えない。

けれど、異様に楽しそうな笑いを含んだドグさんの叫び声に交じって、闇商の音が聞こえた気がした。

何が起きているのか。気になって前方を覗き込めば、十数歩先で警備員と坊ちゃんを追い抜いて走っているドグさんが見えた。

リリアさんとスイエはそれぞれ腕を伸ばして、抜かしそうになった警備員と坊ちゃんを捕まえる。

逃げていった三人に追いついたんだ！

引きずられている警備員と坊ちゃんは「離せ！」と、もがいて逃げようとしているが、掴んでいる腕はビクともしていない。

光が強くなつていき、段々と騒がしい多くの人の声が聞こえた。

「あつぶなああああああいいい！」

「ぐがっ」

「クヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

心底楽しそうなドグさんの声の後、呻き声と何かが倒れる音がした。

やっと見えた出口から抜ければ、眩しい光が目に入ってきて、目の前に広がったのは思つてもいなかつた光景。

「え」

「捕まえろ！」

無駄に眩しい光はライトからのものだった。

走つて出てきた俺達を待つていたかのように町の騎士団が銃を構えて並んでいる。

「盗人だ！ 助けてくれ！」

騒ぎに駆け付けたのであろう騎士団を見て、好機だと闇商が叫ぶ。

ドグさんに踏まれたまま、何とか騎士団の方に手を伸ばして、助けを求めている。いくら国務員の騎士団であろうと、図書館の顔は知らない。

説明をしようにも俺達を囲む騎士団を更に囲うように市民が集まっている。こんな大勢がいる場所で、図書館を語ることはできない。

どうすればっ。

「ふう、お疲れさん」

緊迫した空気の中、数多の銃口に身がすくんでいる俺の前に一步出たのはリリアさん。

リリアさんは気の抜けるほど柔らかな声を出して、もう一步騎士団に近寄った。

「その三人を捕らえろ！」

リリアさんが警備員と坊ちゃんをまとめて騎士たちに向かって投げると、一番前にいた騎士が闇商とその二人を指して声を荒げた。

啞然とそれを見ていれば、帽子を取って気がよさそうな笑顔の騎士団の一人が近づいてきた。

「リーラ！ 情報提供と捜査協力ありがとうな！」

「いや、こっちこそ。急に呼んじまったのに本当に助かったわ」

いつもと違う荒い言葉遣いのリリアさんと、親しそうに話し出したその人の胸には隊長バッチが付いている。

「こつちの処理は俺らがしとくから、リーラは好きにやってくれていいぞ。団員たちにもちゃんと言ったあるからよ」

「おう、助かるわ。ありがとう」

「シノカくん」

呼ばれて振り返れば、メイさんに手を引かれた。

「リリアさんにここは任せて、私達は盗まれた物の確認に行きましょう」

「リリアさん騎士団と知り合いだったんですね」

「そうですね、リリアさんは戦地に赴くことも多い北の司書ですから。こういったイレギュラーにも対応できるよう、偽名を使って多くの人と仲良くなっているそうですよ」

メイさんは俺の頭を軽く撫で「こつちです」と言っただけでリリアさんの話を無理やり切った。多分俺の顔を見て、話題を変えようとしてくれてるんだらう。

自分にはないリリアさんの司書としてのチカラ。

それを今回の事件でありありと見させられた。

司書らしい細かな記憶力と司書とは思えない強さ、そして広い交友関係。

羨ましく思ってしまうけど、簡単に真似できないものだとは分かっているから余計に悔し

く感じてしまう。

でも、今落ち込んでいても仕方ない。

「ドグさんとメイさん。俺と離れてた時に何してたか詳しく教えてくださいよ！」

「ええ。勿論」

「そんなおもしろい話やないけどな」

軽く首を振って、二人の隣に立つ。

少し先にいるジンさんが手を振っている所、回収した重要品が山を作っている場所へと急いだ。



闇商に雇われている身綺麗な男に案内にされて着いたのは、重厚感ある木製扉の先。

ジンと連れてこられた部屋は綺麗に整頓されていて、上等な椅子と机の上にはお茶菓子まで置かれている。

「こちらで、オークションをお楽しみください」

男が目の前のカーテンを開くと、ガラスを隔ててオークション会場を見渡せた。

照明がついていないので会場をはっきりと見ることはできないが、思ったよりも広い空間であることは分かった。

「お持ちいただいたモノの値が決まりましたら、すぐにその値からお支払額を決めさせていただきます」

男に視線だけ移して、その姿が扉の先に消えるのを見届ける。

「ふう、慣れないことはするもんじゃないね」

「そう言って結構ノリノリだったじゃないか」

クツクツと喉を鳴らして、ジンは目の前のお菓子を口に含む。

「ん、案外うまいモノを置いてるな。そーいえば、メイさんがよく作戦に乗ったな」

「乗ると思ってたから誘ったんじゃないんですか？ あ、それちょうだい」

渡されたお菓子の匂いを嗅いで小さく齧ってから、食べる。

闇オークションの待機室に似合わない上品な味わい。もくもくとお菓子を口に含んだまま質問に質問で返せば、にやけた顔でジンは肩を揺らす。

「貴方からドグが潜入したままだと聞いたとき、九割確信したな」

「ふふっ、そこで判断したんですか？」

「そりゃあそうだろう。アンタがドグの許可なく勝手に動くことなんてほぼないからな」

「今回は許可なんて取れる状況じゃありませんでしたよ？」

「クハハッ、確かにそうだな。でもアンタが動いたつてことは分かってたんだろう？」

「バタバタと騒がしい音がどこからか響いてくる。段々と近づいてくるそれに小さく笑みを溢して、私はジンに背を向けた。」

「ええ、だって」

「上からガゴッと何かが壊れる音がして、目の前に天井の破片とともに大きな何かが降ってきた。」

「メイさんおまたせっ！」

「ドグさんは私の記録者ですよ？」

飛びついてきたドグさんを受け止める。

こちらの心配など意味なかった程に元氣な姿で安心する。見たところ怪我もなさそうだ。

「やっぱりメイさんやったんか！」

「ドグさん、お久しぶりです。お怪我はありませんでしたか？」

「無いで！　メイさんこそ大丈夫なん？」

私の全身を確認するのを見て「大丈夫そうやな」と笑い、机の上のお菓子を見つけるとそちらに走って行った。

いつも通りの姿に笑みを溢しながら、彼の隣に座る。

「ドグさん、現状の報告をお願いしますか？」

「ん！　ええで」

ドグさんは頬が膨らむほど、口に大量にお菓子を詰め込みながら器用に話した。

「オレが帰れなくなったのはこの警備が急にゲンジューになったからや」

「警備が……リリアが捕まったからか？」

「流石ジン、あつとるよ」

お菓子を飲み込んでドグは何枚もの写真を机の上に並べた。

「とりあえず、これ見てみ」

そこには捕らわれているリリアを映したものから、ジンが持っていた写真に近い北の三人を隠し撮りしたものである。

「リリアが記録者と勘違いされて掴まったんはしつとる？」

「ああ」

「じゃあ話は早いわ。急に警備がゲンジューになったから、その原因を探りに行ってリリアと会ったんよ」

思いつくように上を見て「そこで話したんやけど」新しい菓子を手に取りながら話を続けた。

『俺を記録者と確定するのにアイツら写真を持ってた。どうやって写真を手に入れたのかは分からないがその回収を頼んでもいいか？』

「ってリリアから頼まれて、写真はぜんぶ回収したんよ」

「これで全部か？」

「せや？ 無理にここから出てくよりゲンジューな警備の中にいる方がユウエキやってリアに言われて、メイさんとの合流も諦めて、この地下中調べたんよ」

「そうだったんですね。何か分かったことはありますか？」

待ってましたと言わんばかりに自慢げに笑うと、ドグは大きな紙を二つ広げた。

「オレめっちゃ色々調べたんよ」

広げられた紙は手書きの地図。それはジンが持っていたものよりも細かく記されていた。

地下に入るまでの地上一階にある迷路のような通路とその通路にある畏の正確な位置から、オークションの行われる地下二階と今いる地下一階の詳細な地図。

地下の地図は地上一階の地図よりもっと詳しく書かれており、部屋の中に何があったままでこの地図を見るだけでわかった。

「これはリアが作ってくれた地図な。アイツ凄いわオレがダクト通って見たもの伝えただけでこんな完璧に地図作ってまうんやもん」

「ほう、思っていたよりも細かく調べてあるな」

「ふーん！ これくらい当たり前やもん！ 地上一階は部屋の中身をぜんぶ調べきれてへんくて」

「いえ、大丈夫ですよ。地上階には重要なものは隠していないことは分かっていますから」

「むしろ、地上階の迷路を完全に攻略してあることが素晴らしい。ドグお手柄だぞ」

「くひ、いひひひ」

フードの中に手を差し込んで、ジンがドグの頭を撫でる。

その雑な手付きに文句も言わず、むしろ嬉しそうに笑み溢しながらドグはもっとと強請るようにフードを外してメイにも頭を差し出した。

満足そうに頬を膨らませるドグさんは私に撫でられたつつ、地図を指す。

「ここにリリアがおつて、ここが盗まれたもんが集まつとるところ」

「なるほど。リリアのことはスイエに任せてあるから大丈夫だ。それより重要品をどうするかだな」

「そうですね。思っていたよりも多いので運び出すのに時間がかかりそうですが」

「それなら大丈夫やで？ リリアが応援呼んどるから！」

フードをかぶり直してあっけらかんと言ったドグの方を見て、メイは驚いた顔をしたが、ジンは納得したようにゆっくりと一度瞬いた。

そして口角を上げると足を組み直して、ニヤけた顔を隠そうともせず話し出す。

「あいつはリーラという名で騎士団と仲良くしてたからな。そこを呼んだんだろ？」

「ん！ あつとるで」

「応援はいつ呼んだんだ？」

「さつき！ 騎士団にきんきゅー信号が届くつてやつリリアに貰つとつて、それ鳴らしたんよ。ウラグチで合流らしいで、裏口の見張りノせば合流できるで」

裏口は今いる部屋から然程遠くない。一本道をずっと真っ直ぐに行くだけだ。

盗まれた重要品は地下二階にある。今いる階より一つ下だ。

「階段がここなので、運ぶのは簡単そうですね」

地下二階に繋がっている階段は裏口の目の前。盗品は地下に繋がる階段に一番近い部屋にある。

この分なら裏口から盗品を運ぶことも警備員のふりさえしてしまえば簡単でしょう。

問題は運ぶタイミング。

「運び出すのはオークションの途中からだな」

「ええ。オークションの商品として舞台に出た後の物から回収して外に運び出しましょう」

「オークション前じゃなくてええの？」

計画内容を知らないドグさんが不思議そうに頭を傾げている。

久しぶりに大きな仕事の気配がして嬉しいのか、左右に首を振りながら「なんで？ なんでなん？」と言葉の続きを急かしてくる。

口の周りに菓子をつけて無邪気に笑っている姿は年相応で、まだまだドグさんも子供なんだと思わせる。

「くくつ。ああ、オークションの様子も記録したいし、なにより客をちゃんと集めることが重要だからな」

「お客さんは皆捕まえないといけませんからね」

「目玉商品のリリアが舞台上がったとき、一番の盛り上がるの時に一気にネタ晴らしし

よう！ リリアにも指示は伝わっているだろうし、絶対に面白いぞ？」

「ヒヒッ、なんやめっちゃ楽しみになってきたわ」

肩を揺らして笑うドグさんの口の周りを拭いてやりながら、彼にやってほしいことを伝えた。

「ぜんぶ終わったで！」

「おかえりなさいドグさん。お疲れさまでした」

見慣れぬ作業着に身を包んで、ドグさんは堂々とドアから部屋に戻ってきた。

「その辺にいた邪魔そうなヤツはぜんぶ倒したから、もう移動できるで！」

「じゃあ行くか」

オークシヨンの舞台裏まで誰かに止められることもなく、スムーズにたどり着けた。

裏口にはもう騎士団が待機しているらしく、ジンが一度外の騎士団に指示を出していたので、そちらの心配もない。

舞台袖で当たり前のような顔をして座っていれば、周りの作業員は気にする様子もなく自身のやるべき準備を続けている。

作業着に身を包み作業員に扮したドグさんは予定通り盗品の運搬係りに潜り込めたようなので、盗品を倉庫に仕舞いに行くふりをして外に運ぶことも簡単だろう。

「順調に進んでいるな」

「そうだね、私達は私たちの仕事に集中しましょう」

暗くなった舞台とは反対に客席が薄っすらと照らされる。

段々と入ってくる人達を一人ひとり記録していきながら、オークションの開始を待った。

オークションが始まった。

落札された盗品をドグさんが回収して捌けてくれば、それを倉庫に持っていくふりをしつつ、外で待機している騎士団に渡す。

盗品の他にも小さな子供や見たこともない生き物もいたが、それも同様に騎士団のもとまで連れていき、保護してもらっている。

オークション中、舞台裏は真っ暗なので私とジンも品を運ぶ手伝いをしようと思いました。が、逆に時間が掛かるとドグさんに止められてしまった。

呆れたように「そんな暇ならこれ記録しとき」と言ってドグさんは顧客名簿と商品の仕

入れ先一覧などが書かれている資料を渡してきた。

そんなことをしていれば、舞台裏に今回の目玉商品が入っているらしい布の被さった檻が運ばれてきた。

それが檻だろう、というのは布から出ている鉄格子の部分で分かる。

体格がよく背も高いリリアさんがあそこに押し込められているとしたら、かなり負担がかかっているはず。

そういえば、ジンからリリアさんのオークション中に大きな行動を起こすとは聞いていました。詳しい内容までは教えてもらえませんでしたね。

『その時までのお楽しみだな！』

なんて言っていました。ここまで来たならもう教えてもらっても大丈夫でしょう。

「ジン、リリアさんが起こす大きなアクションって何なんですか？ あの中にもできるものなの？」

ジンの耳に口を寄せ、小さな声で問いただせば「えー、あつとー」なんて言って、彼らしくなく歯切れが悪い。

「どうした？」

「あー、実は俺にもわからん」

「え？」

こちらに視線も寄こさずにジンは腕を組み直して顎を少し上げる。偉そうでなぜか自信満々のその様子に眉を顰めた。

「いやー、好きにやれと言っただけだからな！」

「あつあなた一番重要なことを指示してないんですか!？」

「そう興奮するな！ アイツも俺のことをよくわかっている筈だからな、『』は『』というのは分かっているだろう」

そのあまりにも適当な物言いに、先ほどまであつた焦りよりも呆れのほうが強くなってしまう。

「そんな、適当な。しかもリアさんは今、檻にいるんですよ？」

「クハハハ、申し訳ないと思うがそれは大丈夫さ」

「大丈夫？」

勝ち誇ったかのようなジンの顔を見て、ふと気づく。ジンの目は檻の方になんて一切向いていなかった。

「ああ。アイツが簡単に捕まったままいるわけがないからな」

ジンの目は檻の近くに待機している警備員に向いていた。

その警備員は舞台上上がるからか他の警備員よりも良い制服に身を包んでいる。なにか気になるのかとその警備員に目を凝らす。

舞台上で司会者が、目玉商品について話し出した。檻を押そうと警備員が動いたとき、不可解なくらい深く被った帽子から覗いた赤い目が一瞬光った。

「え、もしかして」

「気付いたか？ やっぱりアイツはおもしろい」

そのまま舞台上に消えていった警備員、その背を見たまま固まっているメイの肩を叩いてジンは笑う。

警備員とは入れ違いで来たのは作業着のドグで、二人を見つけると駆け寄ってきた。

「これで終わりやな」

「ああ、目玉商品の前にあの二人が出品されていなかったということは、あっちも上手く

やっているんだろう」

「優秀な子達ですからね。さて私達も移動しましょうか」

最後の盗品を外に運ぼうとした時、後ろから悲鳴が響く。

思わず全員で足を止めて振り返れば、舞台の上である警備員がその場の視線を全て奪いながら心底愉快そうに肩を揺らした。

「あひつあひやひやひやひや」

悲鳴が止み、響くのは不気味な笑い声。その声はよく知った彼のものなのに、彼らしさのない笑い方が彼の怒りを強く感じさせた。

「さてつと、全員逃げれると思うなよ？」

彼、リリアさんはそういうと、舞台を照らしていた照明の一つを銃で撃ち抜いた。

「ずるい！ ええな！ ええなああ！」

リリアさんが暴れている音は舞台裏から廊下に出ても聞こえてくる。その音が大きく響くたびにドグは羨ましそうに舞台の方に視線を向けている。

「ドグさん少しだけ我慢してください」

「だつてずるいやん！ オレも、もつと遊びたい！」

「盗品を全て外に出して、重要な書類さえ回収できれば遊んでもいいぞ！」

騎士団の待つ裏口から出れば、ドグは「リリアばつかずるい」と言つて、頬を膨らます。

可愛そうだけどドグさんも暴れるとなれば何が起きるか分からない。

頬がどんどん丸くなつていくので押して空気を抜こうと手を伸ばせば、先にジンが勝手に許可してしまった。

「ちよつとジン！」

「ほつほんまに!? オ、オレ取り忘れがないか見てくるわ！ ここで待つてな！」

急いで伸ばしていた手で捕まえようとしたが、その時にはもうドグさんは階段を下りて地下に戻つていて手は届かない。

「あつ、はやい、もういない！」

「アイツがここまでテンション高くなるとは、本当に遊びたいんだな」

「西は貴方たち北と違つて戦うことも少ないですから。ドグさんが私の許可なく遊ぶことはないとは分かつていますけど、はあ、変に自分から危険な目にあつてほしくないのに」

「まあ、いいではないか。たまには羽を伸ばさせてやるのも」

「それは、そうですね。もうっ、分かりましたよ」

抱えなくなる頭を真っ直ぐ保って、騎士団の皆さんにこれからの指示を出す。

私達は作業員から客、主催の闇商まで全員を表の入り口に誘導する。

騎士団は表の入り口に張って、出てきた者を全て捕まえていく。

誘導ができれば私達はその人波の最後尾につき、人が残っていないかを確認して出る。

私たちが出てくるまで騎士団は動かず、表の入り口を厳重にこの酒屋を囲む。

私達は外を指しながら、重要な書類やオークションに関わった人の証拠を集める。

集め終えた後、もう二度とこのような場所が作られないようにして私達は外に出る。

「それでは、出てきた人の確保は任せますよ」

「分かりました」

「保護した人や動物たちの様子はどうですか？」

「痩せすぎているものはいましたが、怪我は見当たりませんでした。病院のほうに連絡を取って医師たちがこちらに向かっています」

「そうですね、よかったです。では、私達は地下に戻りますので外のことは頼みましたよ」

「はいっ。国務員の皆さまもどうかお気をつけて」

「はい、皆さんも」

この町の騎士団で団長をしているという青年は人好きしそうな笑顔を浮かべ深く頭を下げた。そして、ゆっくりと顔を上げると俯き気味に目を泳がす。

「あっあと、リーラのことともよろしくお願いします」

さきほどよりも勢いよく頭を下げた団長にジンが近寄って、団長の肩を軽く数度叩いた。「もちろんだ。それでは、また後で」

「リリアさん、好かれているみたいですね」

「そうだな。アイツが捕まったと話さなければ、騎士団がこうも簡単に協力してくれなかっただろうな」

嬉しそうに目を細めるジンと地下に繋がる階段へと戻る。全ての盗品の無事も確認できた、あとは太陽の涙だけだ。

階段の前ではドグさんが待っていて、私達を見つけると駆け寄ってきた。

「ぜんぶ重要そうなもの運び終えたで、メイさん、あっあそんでもええ？」

人差し指の指先を合わせて、ドグさんが下から覗くように見ってくる。いつもより幼く見えるその姿。

ここで駄目というのは私がいじめているみたいじゃないですか、もう。

「いいですよ、でもやるなら徹底的に確実な方法を取りましょう」

「ほっほんまに！ やった！」

「私もこのオークションには腹が立ってたんです」

「ほう、では何をするんだ？」

「簡単ですよ」

わくわくと楽しみな感情を隠そうともせず、キラキラとした目の二人に手招きして顔を寄せ合う。

「こんなのどうでしょう」

目の前で轟々と広がっていくのは、赤い炎。

燃料を撒いてはそこに火をつけていくドグさんはご機嫌に鼻歌を歌っていて、ジンはその光景に腹を抱えていた。

「みてみてメイさん、ジン！ キレイに燃えとるよ！」

「くくっ、上手いぞドグ」

「上手ですよ！ でも気を付けてくださいね！」

「わかつとおよ！」

火をつけているのは闇商を捕まえた後で、またここを使ってオークションが開かれないうようにするため。という建前で、本当はただここに対して全員が感じている怒りをぶつけたかったのが本音だ。

もくもくと部屋全体を覆う煙りが多くなってきた。

「そろそろ行きましよう！」

「ドグ！ その辺の棚を壊して倒しとけ！」

「りよーかいっ！」

ドグさんがストレスを発散するように家具を壊しては火の前に積み上げる。ドアを開けて手招きすれば、最後に一番大きい棚を蹴り倒してドグさんが走ってきた。

「これで、自然と作業員や警備員も逃げるでしょう。火事が起きていることを伝えながら合流を目指しましょうか」

「火事に気付いたときにはもう消せないくらい火が大きくなってるだろうな」

「はよ年少組とリリア回収してやらんとな、火事は説明しとらんし」

ドアを閉めても零れる煙は、あまりここに留まっているのが危険だと伝えてくる。

「走りたいんやけど、二人は……ムリやな！」

私たち二人をきよろきよろと見て、弾けそうな笑顔でそう言ったドグさんはジンの手を取ると急に背負った。

「うおっ」

「しっかり捕まっとけえい」

ジンの腕を首に回すと、どこからか出した紐を通しておぶっている状態で固定する。

ドグさんが手を離しても紐で固定されているため、ジンが落ちる様子はない。

両手が自由になったドグさんは私を抱き上げる。

大人二人を背負っているのに、ふらつくこともなくしっかりと立ち「二人ともちゃんと掴まっとつてな」と言うドグさんは凄い速さで走り出した。

私達を背負ったまま、こんなに早く走れるドグさんについてくことは私とジンには「ムリ」でしょう。

どんどんと加速していく。振り落とされないようにしっかりと捕まりながら、ずっと別行動をとっていた二人を探す。



「つて感じだったんだって」

「なるほど、やっと全貌が見えたわ」

隣で座っているスイエはふかふかのソファに体を沈めて「はああ……」と深く息を吐いた。

あのオークション事件から早半月。

図書館と記録者と司書の写真が出回っていること、東西南北の枠を超えての大きな事件が起きた場合の今後の対応を話し合うために会議が開かれることになった。

会議は中央国家施設の図書館専用の『記録宮』で、今、行われている。

記録宮には初めて来た。

広くて大きいここは図書館たちが好きに使えるようにされており、本来の使い方としては中央に用事があったりやってきた図書館達が、その間住めるように作られたものらしい。

今、図書館達は会議をするために一番奥の豪華な部屋にいる。

図書館の他に東西南北から合わせて、記録者一名と司書二名が会議に同行することになったが、俺は専攻漏れして会議室には入れてもらえなかった。

俺と同様に外で待機となったスイエと一緒に会議室に近い部屋で暇を持て余していた。ぼっと待っているのも退屈で、あの日メイさんたちがどう動いていたか詳しく知らないというスイエにメイさんから聞いた話をしてやった。

スイエたち北の三人は、特に今回の事件の後処理に追われていたため、詳しくジンさんから話を聞けてなかったらしい。

俺の話を聞いて色々疑問がなくなったのか、どこかすっきりした表情でいるが、その目の下は黒く隈ができています。

「スイエ寝てもいいよ？ 会議終わったら起こすし」

「いや、大丈夫。会議に参加させてもらえなかったとしても、記録者としてちゃんとしたい」

「そっか、わかった。無理はすんなよ」

「うん。ありがと」

グッと伸びをして浅く座り直すと、スイエは頬杖をついて会議室のほうに目を向けた。

「記録者から二人って言われてドグさんが確実なのはわかってたし、自分が選ばれにくいのは分かってたけどなあ」

「あははっ、東西南北で記録者か司書一人出せて感じてだったからなあ。司書がリアアさ

んのそつちと記録者がドグさんの俺らじゃ選ばれないよなあ」

悔しいけど、俺はまだ司書になって日が浅い。重要な会議で厳選された人を集めるときに選考漏れるのは何となく納得もしてしまう。

「記録者はドグさんの他のもう一人は誰だっけ？」

「えっと確か南の記録者だったはず、名前はシャルロットだっけかな」

「へえ、女の人で記録者とか珍しいな」

「いいや、ソイツ男だぞ」

「男でシャルロットか珍しいね」

他の区域を担当している図書館や記録者と司書について、自分は詳しくない。

今日ここに着いたのも東西南北で一番最後だった。メイさん、ドグさんと別れてすぐにスイエに声をかけられてこの部屋にいるが、他の人は見かけていない。

「司書はリリアさんともう一人は？」

「東の司書、ロフィーリカ・陶歌とうかさんだよ」

「なに？ 知ってるの？」

「そりゃ有名だからな、あの人もともと施設では記録者の授業に出てたんだよ。成績優秀で体力テスト以外は全部上位取ってたから」

「リリアさんといいその人といい、記録者レベルの強さを持つ司書が二人とか。チートすぎでしょお」

そりゃあ自分が選ばれなかったわけだ。

ロフィーリカって人はどんな人なんだろう。リリアさんよりも屈強でめっちゃ大男とか？ いやそれとも細身で寡黙な剣とか使ってるタイプの人かも。

「東は特におかしいから、そんな悲観しなくて大丈夫だいじょーぶ」

こちらを見て小さく笑ったスイエは、ゆっくりと頷いた。

「おかしいって？」

机の上へべたつと片頬つけて見上げれば、ずれた眼鏡を奪われて、それを自分の頭につけたスイエが少しふざけた様子で話す。

「東はな、司書と記録者に限らず、図書館まで戦えるんだよ」

「は？」

思いもよらない内容に、体を起こして頬を机から離す。

「珍しいよなあ。全員が強くて記録者になろうと思えば全員なれてたって噂だよ」

「うっそお、図書館イコール戦闘力幼児並みだって勝手に思い込んでた」

「まあ、シノカがよく見ているのはメイさんだし、次に会ったのはうちのジンさんだから。そう思っちゃうのも仕方ないな」

「東がチートなんじゃん」

身体から力が抜けて、また頬が机にくつつきに戻ってしまふ。

そんな俺を見て楽しそうに笑いながらスイエは俺の真似をして、机に頬を乗せる。

「チートって言うてるけど、記録者としてなら圧倒的にドグさんが強いし、司書としてリアさんを抜かしてる人もいないから俺らの近くにもチートはいるぞ？」

「あつ、ほんとじゃん皆チートだったわ」

「あれ？　じゃあなんで東が強いつていうなら、東の記録者が選ばれてないの？」

「それはロフィーリカが司書としていくことが決まってたからだよ」

「「え」」

「久しぶりだねスイエくん、初めまして西の司書くん」

急にかげられた声に驚いて前を見ると、そこにいたのは見たことのない男の人。黒い髪に明るく鮮やかなピンク色の目が浮かんでいる。

「俺は東の記録者。ラルス・ギルニツジです、どうぞよろしく」

ラルス・ギルニツジと名乗ったその人は、人好きする笑顔でこちらに手を差し出した。

「お久しぶりですラルスさん」

スイエの声に慌てて、差し出されているその手を取る。

「あ！ シノカ・ペンテユです、西の司書になりました。よろしくお願ひします」

「シノカくんか、よろしくね。あ、良かったら二人ともこれどうぞ」

ラルスさんが机の上に置いたのは少し大きな紙袋。「うちの区域で有名なんだ」と言いながら紙袋から出てきたのはいくつかの焼き菓子。

気さくに声をかけてくれたラルスさんの第一印象は、今まで会った誰よりも関わりやすく感じる。

「うわあ、美味しそう！」

「本当にいいんですか？」

「ふふつ、全然いいのいいの。会議室の中でもお菓子とかは出てるからね。俺達ばかり何も無いなんて不公平だと思わない？」

目の前に座ってそう言いながら、わざとらしく頬を膨らます。

その様子にちよつと笑ってしまっただけで、ラルスさんは俺を咎めることもなく、一緒に笑ってくれた。

「そうそう、さっきの話だけだね。俺が選ばれなかったのはウチの司書の参加が決まって

たからなんだ」

「あっ、それ」

「あはは、気にしないで。別に嫌な話でもないし、怒ってもないからさ」

失礼な話をしてしまったてたんじゃないか、と心配したがラルスさんはまったく気にしてない様でマフィンを口に入れて「これ美味しい」なんて呟いている。

「じゃあ話聞いてもいいですか？」

「うん、いいよ。ウチの司書は記録者くらい動ける子でね。今回は図書館が四人全員揃うでしょ？」

クッキーを食べながらスイエが問いかければ、ラルスさんは軽く答えてくれた。投げかけられた質問に頷けば、ラルスさんは机にクッキーを並べ始める。

「まずね、前提として強い者が近くにいない必要があるのは分かるでしょ？」

そうやってラルスさんは簡単に説明してくれた。

図書館は何よりも守らなければならぬ存在。

四人とも一か所に集まることは本当に珍しい。

そうなれば、その警備を固めなければならぬのは当たり前だ。

だからと言って、会議の場を記録者四人で埋めるのは司書の育成にもならないし、司書

にも記録させる必要がある。

なら司書の中でも特に非常時に戦える者を選ぼうと図書館達が決めた。

「それで、司書はリリアとロフィーリカに決まってたんだよ」

「なるほど、記録者で司書レベルの記録ができる人なんて今はいませんしね」

「そういうこと。で、じゃあ記録者は司書が北と東から出てるから西と南から出そうって決まったんだよ」

まあ、ドグは確定して多様なもんだけだよ。

そう付け加えて、ラルスさんは並べていたクッキーを順番に食べた。

自分の力が足りなかったからなんだと思っていたがどうやら違ったみたいで、少しほっとした。

「それに記録者と司書を上位二名ずつ選抜してるとしたら、司書は北のリリアと南の司書が選ばれているだろうし。記録者なら西のドグと東の俺一択だったと思うよ」

変わらぬ笑顔でそう言うと、ラルスさんは立ち上がった。

「言い切るんスね」

ラルスさんに嘯みつくようにスイエがそう言えば、それを予測してたかのようにラルスさんは目を細めて声を出して笑う。

「あはは、うん、そうだね。俺ね、こう見えて強いから」

ピンク色の目が一瞬強い光を放ったように見えたが、すぐにラルスさんが目を閉じて笑ってしまったので見えなくなってしまった。

不思議と自信满满的な彼の言葉はこちらに不快感を抱かせず、ただの事実をそのまま伝えられたみたいに変な気持ちにさせられた。

紙袋を持って、ラルスさんはそのまま会議室の方へと向かって行ってしまう。その姿を目で追っていれば、会議室のドアが開いた。

「あー！ 疲れた！」

「なかなかいい話が出来たな」

「たまにはこうして全体で集まるのもいいかもしれないね」

「カッカッカ！ それもおもしろそうやな」

ラルスさんが開けたドアから出てきたのは、ジンさんとメイさんと見知らぬ人が二人。

「お疲れさまでした」

なぜ会議が終わったことに気づいたのかは分からないが、頭を下げてドアを開けているラルスさんは当たり前だというように平然とそこにいる。

ジンさんとメイさんが俺達の方を見て、目が合ったので急いで立ち上がる。

その後ろから二人に就いて、ドグさんとリリアさんも出てきた。四人がこちらに向かっているのが分かって、こちらからも駆け寄る。

「お待ちせしました。シノカくん何も困ったことかはなかったですか？」

「はい！ 大丈夫です」

「くくつメイさんは甘いな。スイエいろいろ新しく決まったことがある、リリアさんに聞いて会議内容を共有しておけ」

「はい。ジンさん、リリアさんお疲れさまでした」

メイさんに頭を撫でられてる俺を意地悪く笑って、ジンさんはスイエの肩を掴んだ。

スイエは先程とは違いハキハキと答えると、ジンさんに預かっていた帽子を渡す。

会議内容が知りたくてうずうずしてるスイエのために、わざとそんな指示出して行くせに。

ジンさんだって十分甘いじゃん。

口には出さなかったが、そう思ってジッと見ていれば、メイさんに「こら」と頬をつつかれた。

「シノカ退屈やったやろ？」

「あ、いえ。スイエと前の事件の話をしたり、ラルスさんとお話させてもらっていたのでラルスさんのいた会議室前の方を覗き込めば、こちらに背を向けている誰かと親しそうに話しているのが見えた。」

たしか、あれはジンさんとメイさんと一緒に出てきた二人のうちの一人だったような。もしかしてあの人が東の図書館なのかな？

そちらに気を取られていると、ジンさん達が「俺達はこれで帰るな」と荷物を持ち始めていた。リリアさんの手にはラルスさんの持っていた紙袋もあった。

「あ、それ」

「うん？ ああ、ラルスから貰ったんだよ。ジンさんとスイエが甘いもの好きだつて覚えてくれてみたいでさ、良かったらつて」

俺達がもらったお菓子とは違って、もつとクリームが使われているようなソレはつまんで食べるには不向きにみえる。

もしかして、俺らが食べた焼き菓子はわざわざ汚さずに食べれるものを用意してくれただのかな。

「そういうリリアさんもいっぱい食べるじゃないスカ」

「俺はしょうがない、育ち盛りだからな」

「俺も育ち盛りだぞ！」

「アンタはダメですよ！ ジンさん甘いもの食べたたらご飯食べなくなるでしょ！」

騒ぎ出したジンさんをリリアさんが肩に担いで、リリアさんとスイエは俺達に軽く頭を下げた。

「あの時はありがとうございました。また一緒にすることがありましたらよろしくお願い致します」

「こちらこそ、またお会いしましょうね」

「おう、じゃあな。三人とも」

担がれたまま手を振るジンさんに頷いて、スイエに手を出す。一瞬目を見開いて「ふはっ」と噴き出したスイエはその手を強く握った。

「スイエ元気でな！ 手紙とか書いてやるから寂しがんなよ？」

「寂しくなんかねえーよ。またなシノカ」

痛いくらい握りあっていた手を離す。

手を振って「それじゃ」と部屋を出ていった北の三人の背が見えなくなってしまった。

次会えるのはいつになるか分からないけど、今度会ったときはスイエを驚かせるくらいの成績を残してやるんだ。

「随分仲が良いみたいやな」

急に頭が重くなつた。吃驚して振り向くとそこにいたのは、自分よりも背が高く光をそのまま取り込んだような金髪の男の人。

さらさらと揺れる長い髪は紫色の組み紐で括られていて、綺麗な顔に燃えてるみたいな真つ赤な瞳が強い印象を与えてくるその人は端正な顔に似合わぬ意地の悪い笑顔を浮かべていた。



「ネヴィヤん！ 話終わったん？」

「おう、ドグ。向こうさんとは話しついで」

俺の頭に腕を乗せたままドグさんと話し出した人は、ネヴィと呼ばれた。

あれ？ ネヴィって、どこかで聞いたことあるような……。

「えっネヴィって、もしかして東の図書館のネヴィクイーズ・エトーカさん？」

「せや？ 無駄に長いで、ネヴィでええよ」

大口開けて「ガハハハ！」と笑いながら、ネヴィさんは俺の髪をガシガシとかき混ぜるように撫でた。

「あのスイエと仲良さそうにしとるヤツはなかなか見んからな！」

「それはネヴィがスイエをいじめるからでしょ？」

呆れた声でやってきたのは、ラルスさんでネヴィさんの手を俺の上から退かすと「ごめんね」と困った顔で謝ってくれる。

「大丈夫ですよ」

「そう？ この人、嫌だつて言わなきややめてくれないから、嫌だと思ふことがあつたらちやんと言うんだよ？」

まるで母親が子供に言い聞かせるみたいに小指を絡めて「約束ね」とラルスさんが言った。

それに笑つて「はい」と返せば、声を弾ませたドグさんがラルスさんの空いてる方の手を引つ張る。

「な！ な！ フィーロはどこにおるん？」

「ん？ リカなら、会議室の中に忘れ物取りに行つてるよ」

「分かった！ ありがとうーな！」

会議室の方に走って行ったドグさんを見て、メイさんがクスクスと肩を揺らした。

「ドグさんあんなに嬉しそうに、どうしたんですか？」

「仕方ありませんよ。ドグさんにとってリカくんは親友で相棒で兄弟のような人ですから」

「親友で相棒で兄弟？」

「ちなみに『リカ』も『フィーロ』も東の司書ロフィーリカさんのことを指しています」

目を閉じてうんちくを語るふうに、指を立てながら話し出したメイさんは楽しそうに、この人の記録は、関わった個人の情報も詳細に記しているのだろう。

「ドグさんは『フィーロ』って呼んでいいのはオレとネヴィだけなんやで！」と嬉しそうに話してくれますから、リカくんが来たらなんて呼べばいいですか？って聞くといいですよ」

「メイさんそんなことも細かあーく覚えとんのやな」

「一度見聞きしたことは忘れないですから、図書館とはそういうものですよ」

「まあ、それが仕事やしな」

腕を組んでゆつくりを頭を上下させるネヴィさんは、何か思いついたのか目を見開き、手を音を立てて合わせた。

「仕事といえば、これから忙しゅうなるで？」

にやにやとした笑みで俺とラルスさんを交互に見ると、メイさんと肩を組んでネヴィさ

んは高らかに言った。

「ある件を東と西で合同調査することになったで！　これから、よろしくな！」

ポカンとしたままの俺を見て、もつと嬉しそうに「ぶあははは！」大声で笑うネヴィさんとその横で優しく微笑んでいるメイさん。

このまとまりのなさそうなメンバーで合同調査。

あべこべな二人の図書館の反応に、これからのことを考えて頭が痛くなった気がした。

「ぼっぼー、ぼっぼー。あれ？　みんなどうしたん？」

固まっている俺と、違いはあれど笑ってる図書館の二人に困った顔のラルスさん。

帰ってきたドグさんは心底不思議そうに頭を傾けて、キョロキョロと全員を見渡す。

この膠着した状況をやっと動かせるきっかけが来たとドグさんの方を向いて、俺はまた固まってしまった。

それは珍しくドグさんがフードを外しているからとか、フードだけじゃなくてドグさんの口当てまで一緒に外れてるのは初めて見たからとかではない。

ドグさんの上。

「ドグ。ちゃんとあいさつしたいから、降りしてくれへん？」

いや、正確にはドグさんに肩車された、小さな女の子がそこにいたからだった。

「久々にあつたんやから降りしたない」

「もう、我が儘言わんの、な？ 手やったら貸したるから」

「それなら、いたしかたないなあ」

ドグさんの肩の上からぴよんと飛び降りたその子は、立っていると更に小さく感じる。

「メイさんお久しぶりです、シノカくんは初めましてやね。東の司書、ロフィーリカ・陶歌どろがいます、これからよろしくな」

錆びついた機械のようにうまく動かない手をなんとか伸ばして、握手する。

大きな目は黄色に青い絵具を零したような色で存在感はあるのに威圧感はない。ハーフアップにまとめられた髪は結われているところは黒く、下りている髪は鮮やかな青色。

とても変わった髪色なのに、異常だという気持ちよりもその不思議な雰囲気似合っていると感じた。

「西の司書シノカ・ペンテユです。なんとお呼びしたらいいですか？」

メイさんに言われたことを思い出してそう聞けば、ロフィーリカさんの頭の上にドグさ

んが顎を置いた。

手を繋いだままドグさんが後ろに回ったので少しロフィーリカさんが顔を歪めたが、ドグさんを咎めることなく諦めたように息を吐く。

「シノカはリカって呼んだらええよ！ フィーロって呼んでいいのはオレとネヴィだけなんやで！」

「こういうことなので、リカって呼んでください」

「分かりました。俺はシノカでいいよ、リカちゃん」

一瞬、リカちゃんの眉が動いた。

また硬直した場。俺、言っではいけないことを言ったんじゃ、と心配になる。

急いで記憶を辿っておかしいところがなかったか確認していると『リカくん』とメイさんが言っていたのを思い出した。

メイさんなら女の子にも『くん』って付けそうだと勝手に思っていたが、それがそのままの意味だったら。

「最近では直接聞かれることもなかったでびつくりしてもうた。ごめんな、紛らわしいけど僕男やし、なんなら君より年上やで」

「年上?!」

「クヒヒヒッ、シノカは悪くないで。フィーロがちつこいのが悪いからしゃーないわな」

「まだ成長期がきてへんだけやもん！」

「お前の成長期は冬眠でもしとるんか？」

言い合いを始めた二人は本当に兄弟みたいだ。

罵り合ってはいても、その声色から本気じゃないのも、怒っていないのも、伝わってくる。

「ほら、遊んどらんで今後について話し合うで」

「はーん」

ネヴィさんの言葉に声を揃えて返事した二人は、それぞれの図書館の隣に戻った。

「ここで話してもええけど、それじゃつまらんな。よし、俺んところに行くか」

「いいですね、東に行くのは本当に久しぶりです」

勝手に決めてしまったネヴィさんに目をキラキラさせて、メイさんはこくこくと何度も頷く。これはまたリードが欲しくなるかな。なんて吐きそうになったため息を飲み込んだ。



西の図書館の書室とは全く違う雰囲気のは『東の図書館の書室』だ。

重厚感ある古い要塞ふうな外観とは違い、清潔感と真新しい家具が揃えられた内装。

木造建築で植物や自然を多く感じる西の図書館の書室とは色々正反対で、ここがすごく新鮮な場所に感じた。

「クアツカカカツ、まあ寛いでくれや」

机を挟んで向かい合ったソファは見るからに高価そうで、そこに座つてすぐ「さっそく合同捜査について話そか」とネヴィさんは笑った。

メイさんに手招きされて、俺はメイさんの隣に腰かけた。

大きなソファに体を埋めて、足を組む姿は偉そうだけど妙に似合っている。

そんなネヴィさんと変わって、ソファの後ろに控えるように立つリカさんと部屋の隅でお茶の準備をしているラルスさん。

座る様子のない二人に、自分だけ座つてるのが申し訳なる。

「気にせんでええですよ。僕ら三人はいつでも動けるようにって立つとるだけやから」

「ああ、気負うか。フィード座つてええで？」

「いいえ、ネヴィ様をお守りでいなくなりますから」

リカさんはソファの後ろに立ったまま腕を後ろ手に組み、首を振った。仕事の話が始まるまで『ネヴィさん』と呼んで仲が良さそうだったのに、今の彼はまるで従者みたいだ。

「ラルスもドグもおる、大丈夫や。ここでええから座るとき」

ポンつとネヴィさんが背もたれを叩くと、ほうつと一つ息を吐いて「わかりました」とリカさんが腰かける。

小さな体で高くにある背もたれの上に座れば、足が浮いてしまっているだろう。

リカさんの足は背もたれの裏にあるので見えないが、片手をつけて体をひねってこちらを向いている表情は苦しさを感じない。

「ネヴィ様、メイ様、シノカさん。どうぞ、お熱いのでお気を付けください」

ラルスさんもリカさん同様に従者みたいな態度になっている。

しかし、その行動に違和感を覚えさせないほど完璧な所作。それで出してくれた紅茶はとてもいい香りを漂わせている。

「今回の会議で決まったことの一つに、自分の区域と他の担当区域を跨ぐ事件や事案があったとき、その件に関係する区域の担当者達が『合同捜査』をすることが決まったんや」
砂糖もミルクも入れていないのに、くるくるとティースプーンで紅茶を混ぜながらネ

ヴィさんはゆっくりと話し出した。

「東と西で関連性のあると思われる不審火が起きとる」

今日の会議では北と西が対応した事件の話と出回っていた写真のこと以外に、それぞれの区域の情報交換を行った。

情報交換を行っていると、東で起きている不審火と西で起きている不審火が繋がっている可能性が出てきた。

東の区域で不審火が起きるのは人が多い場所。

西の区域で不審火が起きるのは農村地帯で人の少ない場所。

正反対に思えるが、東で不審火が起きれば七日後に必ず西でもあった。不審火は東で八回、西で七回、合わせて十五回も起きている。それも三か月という短い期間で。

「まあ、それで今回は東と西で合同捜査することになったってことやな」

まだ温かいマグカップを両手で包んで持つ。ネヴィさんが分かりやすくまとめて話してくれたから、マグの中の紅茶は半分以上残っている。

「東の区域の不審火は、気になることがあるんですけどよね」

甘めの紅茶を口で転がして、珍しく険しい顔をしたメイさんに視線を移す。

「東の区域は人が多い場所で火事が起きています。ただ人がいる場所ではなく、そこは貧しい方が多くいる場所です」

不穏になってきた話に、ぬるくなった紅茶を飲み込む。口腔内に広がって残った甘みが息を吸うたびに強く感じる。

「怪我をした人や住居が焼けてしまった人はいますが、亡くなった方がまだ一人もいないのは奇跡としか言えませんよ」

焼け跡の写真と騎士団たちの調査書を並べながら、メイさんは辛そうに眉を寄せた。

重くなった空気に耐えられず、気を逸らしたくて写真を手に取った。焼け跡を映したそれを、じっくりと観察してみる。

自然と素朴ながらもまとまったデザイン建物と並ぶ西とは違って、暗く退廃的な雰囲気のある建物が真っ黒に染まっていた。

炭で黒く染まった外壁が、火事の大きさを物語っている。

大陸は一つの国としてまとまっている。だが、それは東西南北の四つで大きく分けられており、それぞれの区域が特色を持っている。

各区域の文化や得手不得手などは、昔その区域が国としてあったときの名残が大きい。

西は自然が多く土地が一番広い、しかし人口は一番少ない。酪農が盛んで、一番の特徴は歴史を正しく後世に残ることを使命と考えていた。今の図書館制度を作った国。

南は争いごとが苦手で、人口は今も語り継がれる音楽や工芸品が多く作られていた。優雅で芸術的な国。

北は好戦的であり、今も内戦が良く起きている。工業に力を入れていて一番技術が発展していた。工業と力の国。

そして、最後に東。

東は特に個性的な独自の文化や言語をもっていて、その特色が今も強くある。国土は二番目に狭いが、人口が一番多い。裕福な国ではなかったため貧しい人が多くいた。

その特徴は現在まで残っていて貧民街と呼ばれる場所が至る所にあるのが、東の区域だ。

今回の火事は、その貧民街で起きている。

大きな怪我をしたり住居が燃えてしまえば、困窮した生活が更に苦しくなるのは考えなくともわかる。

「西の区域であつた不審火は人の多くない農地でした。でもそこは東からの移民が多いところだつたんです」

「こりゃあ、どう考えても関係あるやろーな」

「まだ確定はできませんが、恐らくは」

「チッ、ムカつく話やな」

ネヴィさんとメイさんの話を聞いて、イライラしたオーラを隠そうともせず舌を鳴らしたのはドグさん。

ドグさんは東の出身だ。この事件に激しい嫌悪感を抱いてしまうのも仕方ないだろう。

「そこで今回は合同捜査と同時にもう一つ新しいことをします。ドグさんこっちに」

「ラルスも、ちよつと前きいや」

呼ばれて前に出てきた二人は、向きあつたまま立っている。

なぜ呼ばれたのか不思議そうなラルスさんと、会議で内容を把握していたのか落ち着いた様子のドグさん。

「ラルスくん、ドグさん。貴方達は担当区域を交代してください」

「え」

「ラルスはメイさんのところで、ドグは俺んところで記録者をやってもらいたいんや」

とても驚いたのか、ラルスさんは声を漏らしてネヴィさんの方に振り返った。

ネヴィさんは「クカカカツ」とラルスさんの顔を見て、楽しそうに笑っている。

「ネヴィ様、なぜこのようなことになっているかお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「うん？ そんなの言うまでもないやろ。お前は西の農村地にいったことがあるよな？不審火の現場とお前が過ごしたところのある家は近いやろ？ お前がいくのが最適や」

「それは分かりますが、西の記録者を長くやってるドグでも何も問題ないのでは？」

「問題は無いやろな。でもお前の方が聞ける情報が多いかもしへんし、何より初めての奴が最初から捜査するより早いやろ。時間短縮になるしな」

どんな質問をしても上手く返してくるネヴィさんによって、ラルスさんがこの提案を拒否する道がどんどん塞がれていってる。

ラルスさんは少し怒ってるような困っているような声で「もう」と一言だけ零すと、わざとらしくその場に全員に聞こえるほどの大きなため息を吐いた。

「ネヴィ様、本当はなぜですか？」

「本当はってなにも嘘は言ってるへんよ。まあ、おもしろそうやなって思っただけ言ったら嘘になってまうけどな！」

「もう、やっぱりノリもあるんじゃないですか。全く仕方のない人なんですから」

「それが俺のええところやろ？」

がっかりと肩を落として眉を垂らすと、ラルスさんは苦笑しながらネヴィさんの方に目

を向けた。

「はいはい、そうですね。俺がないからって羽目外しすぎちゃダメですよ」

「分かるとるよ」

ネヴィさんの返事に満足したのか、視線を移してラルスさんは真っ直ぐとドグさんと向き合った。

二人は数秒そうやって目を交合わせると、どちらかともなく手をあげ、音を立てて重ねた。

「ドグ、二人を頼んだよ。あとドグ自身もはしやぎすぎないようにね」

「任せえや。うちの二人は戦えないでラルスがちゃんと守ってやってな」

場所を入れ替わってドグさんがネヴィさんの隣に、ラルスさんがメイさんの隣に立つ。違和感があるが調査をする間はこの三人で動くことになる、多分すぐに慣れるだろう。

「記録者の交代とか初めて聞きました」

「ええ、普通はあり得ないんですけど今回はこのほうがいいと判断しました」

「ラルスさんが農村地に行ったことがあるからですか？」

「そうですね、それとドグさんの出身地が東であるからというのもありますよ」

メイさんは俺の頭を撫でて「慣れてしまうと忘れちゃいますよね」と笑うと脳の覚醒を

促すように撫でていた手でトントンとつつかれる。

「あっ、そっか」

「ふふっ、リカくんもネヴィさんも東の出身ですからね」

ドグさんと出会ってもう二年以上経ってるから慣れてしまっていたけど、あの独特な口調事態が東の古くから使われる言語だ。

そういえば、ネヴィさんもリカさん東の言語だった。

「ネヴィさんって東出身なのに、エトーカって珍しいですね」

「ん？　そうでもないで、東の中でも中央部に近ければ他の区域と同じそういう苗字のやつも多いからな」

姓は各地によつて特色があるが、東が一番特徴的だ。

ドグさんは陶兎とうと、リカさんは陶歌とうか。

古くから受け継がれている文字を使つての姓は東独自のもので、東の出身者かどうかは名前を聞けばわかるほど。

「東の文化は本当に興味深いですよ。昔からある東独自の姓は一文字に意味が多く含まれていて、文字にしても美しいから好きです」

うつとりと目を閉じて言うメイさんに大口を開けてネヴィさんは笑って、ドグさんとりカさんは少し嬉しそうに笑っている。

「そう言ってくれる奴はそんなおらへんけどな！ 大抵は身分の低い者たちの末裔だ、貧民街出身の下僕の血筋だ、と馬鹿にされることがほとんどや」

顎を上げて細く吐いた息のフューという冷たい音で、何とも言えないネヴィさんの心が伝わってくる。

「この口調も名前の表記も金があれば変えられるで、金を集めて変えとるやつも多いのが現実や。自分の生きとる場所に胸張れへんのを苦しんどる奴は仰山おる」

バンツと大きな音が鳴るほど強く机に手をつけて、立ち上がったネヴィさんは座っているリカさんと隣にいたドグさんを捕まえてがっちりと肩を組んだ。

「そんな奴らを更に苦しめとるのは許せへんからな、さつさと解決できるよう頑張ろうな！」

暗くなった空気を吹き飛ばすくらいの明るい声で、太陽の様に笑ったネヴィさんに頷いて答えた。



今まであった火事の場合を地図に書き出していく。

「ドグ、そこはこの写真やで」

「ネヴィ、ありがと。フィーロ、ここはケガ人おらんとこでよかった？」

「そこはおらんよ。こっちとこっちは二人でとるけど」

火事のあった場所に分かったいる情報を書き込み、写真と結び付けてる。

東出身の三人は見覚えがある場所が多いのか、懐かしむようにスラスラと情報を書いていく。

西の地図はメイさんとラルスさんの二人によってほとんど埋まってきている。特にラルスさんが積極的にごんごん書き込んでくれている。

「ラルスさん本当詳しいんですね」

「この辺りに親戚の家があつてね、施設が長期休暇の時はこの近くに宿泊してたんだ」

「そうだったんですね」

「酪農や農業が盛んで、自然が豊富で狩りもできるんです。腕のいい猟師がいたり、酪農や農業では人手がいるからって東から働きに来てる人も多いんだよ」

全ての火事があった場所にメモを書き終えると、ラルスさんが東から働きに来ている人がある場所にもチェックを付けていく。

「火事の原因が同一人物による放火だとして、やっぱり東の人を狙っているんですかね」

「まだわかりませんが、その可能性を大きく感じてしまいますよね」

「実際それを一番疑って調査した方がええと思うな」

身を乗り出して、こちらに顔を寄せたネヴィさんは「少なくとも俺はそうするで」と言うように深く座り直し指を口元に当てた。

人差し指の背で下唇を押しながら口を尖らせて唸り声をあげる。

「この前の火事は二日前に東で起きたで、次の火事は西で起きるはずや」

「そうですね。東の七日後に西で火事があることは変わっていませんが、火事の間隔もどんどん短くなっています」

「次、東で起きる火事がいつになるかは分からへん。四日後、西で起きる火事がかなり重要になるのは確かや」

ネヴィさんはメイさんに目を向ける。目を細め、心底楽しいという顔で口角を上げた。

「メイさん。危険やとは思いますが急を要するんや、現地に行つてきてくれへんか？」

「はい！ もちろんです！」

まんまとした銀色目を星の様に輝かせて、メイさんは大きく頷いた。

その嬉しそうな顔はやる気に満ち溢れており、心はもう農地に行つて何を見るとか、一体どんなものを記録できるのかということに魅せられているのだろう。

メイさんを止めることなく、メイさんの隣に座つたまま項垂れた。

チラリとドグさんの方に目を向ければ視線がぶつかつて『助けて』と音なく話せば、その口が『がんばれ』と動き、二人で揃つて肩を落とした。

俯いたまま横目でメイさんに目を向けると、その奥に座っているラルスさんが苦笑してるのが見えた。

「現地かあ、オレらはどうするん？」

「ボクらも貧民街に行つた方がええんやない？ ここは東の中でも安定した場所やし、狙われとるのは東の貧民やる」

「もちろん俺達も行くで？ もう貧民街にある屋敷も手配してもうたしな！」
ネヴィさんのその言葉を聞いてドグさんとリカさんは一瞬目を見開いた。

二人は顔を見合わせると優しい顔で笑う、そんな二人の頭を撫でて「久しぶりやなあ」と微笑むネヴィさんの纏う空気は温かく感じた。

「お互い記録者を交換しとるから勝手に色々違うこともあるやろうけど、取扱説明書を入れといたで。それ見て上手くやってな！」

汽車の中から三人を見下ろす。

「取扱説明書って、俺のことなんだと思ってるの？ 全く」

俺の隣の席には前腕ほどの長さの筒を抱え込んだラルスさんがいて、窓の方に身を乗り出しながらフィーロさんとネヴィさんの方を心配そうに見ている。

ドグさんが駅のホームにいて、こつちを見上げてるのが落ち着かない。

「まあ細かな連絡も取るんやし、何かあればそこで聞いてくれや」

「大丈夫、分かっていますよ。ネヴィさんとリカくん、ドグさんをよろしくお願いしますね」

「おん、任せて下さい」

「そっちこそラルスのこと頼んだで？」

「はい」

同時に頷いた俺達に「ヒヒッ」と喉を鳴らしてドグさんが噴き出した。窓の中にドグさんが腕を伸ばして、その手がラルスさんの手を取る。

「俺が留守の間、任せたよ」

「オレがおらん間、ちゃんと守ったってな」

汽笛の音が響く。繋がれた手が離れて、窓を閉める。

進んでいく汽車の中から窓越しに手を振れば、三人とも振り返してくれる。三人の姿が爪程小さくなくても、その姿が完全に見えなくなるまで、視線を外すことができなかつた。



「メイさん！ 空気がすつごくきれいな気がする！」

「シノカくん見てください！ 牛さんやヤギさんがあんなにいますよ！」

「あははっ、二人ともはしゃぎすぎ。そっちじゃなくてこっちだよ」

どこを見ても自然で溢れている。綺麗な緑がどこまでも続いているように思えた。

よく聞こえてくる鳥の声以外にも、耳を澄まさなくても多くの生き物の鳴き声が聞こえてくる。

「移動に二日かけて来ただけあるね。西の中でも端のほうってこんな自然がいっぱいなのは知らなかつた！」

「この辺りは農業と酪農で生計を立ててるからね。自然は綺麗な空気と水を作ってくれ、ここに住んでる人にとっては味方なんだよ」

ラルスさんに着いて行つて進むと、他の家より少し大きな家に着く。美しく整えられた庭園は、花や木が生き生きと育っている。

「今は誰も使つてないから気を使わなくていいよ。大したこともない家ですが、どうぞ」鍵の音がして、ラルスさんがドアを開けて待つてくれている。メイさんと一緒に家の中に入ると、平凡というにはとても良い家だ。

荷物を置いて軽く部屋を案内し終わると、ラルスさんは地図を持った。

「俺は次の火事候補地を周ってきますね」

「いえ、私達も行きます！」

子供みたいに手を挙げて元気よく答えたメイさんはワクワクと煌めく目を隠せていない。

「今日はお疲れでしょうから休んでてくださいって大丈夫ですよ？」

「火事があるのは二日後です。休んでいられません！」

「そうですね……。俺だけじゃ不安なこともあるので一緒に行きましようか」
メイさんが勢いよくに主張しているのは外を回りたいからなのは、付き合いの短いラルスさんでも分かるだろう。

半分以上我が儘だと分かかって『いいよ』と苦笑するラルスさんは多分こういう無茶に慣れてるんだなと思った。

「シノカはどうする？」

「俺は荷物と資料の整理をしておきますから、お二人で行ってきてください」

「そっか、じゃあ行ってくるね。何かあったら端末に連絡して」

「はい、いつてらっしゃい」

「いっしょきます」

独りになった部屋で力が抜けて、勢いよく椅子に座った。

「うおっと」

ぐらっと揺れた椅子に驚いて下を覗き込む、椅子の足の部分に半円の板が付いていて、絵本で見たことがあった揺り椅子という物だと気が付く。

「あっ、これやばい、眠くなっちゃうやつだ」

絵本の中の物、一度は試してみたいと思った物。目を閉じて満喫してやろうと何度か揺

れて意識が持つてかれそうになったことに慌てて立ち上がる。

「だめだめ、今回は役に立てるように頑張るって決めたんだ」

両の頬を三回、小中大と少しずつ力強く叩けば、それに合わせて靄がかかっていた脳が段階的に覚醒する。

「細かな道や情報、気になったことまで……全部、全部余すことなく記録するんだ」

机の上に広げた資料や地図、何度も見たそれを一から見直す。

全てを脳に叩き込みながら、ネヴィさんの言っていた内容を思い出して自分なりの仮説を立てていく。

もし、ネヴィさんが言うようにこれが放火だとして、東出身の貧民を狙っているのだとしたら誰が犯人なんだ？

単なる放火魔の犯行か？

違う、ただ放火だけが目的ならわざわざ東と西を行き来しない。

貧民街出身の者が昔の記憶を消したいからとか？

いや、それなら貧民街事態に大きな火災を起こして終わりそうだ。この放火犯は広範
困ではなく確実に人がいる場所を狙っている。

現貧民による訴え？

ムリだ。東と西を歩き来するのには徒歩では遠すぎるし、何らかの交通手段を使うとし
たらお金がかかる。

今、貧困に苦しんでいる人が犯行に及ぼうとしたなら、西に行くことは思いつくことは
あつても、現実にすることはできないだろう。

貧民に恨みがあるのか？

それも考えにくい、貧民を恨んでる者よりも貧民が恨んでいることの方が多だろう。

けれど、もし、貧民を恨むとしたらそれは誰だ？ 東の富裕層とかか？

あれ？ そういえば確か東は全体的に所得が低い人が多いのに、他の区域の金持ちと張
れるだけの家が一つだけあつたはず。

えっと、その家は東で一番の金持ちで『東の領主』とも呼ばれていた。

名前はたしか……。

「越灯歌だっけ？」

「いうったああ！」

「うえ!?」

急に聞こえた声に振り返れば、右足を抑えて片足でびよんびよんジャンプしているラルスさんがいた。

「えっラルスさん!? 大丈夫ですか?」

「ラルスくん! ケガしてませんか!」

「いてて、大丈夫です。ここに膝を打ち付けちゃっただけなので」

右膝をさすりながら、恥ずかしそうに少し頬を赤くして笑ったラルスさんの後ろから慌てて部屋に入ってきたのはメイさん。

時計を見れば集中していたから分からなかったけど、結構時間が経っていた。

「何か分かったことはありませんか?」

「えっとね、周って実際に見てみて二か所に絞り込めたよ」

座って机に広げてあった地図を覗き込む。二個の新しい印は、それぞれ少し離れていた。

今までの火事は全て夜に起こっているため、夜から朝までその場所を監視しないと放火犯を捕まえるのは難しい。

二つの場所を両方とも監視するなら、二手に分かれる必要がある。

「少し距離があるので見張るのなら二手に分かれなきゃいけませんね」

「ダメだよ、二手に分かれることは出来ない」

首を横に振ったラルスさんが真剣な面持ちで、すぐに却下した。

「でも距離があるから両方を見て回るのは無理じゃないですか？」

「それはそうだけど誰かが一人になるのはダメかな」

確かに放火犯が近くににいるのに俺かメイさんが一人だったら危ないというのも分かるけど、折角の機会を逃したくない。

なにか方法はないのかな？ 近道とかは……ない。じゃあ他に使えそうなものは、あつ。

「ここ！ 一番高い家がありますよね！ 丁度二か所の地点の真ん中ですし、不審な人物を見つけた方が緊急通信でこの家の屋根で待機してるラルスさんと呼ぶっていうのはどうですか？」

記録者のラルスさんが両方に駆け付けられる状況が作れるなら、少しの危険くらい仕方がない。ラルスさんのことはドグさんも褒めていた、記録者としての評価が高いラルスさんならできるはずだ。

「それも無理かな」

「え、なんでですか？」

「俺がドグじゃないからだよ」

出来ないのはドグさんじゃないからってことはこの作戦はラルスさんには向いていないということなんだろうか。

ネヴィさんの取扱説明書を読んでできるって判断したんだけど……。

「ここにいる記録者がドグならできてたよ。それはドグが優秀だからっていうのはもちろんあるんだけど、大きな理由はそこじゃないんだ。なんで分かる？」

理由が『ドグさんじゃないから』というだけじゃない、訳が分からなくなってきたので素直に首を横に振る。

「私達三人で連携を行うには日が浅すぎるってことですよね？」

俺の頭に手を置いてメイさんがラルスさんに尋ねた。その内容にハッとす。

「はい、そうです。俺からしても二人がネヴィとリカならやってみましたよ、けど『二人は戦闘は全くできないと考えるように』とドグから言われています」

「東は司書も図書館も記録者と肩を並べる程の実力者の集まりです。私達のようなタイプとは真逆、いつもと正反対の状況で初めてのことをするには危険すぎるんでしょ？」

小さく頷いて、ラルスさんは地図に触れる。次の火事の候補地に描かれた丸の片方を消

すとそこにバツを付けた。

「俺のせいでも、ましてや貴方達のせいでもない。シノカの場合は適切じゃあない、気乗りしないと思います。協力者を作るのはどうでしょうか？」

顔写真のついた紙を一枚出す。ラルスさんは紙を持っていない方の手で先ほど書いたバツを指す。

「親戚なので俺が記録者だと知っていますし、記録者の試験を合格していた者です。オリーフィア家の護衛経験もあり、なによりここに在住しています」

オリーフィア家って確か南の高貴なお家だったよな？

そんな家の護衛をしたことがある人なら強いということのも嘘ではないのだろう。それに施設で記録者の試験に合格をしていたということは、その人が記録者になっていた可能性すらあるということ。

こんなに今回の件で頼れると思う人は他にいないだろう。

「俺は、いいと思います」

「そうですね。その人に協力していただきましょう」

「分かりました。ではここをコイツに任せるとして、作戦を考えましょうか」

地図と睨めつこを再開して、どこに隠れるか、犯人がどの道で逃走するかなどをシミュレーションする。

作戦内容が決まったときには、もう外は暗くなっていた。

「はあ……」

テラスに出て、揺り椅子に身を任せる。

田舎の夜景は綺麗だと記録していたが、ここまで美しいとは知らなかった。

施設でみた写真ではただの点にしか見えなかった星も、こうして本物を自分の目で見ると星がキラキラと輝き星空というものが愛される理由をありありと伝えてくる。

下がっていた気分を何とか上げたくて、テラスに出てきたが結構いい選択をしたらしい。

最近自分の中で焦りが大きくなってきていることも、その焦りのせいで思考が疎かになっっていることも分かっている。

今日の俺の考えだつて少し考えれば却下されるものだつて分かるはずのものだった。それに自分で気づかずに、二人から指摘して気付くなんて。情けなさすぎる。

「あー、他の司書はみんなすごいのに、俺はなんでこんな……」

自分以外の司書を思い返せば、すごい人ばかり揃っている気がする。

南の司書の人は会ったことはないが、ラルスさんが司書の上位二名が会議に出席しているなら東と南だと言いついていた。

南の司書の成績を見たことはあったが、常に安定していたのを覚えている。しかも南の司書は現司書のなかで司書をしていた歴が一番長く、司書としての優秀なのは明白だ。

リリアさんは記録者から司書に移ったという異色の経歴を持つ人、司書なのに記録者のみたいに動けるから現地調査も、記録者のスイエと一緒にしていることもあるらしい。

スイエはリリアさんことを『オールラウンダー』で『全てのことで平均以上の成績を収めている』だからすごいんだと絶賛していた。

リカさんとは少ししか話せなかったが、そんな少ない時間でも彼の凄さは分かった。施設時代は記録者としての試験と司書としての勉強の両方を受けていた。

ラルスさんの話によればリカさんは頭の回転が速く何かあったときの対処が上手い。焦らず落ち着いて思考することが得意で、見たものを瞬時に記憶することができる。

じゃあ、自分には何があるのだろう。

安定的な成績はここ二年で残せている、しかしそれは高い成績での安定ではない。現地調査経験はオークション事件と今の火事のみ、それも三人での調査で個人ではない。焦ったときの思考は鈍りやすいし、記憶するのも集中力とある程度の時間がいる。

他の司書より、自分が優っている部分なんてあるのだろうか？

「こんな考えしかできないのもなあ。ほんと情けなくて、嫌になつてきちやうよお」
「シノカ」

急に声をかけられて、後ろを見るとラルスさんがいた。

マグカップを二つ手に横の椅子に腰かけたラルスさんは一つを俺に渡した。

「ありがとうございます。メイさんは？」

「ぐっすり寝てるよ、あまりに早寝で子供みたいだった」

ゆつたりと笑いながら寝間着のラルスさんは昼間よりも、かなりおっとりとした印象を受ける。

ココアを飲むその手首に巻かれている紫色の組み紐だけが妙に派手で、彼のその雰囲気
に合わず異質に思えた。どこかで見たことのあるそれが気になってしまう。

「気になる？ 似合っていないでしょう、これ」

組み紐のついた手を見せるように持ち上げたラルスさんに、急いで首を振る。

「いいよ、気を使わないで。皆にも一番似合っていないって笑われたから」

「みんなって？」

「ドグ、リカ、ネヴィの三人だよ。あいつらとお揃いなんだよね、これ」

それを聞いて、見覚えがあったのは、あの三人の髪を結っていた紐だったからだと分かる。

なんで今まで気付かなかったんだ。と思ったが、記憶を辿ると金と紫や黒と紫の組み合わせだったたり、その紫色も人によって薄紫や濃い紫と違いがあった。

うん、気づかなくても仕方なかった。ガバじゃない、そういうことにしておこう。

「俺は濃い紫に黒、ネヴィが濃い紫に金、リカが薄い紫に金、ドグが薄い紫に黒。元々は三人で全く同じものを買おうとしてみたんだけど、リカが『ラルスも』って言ってくれたんだ」

嬉しそうな顔をして組み紐を撫でたラルスさんは、俺に視線を合わせると優しく微笑んで夜空を見上げた。

「ねえ、シノカはさ。自分のこと何もできないやつだーとか思っていない？ 秀でたこと

もなくて自信なんて持てなくて、理想の自分がどんどん離れていつてる気がしてさ」

ここまで言い当てられるとは思わなかった、ココアに視線を移してその言葉に頷く。

頷いた俺に「そっか」とだけ言うのと、ラルスさんは一度大きく息を吸って深く吐いた。

「そんなシノカくんに、ある人の昔話を聞かせてあげよう。取り柄もなくて一人でうじうじしてた馬鹿なガキの成長物語り、つまんなかったら子守歌にしちゃっていいよ」

まるで赤子に絵本を読み聞かせるふうに、ラルスさんは言葉を紡いだ。



そのガキが施設に入ったのは三歳の時。

ガキの家は昔つからある高貴な御家に仕えていたから、訓練や勉強が他の家より多くルールや規則なんてかたっ苦しいものも溢れていた。

自由なんてないし、遊ばせてもらえないし、髪の毛の長さまで決められていた。

反抗する気もなかったのはまだガキが三歳という歳だったからだろう。

でも、結局は三歳ガキだ。反抗しようと思わなくても遊びたいとは思ってしまふ。

施設の授業もさぼって、施設の中を好きに探検した日があった。

それが異様に楽しく感じて、施設での授業も勉強も身が入らなくなったといった。

もともと成績が良かったわけでもなかったのに、真剣に取り組まないから。どんどん周りから引き離されていった。

ガキの平凡だった成績もどんどん悪くなって、ついに両親に呼び出される事態になる。両親はガキを吐りつけなかった、ただ何も言わずガキをある人に会わせた。

施設の外で会ったその人はガキと同年にも関わらず、かなり落ち着いた雰囲気を感じていた。

美しいその人はマエル様。

ガキの家が長年仕えてきた御家の人であり、ガキが仕えることになる御方だった。

マエル様は波打つふわりとした髪に触れながら、ガキの手を取る。

「初めましてマエルっていうの、アナタが私を守ってくれる人ってほんと？」

「はい」

「そっか、キミが守ってくれるなら安心だね」

微笑むマエル様から一切目が離せなかった、ガキは初めて自身の主人と出会いそれに幸福を感じていた。

「ねえ、大きくなったら私と結婚してくれる？」

「もちろんです。もっと強くなってマエル様にふさわしくなってきました」

唐突な結婚という話も全く驚かなかった。

なぜか出会って数分も経っていなかったのに、マエル様と永遠に共にいたいとガキも感じていたからだ。

そして、マエル様も同じ気持ちだとなぜか確信できていた。

両親は凄い慌ててたけど、そんなのどうでもよくって。マエル様との約束でガキの心の中が大きく変わった。

次の日からガキは施設の課題に以前より真剣に取り組むようになった。

記録者としての訓練は誰よりも真剣に取り組み、平凡な成績しか残せていなかった勉強も成績を落とさないように努力した。

訓練では銃が苦手だったが人並み以上に、得意だった近距離訓練ではクラスの誰にも負けないほどに強くなった。

そして十一歳に成長したガキ、ラルス・ギルニツジは、東の記録者に選ばれた。

「銃なんかは記録者やって七年経つ今でも、ドグの半分以下の腕しかないよ。でも近接戦ならドグにだって簡単に負けやしないチカラは持っているって自信がある」

「本当にそんなに成績悪かった時があるんですか？」

「ホント。だから記録者になったときにやっと認められたんだ」

「ラルスさんも苦手なことがあるんですね」

勝手に完璧な人だと思っていたけど、この人も人間なんだ、と思い出した。

「俺だけじゃないよ？ 皆自分の弱点を知ってはそれを乗り越えたり、自身の強みをより確固たるものにして自信と力をつけていった」

ネヴィは弱点っていう程じゃないけど気分屋なところがあって大変だし、リカは体力がないから体力増加と疲れにくい体の動かし方を研究してはずっと続けている。

あのドグだって暗いところが苦手だったけど、施設時代に頑張って克服したんだ。

ラルスさんが人差し指を口元で立てて「俺が教えたって言わないでね？」と悪戯っ子みたいに笑う。

その話は、今まで考えても見てなかった内容だった。

俺だけじゃなくて、みんな苦手なことや弱いところがあつたんだ。

人間だからそれが当たり前のはずなのに、すごい人たちだから完璧超人のように思っ
てしまっていた。

「俺も頑張れば皆さんみたくなれますかね？」

「んー、そうだなあ。みんなと必ずしも一緒じゃなくてもいいと思うよ」

「一緒じゃなくていい？」

「うん、例えばだけだね。リカは体力面に不安があるけど俺は体力には自信がある、でも俺が苦手な法学とかはリカがすごく詳しいんだよ」

リカさんのことを楽しそうに褒めて、ラルスさんは自慢げに肩をすくめた。

「補いあってるんですね」

「そうだね。だからシノカもあの二人の力になりたいのなら、二人が得意としてないことを強みにしたらいいんじゃないかな？ それがシノカが好きで得意なものだと尚いいね」

二人の得意じゃないこと……。

ドグさんの苦手な勉強はメイさんが得意で、メイさんが苦手な戦いはドグさんが得意。まさに頭脳派と肉体派で、あの二人はお互いに不足している部分を補っている。
俺が入れるところなんてあるのかな。

「シノカはまだ成長途中なんだから、ゆっくり探せばいいんだよ」

「はい」

考え込みそうになっていた俺の肩を軽く叩く。そのまま思考を止めさせるように髪を流しながら頭を撫でると、ラルスさんはマグカップに残ったココアを一気に飲み干した。

「よしっ！ そろそろお話も終わりにして寝ようか、明日は大切な日だからね」

「はい」

勢いよく立ち上がったラルスさんに続いて、俺もココアを飲んで立ち上がる。

俺の手からマグカップが攫われてラルスさんが「さきに寝な」とテラスから出ていこうとする。

「あっあの、ラルスさん」

「んー？ なに？」

「あ、ありがとうございます」

「ふふっ、いいんだよ」

背中を声をかければ、振り返ったラルスさんはくふくふと肩を揺らして笑い、片手を上げて中に戻って行った。

「寝よ」

ふと見上げれば、真つ暗な夜空で星が一層綺麗に輝いてる。重くモヤがかかっていた心が少しスッキリとした。



目の前にあるのは牧場を経営している家が、東から来ている労働者のために建てたという宿舎。

古い木造の建物だが見た目は綺麗に保たれており、労働者たちの環境が良く保たれているのが分かった。

「こっちに来ますかね？」

メイさんとラルスさんと一緒に茂みに身を隠しながら、現れるか分からない放火犯を待ち伏せる。

「どうだろう。分からないけど、こっちの方が確率は高いかな」

もう一つの候補地にはラルスさんが手配した四人が固めているし、何かあったら通信がくるから大丈夫なはず。

「犯人が東の貧しい民を狙ってるなら、確実に獲物がいるところを狙うでしょうし……」

「なにより、嫌いな相手が良い待遇をされていたらそこを狙いたくなる可能性の方が高い」
言葉を濁したメイさんになんてハッキリと言いつつラルスさんは、普段の柔らかな表情とは違い眉間に皺を寄せて「そんなクソじゃないといいけど」声色を暗くする。

奥にあった月が真上に移動してきた、辺りが少し明るく照らされてる。

茂みの中でジツと動かないまま、漏れそうになった欠伸と一緒に眠気をかみ砕く。

「身を屈めてっ」

小声で叫ぶ時のように言葉を強くしたラルスさんの声に合わせて、しゃがみ込んで宿舎の方を覗く。

そこにいたのは全身を覆うくらいの長い上着を身に着け、深く被った帽子のせいで顔が見えない如何にも不審な人。

キョロキョロとせわしなく辺りを確認しているところまで含めて、かなり怪しい。

「あれかな？」

「すっごく怪しいですね」

細かくコクコクと頷きながらメイさんは身が乗り出しそうなほど、その人物を凝視している。

「二人とも、無茶はしないでね」

手袋をつけて取っ手のついた二本の棒みたいな不思議なものを取り出した。

「これ？ トンファーっていつて東に古くから伝わる武器だよ」

取っ手をもって長い棒の部分が前腕に沿うようにすると、その武器を俺に見えるように向けてくれた。

「へえ、武器なんですか。鈍器的な？」

「棍棒に近い打撃武器だね。今回は捕獲が目的だから、殺さない武器を選んだ」

殺しちゃダメだから。そう言つて、真っ直ぐ獲物を見るように怪しい人物にラルスさんが視線を戻す。

怪しい人物がゴソゴソと懐を探る。

懐から円柱状のなにかを出すと、そこから液体らしきものを宿舎にかけた。

そして、慌てた様子でなにかソイツが動いていると思つたら、すぐにソイツの手元が急に明るくなった。

それを見て、隣にいたラルスさんが駆けだした。

「うあっ！」

急に走ってきたラルスさんに驚いて声を上げた男は、ライターをラルスさんの方に投げ

つけて逃げていく。

「任せます！」

ラルスさんの後に続いて急いで落ちたライターを拾う。ライターの近くに行くのと燃料の匂いがした。

液体はやつぱり何かの燃料だった、鼻に残る匂いのそれに引火していたかとも思うと寒気が走る。

男が逃げた方に目を向けると、ラルスさんが男に向かって武器を投げつけていた。足に投げつけられた武器が絡まり、男がその場に思いつきり転倒した。

「はいはい、暴れないでっ」

這って逃げる男を捕まえて押さえ込み、ラルスさんは男の手を後ろ手に縛りあげた。

頭を振って抵抗したせいで男の被っていた帽子が落ちる。

怯え切った表情で、カチカチと歯を細かく噛み鳴らして口を緩く開けては閉める男の姿は予想していた犯人像とは程遠かった。

「騎士団に引き渡す前に詳しく聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

満面の笑みで男の顔を覗き込んだラルスさんが、男の顔をトンファーで殴った。殴られて地面に転がった男は動かなくなり、目は固く閉じられている。

死んじやったのかと駆け寄れば、男の肩が小さく上下しているのが分かる。安心から一息が零れた。

「よいしょっと、二人ともケガはない？」

気絶した男を担ぎ上げて、ラルスさんは俺とメイさんの身体に目を向けては、俺達の周りをうろろしながら確認する。

「大丈夫ですよ」

「火事も止められましたし、良かったですね」

「本当に。あつ、もう一方に待機してたやつらに連絡しなきゃ」

通信機を手にとったラルスさんは、もう一つの候補地で待機してる人たちに撤退していると伝える。

放火犯の男は捕まえた、安定して俺達三人は家に戻った。

家に戻って、男が起きた後はどうしようか、東の三人に連絡しなきゃなんて話していたところ、けたたましく緊急通信が鳴り響く。

「どうした？ はあ!？」

通信機に耳を傾けていたラルスさんが、聞いたこともないほど大きな声を上げてテラス

に飛び出した。

メイさんと顔を見合わせて急いで後を追ってテラスに出ると、家遠くが異常に明るくなっている。

オレンジ色の光が真つ暗な地上を染め、黒い煙が空に雲を増やす。

火事だ。

その方向は俺達が犯人を捕まえた場所。放火の可能性があると張り込んでいた宿舍のほうだった。

目の前でゴウゴウと燃える宿舍。外に出ている人が多いのはラルスさんが火がつけられそうになっていたと報告した後だからだろう。

一階はもう火の海にまみれ、二階にも火は回りだしていると予想できる。三階の小窓から顔を覗かせている少女が一人見えた。

「たすけて！」

「レイラ！」

少女の必死な叫び声が聞こえる。

東からの労働者の子供だというその子は小窓から手だけを伸ばして助けを待っている。

「二人はここで待つてて！」

ラルスさんが水を被つて俺達の前に出て、子供の方を見てパニックを起こしている女性を支えた。周囲の住民は手分けをしてバケツに汲んだ水を宿舎にかけている。

消化ホースはまだここまで持つてこれていないため、火が上手く消せていない。

「水をかける手伝いくらいなら私達もできます」

「ケガなんてしませんから！」

バケツを持つてそう言えば、ラルスさんは「気を付けて」小さく笑つて宿舎の近くの木に登りだした。

不安定な枝の上で助走をつけて、木から二階の窓に飛び込む。

ガラスの割れる音とともに宿舎の中に入り込んだラルスさんを見届けて、バケツの水を宿舎にかける。

火は弱くなる素振りも見せず、むしろ強くなっているふうにすら見える。

「メイさん！」

「シノカくん、ラルスくんが置いて行った袋を持つてきてください」

どうしようメイさんと呼ばば、メイさんは語気を強めながらも落ち着いた様子でラルスさんが置いて行った袋を指さした。

「宿舎の責任者の方ですか？ 火が広がらないためにもご協力いただきたいのですが」
メイさんが牧場の主人に声をかけた。

牧場の主人は火事から逃げて負傷した東の労働者の怪我を手当てしている。

優しく声をかけながら、一人ひとりの容態を確認しているところから見ても、彼がとても東の労働者を自身の牧場の従業員として大切にしていると分かる。

ラルスさんの持っていた袋を持っていくと、メイさんはその中から筒を取り出す。

「なにしてるんですか？」

袋を取りに行っている間、メイさんと主人の会話が聞き取れなかった。

筒から四つの棒を取り出して、おぼつかない動きだがわたわたと組み立てていく。

「許可を頂きました！ ラルスくんが来たらすぐに実行できるように準備するんです」

二つずつ紐で繋がった棒は組み立てられると、槍に姿を変えた。

「どいてー！」

上からの声に急いで下がり上を見ると、三階の小窓からラルスさんが顔を覗かせている。

「下がって！」

ラルスさんは人が家の前から距離を取ったのを確認すると、小窓から離れた。

その瞬間、大きな音がして小窓のあつた場所の壁が壊される。

壁に穴を空けるとそこからラルスさんの姿が確認できた。その腕にはラルスさんの上着にくるまれた少女がいて、ラルスさんは少女の顔を隠すように上着をかけ直す。

「大丈夫、すこし目を閉じてて、すぐにママと会えるよ」

ラルスさんは少女を抱え直すと下を覗く。周囲を確認するよう見回すと、すぐに三階という高さなのを物ともせず勢いよく飛んだ。

飛んだ先にあつた木の枝を片手で掴む。そこにぶら下がる振り子の要領で体を揺らして俺達の前にトンつと軽い音をたてて降りてきた。

「レイラー！」

「ママ！」

ラルスさんの腕から降ろされた少女は、走って女性の胸に飛び込んだ。

「ラルスさん！ 怪我は？」

「大丈夫、それより俺の袋って」

灰だらけのままラルスさんは休むことなく何かをしようとしている。

「どうぞ！ 許可も取つてありますから」

「ありがとうございます！ メイさん！」

急いでいる様子のラルスさんにメイさんが槍を手渡すと、ラルスさんは宿舎の方に向かっていきその槍を大きく振り上げ宿舎を壊し始めた。

その行動が本で見たことのある火消だと気付いて、ラルスさんに驚いて止まっている人たちに俺は声をかけた。

ラルスさんが家を壊して、俺達はやつときたホースとバケツを使って水をかける。

それから数時間後。

軽症者は出たものの死者は出ず、宿舎以外に燃え広がることもなく鎮火は成功した。

家に帰るとメイさんと一緒になって泥の様にソファに座り込む。

目を閉じたまま動くのも億劫でぼーっとしていると、物音がして目を開ける。

ラルスさんが苦笑して俺の顔を見て「ごめん、起こしちゃったね」と言った。どうやら知らぬ間に眠ってしまったみたいだ。

「ラルスさん、火事はなんで起きたんでしょう」

「予測の域をでないけど、放火犯が個人だと決めつけてたのが駄目だったかな」

お風呂あがり濡れた髪をガシガシとタオルで乾かしながら、ラルスさんは困った顔で

少し悔しそうにしている。

「複数犯ってことですか？」

「うーん、あの捕まえた人さ。放火するときにごい戸惑ってたんだよね、やりたいと思っ
て行動している人間らしくなかった」

違和感に気づいていたのに、火事を防げなかったことに責任を感じているのだろう。

ラルスさんは深いため息を吐くと、開けられた手紙を投げて寄こす。

「これ読んで、東組からの手紙。俺は放火犯（仮）さんに話、聞いてくるから」

ラルスさんが隣の部屋に姿を消したのを見届けて、手紙に目を向ける。

開封済みの封筒には、ネヴィ達から。とだけ書かれている。

差出人の名前がすごく雑に書かれているのに驚いていると、隣で寝落ちていたメイさん
も目を覚ました。

「そ、れ……」

「おはよ、メイさん。東からの連絡だった」

まだ少しぼやぼやしているのか目を擦りながら、体を起こしたメイさんに見えるように
便箋を広げた。

この四日で分かったことがいくつかあったで、書いてくくな。放火に関わっていると思われるのはある南出身の男や。

ソイツは由緒ある家の出の富裕層。今は西の中心部に移住しとるけど、東に別荘を持っていてお前らが行った村の近くにも別荘を持っている。

こっちの火事が起きた場所の近くにソイツの家臣が目撃されてた。

お前らの方の火事で実行犯がソイツんところの家臣だったら決まりやな。

富裕層の名はトルネマード・コイル。

そこそ有名な金持ちやから、そっちの三人だけで勝手に乗り込んだりするなよ？

何か分かったら連絡くれや。ネヴィ。

トルネマードって、確か一番駅に近い道沿いにある少し大きな家だったよな。

「コイルって人が主犯なのかな？」

「分かりませんが、南の富裕層となると少し疑ってしまうのも仕方ありませんね」

確かに南は元貴族の富裕層たちが多くいるところで、ノーテ歴書国となった今でも東の貧民に対して良い感情を持ってない人が多い。

もし捕まえた放火犯が本当にコイルという人の家臣だったら、ネヴィさんのいう通りコイルという人が主犯の可能性が高い。

「ネヴィさんすごいね。予測が適格で」

「そこが彼の凄いところですよ。頭回転が速く全ての人を平等な目で見れるのがネヴィさん素晴らしさです」

「すごい見た目に合ってるなあ、喋ってるときはこんな綺麗な文字書くイメージなかったけど。あの容姿は知的な感じするもんね」

ネヴィさんを思い浮かべれば、あの整った容姿からして何をしてても様になりそうだなと思える。

「ははっ、そうだね。ネヴィって顔はいいけど、一言喋るとガサツで極度な面倒くさがりっという部分が見えちゃうんだよね。そこがアイツの大きな欠点」

茶化すみたい在意地悪くニヤけた顔で部屋に戻ってきたラルスさんに驚く。

「すみません。陰口のつもりはなくてっ」

「あははっ大丈夫、大丈夫。陰口にもならないただの事実怒ったりしないよ！ それに

『顔はいいのに性格に難あり』っていうのは内輪ネタでよく使ってるしね」

ラルスさんは安心させるように俺の背を撫で「ウチでは罵倒の応酬なんてよくあるよ」
楽しそうに笑いながら、懐から出した鍵を一つメイさんに渡す。

「捕まえた男はトルネマード家の家臣で間違いありませんでした」

上着を脱いで掛けてあった服を手取る、乱れていた髪を直して、ラルスさんはきつちりとした見たことない服に着替えた。

「その鍵が別荘の鍵だと言ってたんで、俺はそこに向かおうと思います。この程度なら乗り込むというネヴィの指示も破つてないと判断したので、お二人はどうしますか？」

鍵をメイさんに渡しているのに問いかけるラルスさんは、俺達の答えが分かっているけどわざと聞いているんだろう。

「行くに決まってるじゃないですか！ ほら、早く行こ！」

メイさんと一緒に立ち上がって、ラルスさんの手を引っ張った。

メイさんが鍵を挿して捻ればカチツと軽い音がして、鍵はちゃんと開いた。

これで渡された鍵が偽物ではなかったこと、捕まえた男が本当にこの家臣だったことが証明された。

「二人とも、俺の後ろから出ないで」

ドアノブを回して押せば、ドアは開いた。

ギィ……と重い扉が開ききって中を覗けば、人の気配は全くない。

「すみません、どなたかいらつしやいますか！」

ラルスさんが中に声をかけるが返事はなく、家の中は物音一つしない。

太もものホルスターから取り出した銃を俺に手渡すと、ラルスさんは前に見たものよりも装飾の多く重厚感あるトンファーを持ちだして家の中に歩を進める。

一階から三階まで、全ての部屋を調べたが人の姿は無かった。しかし、最近まで人がいた形跡はいくつか残っている。

「誰もいないね」

「でも、昨日までは誰かいたみたいですね。少なくとも三人はいたはずですよ」

「三人？」

「何でそう判断出来たんですか？」

驚いた様子で首を傾げる二人に、声を潜めながら一つ一つ気付いたことを上げていく。

キッチンに置かれていたカップの向きが三つだけ違ったこと。シンクの中の水とかけられたタオルが乾ききっていなかったこと。

一番高価なベッドが置かれた寝室に良い香りが残っていたこと。そして玄関前に残っていた足跡が三足分だったことを挙げた。

「そんなところまで見てたんですか？」

「はい、気になっちゃって」

気になることがあると、そこにばかり気が向いてしまうのは自分の悪い癖だ。

隠れている人物がどこからか襲ってくるかもしれないという中で、そんなことばかりに目を向けてしまっていたことが申し訳なく感じる。

けど癖みたいなもので治したいとは思っていても中々治らないのだ。

「シノカ」

名前を呼ばれて顔を上げれば、クシヤツと頭を撫でられる。

ラルスさんはニカリと口角を上げて少しだけ微笑み「じゃあ三人いたと考えて動きましよう」メイさんに向けてそう言い、近くの柵を開け始めた。

「何も見当たりませんね」

「ええ、せめてあの燃料と同じものを見つけておきたいんですが」

安全が確認された部屋を三人で手分けして調べていくが、なにも見つからない。

あるのは一般的に家にあってもなんの違和感のない物ばかり。

そういえばキッチンにいるメイさんがなかなか戻ってこない。

もしかして何かあったのか？ 嫌な妄想をしてしまったとき、キッチンの方からガラスのような物が割れた音が響いた。

「メイさん！」

「待てっシノカ！」

急いでキッチンに向かう、ラルスさんが後ろから静止をかけるが待つてなんかいられない。

「大丈夫、メイさん！」

キッチンに駆け込むとメイさんが立っていて、怪我や他に人は見当たらなかった。

「シノカくんごめんさい、私は平気だよ」

困った顔で頬をかくメイさんの足元には割れた食器があつて、メイさんの隣には扉が開けられた食器用の戸棚があつた。

「もー！ びっくりしたあ。メイさん、怪我はしてない？」

「大丈夫です。でもお皿を割ってしまいました」

悲しそうに割れた食器を触ろうとしたメイさんの手をラルスさんが防ぐ。

「俺が拾いますよ、手袋もしてますし」

おちゃらけて手袋に包まれた手を見させているが、その手袋は指先まで覆っているのは中

指と薬指だけで、肝心の皿の破片を掴まんでいる親指と人差し指は出てしまっている。

破片を拾いながらラルスさんはメイさんに目を向けて、その手足に傷がないか確認するように見つつ「どうしたんですか？」と優しく問いかけた。

「この棚がおかしいと思って、調べてたんです」

「メイさん、おかしいってなにが？」

俺がそう聞けばメイさんは棚の方に近寄って、棚の中、食器の並べられているその先を指した。

「この棚はクルシュの木で作られています。他国からの輸入品であり、なかなか手に入りにくいんですよ。なにより特徴的なのは赤みがかった綺麗な茶色とはつきりと見える木目で、強度もあり加工できる会社は少なくって」

「メイさん！ それより、なんでそれが気になったの？ 珍しいから？」

どんだん早口になって語りだしたメイさんの手を取り目を合わせ、長くなりそうな話を止める。ハツとした表情になったメイさんが棚の中にある板の部分を指さした。

「おかしいんです、こっだけ他の木が使われています。見た目は似せてますが、この板は塗装されているものでクルシュじゃありません」

よくよく見れば確かにこの板だけテカリがあって、塗装が施されているのが分かった。

「すみません」

破片をまとめ終えたラルスさんが、その板の上の食器を全て退ける。

板を軽く力を入れて持ち上げようとすると、それは思っていたよりも簡単に外れた。

「外れました！」

外れた板を振ると中からカタカタ音がした。これは中に何かある。

板をひっくり返してみれば、薄っすら線があつてそこを押し込んでみると板が動いて中

から鍵が落ちてきた。

「鍵？ どの？」

「その形状ならここじゃないですか？ この鍵穴となら合いそうですよ」

鍵を覗き込んでメイさんが指したのは柵の中に隠されるようにつけられた鍵穴。

「ホントだ！ 鍵穴ある気付かなかった」

見にくい位置にあつたそれに鍵を差し込んでみる。カチャツと音をたてて回せた鍵に驚いていると、鈍い音をたてながら机の下の床が浮いた。

「メイさんこれはお手柄ですよ！」

ラルスさんがそう言うと、机を退かして浮いた床を持ち上げた。

「よいっしょつと、ふう」

床の下に出てきたのは梯子で、覗き込んでも先が見えないくらいには続いている。

「俺が降りて見てきますから、声をかけたら降りてきてください」

梯子に足をかけたラルスさんに頷けば、ラルスさんは滑るように梯子を降りて行った。数分も経たず下が明るくなり、こちらを見上げたラルスさんが「おいで」と手招きする。

「メイさんから降りますね」

そう伝えれば、武器を置いて梯子の下でラルスさんが手を広げた。落ちてもラルスさんなら受け止められるだろう。

メイさんは「よしっ」両手でグーを作ってやる気満々だが、絶対に無事に降りきれるとは思わない。

両足を梯子にかけて、手が梯子を握るまでその体を支える。細い指が俺の肩から離れ、両手が梯子を掴んだ。

俺が手を離して、一段下がろうとしたメイさんが「わっ」と声を零して落ちていく。思っていたよりもずっと早い落下に驚いて、急いで身を乗り出して覗き込む。

「だいじょーぶだよ」

しっかりと受け止められたメイさんが驚いた顔で固まっただけで、ラルスさんがゆるーくこちらに向かって笑っていた。

俺が下に降りても、横抱きのまま目を大きく開いて固まった状態のメイさんにラルスさんが困っていて、急いでメイさんの目の前でパチンツと手を叩く。

驚いたときにエラーが起ることはドグさんに教わったので対処も分かっている。一度肩をビクツツと動かして顔を上げたメイさんは「びっくりしました！」と俺に言ってくる。

「メイさん、立てそう？」

「あ、はい！ラルスくんありがとう」

「いえいえ」

メイさんの足が床に着いたのを見届けて、地下の中をぐるっと見回す。

真ん中にぶら下がったランプが揺らめきながら部屋の中を照らしている。

なのに薄暗く感じる部屋は、少し埃っぽくて『THE地下室』というイメージ通りの場所でもあった。

「うへえ、埃っぽい」

愚痴を溢しながら扉もついてない剥き出しの棚を見ていく。本や資料、よくわからない配線やなんかの部品が乱雑に置かれている。

「しっかり見回ってないから、警戒はしといてね」

武器を片手に持ちながら地下内を見回ってくれているラルスさんに周囲の確認は任せて、棚に置かれているものや机の上に散乱しているものを一つ一つ確認していく。

「メイさん見て！ これ燃料じゃない？」

棚の隅に隠すように置かれたボトルを見つけた。

振ってみた感じ、ボトルの中身は四分の一ほどしか残っておらず、使われた後だと分かる。

しかし、これだけでは証拠とは言えない。

他にもっと放火とコイルが関わっていると分かる物は無いのか。

「あっ、地図を見つけました！」

奥の方で床に置かれていた、色んな工具の入っている箱の中を調べていると遠くでメイさんが呼んでいるのが分かった。

急いで向かうと机の引き出しを開け、中からメイさんが地図を見つけ取り出している。

西だけを大きく映す地図には今まで火事があった場所にしっかりと印が付いており、これなら証拠とできるだろう。

「二人とも！ こっちにも地図があったよ」

ランプの光も届かないほどの奥から聞こえる声に、天井から下げられているランプを手に向かう。

ラルスさんがいた場所はクローゼットの目の前。

クローゼットの両側の扉は開けっ広げられて、中には服ではなく缶の箱が詰まっていたり、ノータ歴書国全体を映す地図が貼られていた。

このクローゼットがクローゼットとして使われていないのは一目瞭然だ。

貼られた地図には、東と西の色んな場所に丸が書かれており、いくつかの丸には上から被せるようにバツがついていた。バツが付いているのは今まで火事があった場所だ。

じゃあ丸だけの場所は……。

「次の狙いか」

「そうですね」

ラルスさんが地図を剥がして懐にしまう。さっきの地図と燃料。

この三つでコイルが関わっているとは言えないがトルネマード家がこの放火と関わっていることは確かになっただろう。

「ネヴィさん達と合流しましょう。次の場所を絞りこまなきゃいけません」

「はっ」

俺達は急いで村を後にした。



二日後、東の図書館の書室についた。

夜中になって到着したというのにそこは騒がしかった。

「三人ともお疲れさん！ 風呂空いとるで！」

「動くなって言うとるやる、ネヴィさん！」

「フイーロ！ ネヴィ！ 見てえや、これ作つてきてん！」

濡れた頭のままで俺達の方に駆けようとするネヴィさんと、そんな彼を押さえつけてネヴィさんの髪をタオルでワシヤワシヤとかき回すリカさん。

嬉しそうにパタパタと走ってきたドグさんは二人に綺麗に切ったりんごを見せている。

ネヴィさんだけでなくリカさんもドグさんも風呂から上がったばかりの様でその髪からはポタポタと雫が落ちてている。

まったりとした空気に驚いていると、俺らの方を見たドグさんが「おかえり！」とタオルを頭に被つたまま笑う。

今まで早く事件を解決しなきゃと張りつめていた心が少し緩んで、その場に倒れ込むようにへたり込んだ。

「シノカ!？」

「もおおとおお、なんでそんなゆるっゆるなのお」

緊張が一気に解けて、なんか笑えて来てしまった。

俺が笑っているのに気づくと、心配そうに駆け寄ってきたドグさんもニヤリと悪い笑みを浮かべて、俺のデコを人差し指で弾いた。

「驚かすなや、あほ」

「えへへ、ごめんなさい」

ドグさんの手を借りて立ち上がった。

「りんご食べるか？」

一切れ口に含んで、りんごの置かれた皿をこちらに向けるドグさんに首を振る。

「ここに来る前にご飯食べたんでいらぬです。っていうかドグさんは髪、乾かさないの?？」

さっきから結われていないことで普段より少し長く感じる髪からポタポタと落ちていく水滴が気になって仕方ない。

「ん? あー、ええの!」

ニシシッ、歯を見せて嬉しそうに笑ったドグさんは勢いよくソファに座ってネヴィさん

に寄りかかる。

「順番待ちやから！」

ドグさんがそう言つて指さした先は、ネヴィさんの髪をタオルで乾かし続けながら困つた顔で優しく笑うリカさんだった。

その後、ラルスさんとメイさんと一緒に押し込まれた風呂場は温泉みたいに広がつた。要塞のような作りの此処は大人数に対応できる造りになっているとラルスさんから聞いて、なるほどと納得した。

西の図書館の書室はどんななの？　メイさんに頭を洗ってもらつていながらラルスさんの質問に二人で答えた。

風呂は木で造られて二人で入るのが限界だけど、いつもいい香りがするとか。書齋にもなつてるリビングは天井がガラスで太陽光が入るとか。

三人で事件のこと以外を話ながらゆっくりと湯に浸かる時間はとっても快適で、すうつと疲れが湯に溶け出していく風を感じた。

風呂から出て三人の待つ中央の間に行くと、すっかり髪の乾いた三人が俺達の持つてき

た証拠を見ていた。

さっきとは打って変わって、しゃくしゃくとりんごを噛む音しか聞こえない。

静かになって、じっと地図や止められなかった火事の写真に目を通す三人はシユールでちよつと面白かった。

もう少し声をかけないでいようかと思つたが、リカさんがすぐに俺達に気付いた。

「おかえり、三人とも座りい」

「メイさんの髪はオレがやつたるな！」

「ふふつ、ドグさんありがとうございます」

三人に向かい合つて置かれたソファに座れば、リカさんは俺の頭にタオルをかけて、そのまま髪を乾かそうとする。

「自分でやりますよ？」

「ええやん！ やつてもらい。楽やし、フィー口めっちゃ上手いで！」

「俺より若い子とかおらんから。つい、ごめんな、ウザくなつてもうたね」

申し訳なさそうにするリカさんに「ウザいとかないんで！」と否定する。眉を下げた黄色の瞳の中に浮かんでいる青が濃くなつて見えるように見えて。

リカさんが悲しんでいると思えて、離れようとした両手を取つて自分の頭に戻す。

「メイさんもドグさんにやってもらってるし、俺はリカさんに頼んでもいいですか？」

「うん！ ええよ。くふっんひひ、痛かったりしたら言うてな」

嬉しそうに瞳の黄色鮮やかにキラキラとさせて、リカさんは鼻歌を歌うように俺の髪を乾かしてくれる。

そんなふうに騒いでいたが、その間もネヴィさんは証拠や書類から目を離さない。

手で覆われた口元が動いているのは何となく見て取れるが、それが何と言っているのかは聞き取れず、ネヴィさんは俺達が戻ってきていることも、この会話も聞こえていないみたいで一切動かないまま、じっと集中している。

「メイさんはどう思うとるん？」

俺達全員の髪が乾いて、りんごの残りが少なくなってきた頃。資料と睨めっこをしていたネヴィさんが真剣な顔をして、真っ赤な目で真っ直ぐメイさんを見る。

「次の犯行までに捕まえるべきかと」

その目に答えるように、足を組み直してネヴィさんと視線を交わらせたメイさんはハッキリと答えた。

「せやな、騎士団は？」

「駄目です。手続きに時間が掛かる可能性がありますし、何より町の騎士団ではある程度の地位のあるトルネマードの家に入ることも厳しいでしょう」

「騎士団なら国直属の必要が出てくるわな、でもそれだと余計に手続きに時間が掛かってまう」

「ええ。もし手続きが早く終わつたとしても、騎士団が大きな動きをしているなら富裕層である彼は気づくでしょうね」

「そうなつてもうたら、乗り込んだ時には南に逃げられて、南に捕まえに行けば、放火の件は全て家臣の仕業に仕立て上げて終わりやな」

「はい、逃げられるだけの愚策ですな」

メイさんにしては珍しく強い物言いに驚く。

まるで、ネヴィさんの考えを先読みしているように、何かを諦めさせる様な口調にちよつとビクビクしてしまう。

「ネヴィさん、ナメないでください」

その一言で、その場の空気が一瞬でピリついた。じっとネヴィさんの方を見て、そう言ったメイさんにビックリする。

え、喧嘩？　なんで、どうして？

急に攻撃的にもとれる発言をしたメイさんが何を考えてるか分からなくて、この状況を変えようと何か動こうした時、左右にいたドグさんとリカさんが俺の手を掴んだ。

二人の視線は険しさなんかなくて、ただいつもと変わらぬ穏やかささえ感じる顔でネヴィさんを見ていた。

動こうと入れていた力を抜いて、同じようにネヴィさんを見る。俯いていたネヴィさんの肩が揺れる。

「クククッ、ブツアハハハハハ！」

それはだんだん大きくなってついには、ネヴィさんは勢いよく背もたれに後頭部を乗せて宙を見上げた。

「はあー、ははっはー……。メイさん申し訳なかったわ」

頭を下げ、両の手のひらを合わせて額に付けたネヴィさんは「悪かった」ともう一度謝罪した。

「ナメたわけやのうて、確実性と安全を考えとったんよ」

「ふふっ、本気じゃないですよ。ただ決断しかねているなと思ひまして」

「それでケツを蹴ってくれたんか。アヒヤヒヤッ、アンタはどこまでも上手やな」

二人とも笑っているのに、なぜか雰囲気だけは落ち着いている。

あべこべなのにそんな二人は怖くはなくて、喧嘩してるのかと思つて緊張して強張つていた肺がやっとうまく動き出した。

「流石やけどこの方法はもうやらん方がええな、シノカが大分こわがつとるで」

「っはあ！ はあ、ふっ」

ずっと吐き出せてなかつた空気を一気に吐き出す。

咽そうになつていると、握られてた両手が離されて、代わりに背中を左右から擦られる。

ドグさんとリカさんがずっと手を握つていてくれたのは、俺が緊張して怖がつているのが分かつたからだつたんだ。

「シノカくんっ、ごめんなさい！」

慌てて目の前に膝ついたメイさんが心配と申し訳なさを滲ませて、俺の顔を覗き込む。

「こっ怖いメイさん、はじめてで、びっくりしちゃった」

呼吸が乱れてて上手く言葉が出ない。つつかえてしまったけど、何とか言葉にして、安心させたくて、へらりと笑って見せた。

すると、メイさんのもっと顔を歪ませて、泣くんじゃないかと思う程に目を潤ませる。

じんわりと滲んできそうだった涙が引っ込んでしまう。

反応のない俺を見て何を誤解したのか、ついには涙が零れ落ちてきてメイさんの銀の瞳が光を取り込んで、一層きらきらと輝いた。

「もー、俺がっ、泣きそうになつてたのにい。なんでメイさんが泣いちゃうのお？」

さつきまで、あんなにかっこよくて少し怖いくらいキリっとしてたメイさんの方が泣いちゃったことが面白くなって、泣きそうになつてたのに笑ってしまった。

「よかつたあ」

笑った俺を見てもっと泣き出したメイさん。笑いながら涙を拭っていると同じようにドグさんがメイさんの背を撫でた。

「うつく、ごめんなさい。嫌われたんじゃないかって思って、悲しくなっちゃいました」

ラルスさんに貰ったぬくいおしぼりで目元をドグさんに抑えてもらいながら、メイさんはやっと涙を止めた。

「メイさん泣きすぎやっつて」

ドグさんの声に「だつてえ」とメイさんは返す。ドグさんの手におしぼりがあるのは、メイさんが自分で拭うと目を傷つけそうな程の力で拭おうとするからだ。

「落ち着いたみたいでよかったわ」

「ずみまぜん、話を戻しましょ」

人数分の紅茶を淹れてくれたリカさんにお礼を言いつつ、メイさんは聞き取りにくい鼻声でネヴィさんに話を促す。

「せやな。メイさんからも半強制的にゴーサインが出たわけやし、今回の作戦を決めよか？」

ネヴィさんが取りだしたのは、今までの証拠と見たことのない、いくつかの写真。

「お前らが前解決した闇商とは違う。今回捕まえるんは金持つとるだけの一般人や」

「一般人に毛が生えた程度の犯罪者や。未だに死者がおらんのも、コイルが人を殺すだけの覚悟があらへんとも見れる」

リカさんの言葉に頷いて、ネヴィさんは悪い笑みを浮かべた。

「トルネマード家に常駐しとる警備員の情報をドグに集めてもろたけど、このくらいの相手ならドグとラルスがおれば制圧できる」

「クヒッ、そこにファイロの援護があればセイアツは百パーできるな！」

腰に手を置いてエツヘンと自信満々に胸を張るドグさんは、リカさんの手を掴んで「な！」とテンション高く同意を求める。

「俺がやるんは、あくまで援護やで？ ネヴィ様とシノカ、メイ様の護衛がいなくなってもうたらいかんからな」

「ネヴィもおるんやから、ファイロやってオレらと遊んだらええのに」

仕事モードになったリカさんから返ってきた言葉が同意でないことに、右の頬を膨らまさせてムスツとしたドグさん。

そんなドグさんを見て、仕方ないなというように笑って、リカさんはドグさんの膨らんだ頬を指で押す。

「援護に回ることの後ろから、久しぶりに敵を倒して無双してくドグが見れるんかなって楽しみにしとったんよ？ ドグのかつこええとこみたいなあ」

わざとらしく「見れへんのかなあ」と言うリカさんにドグさんは「みつみせたるよ！」とやる気満々に答える。

膨らんでいた頬はもう無くて、むしろ早く戦いたいと前髪の奥に隠れている目がギラギラと光を持っているのが分かる。

「ドグもやる気やし、決まりやな。ラルスとドグが前衛でフィーロが後衛や」

「私とシノカくんはネヴィさんと一緒にフィーロの後ろつて感じですか？」

手書きで造られた簡単な地図。

大きな四角に『コイル家』と書かれていて、雑だけど無駄一切省いたネヴィさんお手製の地図の上にいるんな色に塗装された小石を並べる。

メイさんが家の中に紫とピンクの石を置き、赤と水色と銀色と黄色の石は固めて家の前に置く。

「いや、俺ら三人はここで、フィーロはこっちやな」

ネヴィさんが黄色の石をコイル家前の建物に移した、ということは黄色がリカさんの石。

コイルの家の中に紫とピンクの石は、話しぶりから紫の石がドグさんでピンクがラルスさん。なら銀がメイさん、赤がネヴィさん、水色が俺。

瞳の色から選んでるのかな？ ドグさんの目は見たことないから分からないけど、多分他の人の石の色が瞳の色と同じにしてるんだろう。

「なるほど、武器は？」

ネヴィさんの石の配置に頷いて、メイさんがまた問いかける。

「弓矢。んで、バレてからはライフルやな」

「銃はなるべく使いたくないですね」

「音やる？ やから鳴らんやつにするで」

「最初からは？」

「矢の方が正確やからダメや。最初は入り口の護衛三人を一層する必要がある」

二人だけでどんだん会話が進んでいく。

聞いている俺にとっては何の話をしているのか読みにくくて不親切この上ないが、話している本人たちは相手の言葉の意味をハッキリと理解しているのだろう。

会話は途切れることなく流れていく。

「殺さないためですか？」

「せや。隠れながらで使いにくい武器つてなると、無理にやって誤射ったほうが面倒や」

「なら、ドグさんも銃はダメですね」

ネヴィさんが赤と水と銀の石を移動させて、家の中に動かす。

三つの石をそのままスライドさせながら、空いている左手で家の中に線を書き足してい

く。どうやら石の動きをそのままメモしているらしい。

「持ってくださいって感じやな。相手が飛んだら俺らで詰めるか？」

「私達三人にもう一人ほしいです」

「じゃあラルスやな。あつこはドグとフィーロに任せておけば大丈夫やろ」

黄色の石が紫の石の隣まで移動させられて、紫の隣になったピンクの石が他の三色と合流する。

「詰めに失敗したら？」

「ありえんと言いたいが経路は絞つとる。ドグとラルスにフィーロもおる三人に散歩させれば絶対見つけれられるやろ」

「経路は？」

「こことこちとここの三つやな」

四角で書かれた家の周りは白紙でなんの道も書いていないのに、そのどこか三か所をネヴィさんが顎で指す。

「そうですね」

描かれていなはずの場所が見えているみたいに二人は話を続ける。

メイさんも俺とここに着いたのだから、トルネマード家の周辺地理を記録する時間なん

てなかったはずで、地図が頭に入ってるわけがないのに。

いつの間に。

ドグさんはまにま笑つてて内容を理解しているのか分からないし、ラルスさんはじつと図書館の二人の話に耳を傾けてる。

落ちて着いた様子から少なくとも記録者の二人は俺より二人の話を理解しているんだろう。

じゃあ、同じ司書のリカさんなら？ 現場に潜入することの少ない司書だから話に着いていけないのかもしれない。それならリカさんも困った顔してるかも。

ちよつと期待をして、チラリと覗いたリカさんの目は二人の指した白紙の場所を捉えていて、しかも頷いてまでいる。

リカさんは、俺とは全く違つて二人の会話についていけてるみたいだった。

「うーん、そうですね」

ネヴィさんの問いにメイさんが答えようとしている。

これ以上話置いてかれないようにどこの話してるのかと思考を回せば、メイさんがネヴィさんの手からペンを引き抜いて三か所にチェックした。

分かりにくい二人の話に困っていた自分に気づいたんだろう。その優しさが今は少し痛

かった。

「ここは？」

「ムリや、汚い」

「なるほど、ならここが一番注意ですかね」

「やっぱそこか。ならここから詰めるか？」

目を細めてネヴィさんが指したのは、真ん中にあつたチェックの近く。

「ええ。そうしましょう」

「決まりやな」

ニヤリと口角を上げて、ネヴィさんが手を叩く。

それを合図に、鋭く刃物のみたいに研ぎ澄まされていた二人の思考が淡く溶けた。

「あー、頭使ったわ！ 糖分！」

「はいはい。お二人とも、どうぞ」

叫んだネヴィさんに苦笑してれば、見計らったかのように甘い香りのミルクと粒のチョコを持ってきたラルスさん。受け取ったミルクを一気に飲み切って、口にひげを作りながらネヴィさんはチョコを口に放り込む。

「あー、回復するわあ」

「ネヴィさん口ひげ出来とるよ」

タオルでネヴィさんの口を拭いて、リカさんはそのままの流れで頬を引っ張った。

「いへへっ」

「回復したんやったらはよ詳細話しいや、俺らはネヴィさんの無茶苦茶慣れとるけど、今回は合同なんやから、すり合わせもしいたほうがええって箇所も多いやろ？」

「わかったわかった」

「もうっ」

「リカ、むくれないの。これ使ってください」

メイさんにラルスさんが渡したのは今まで使ってた地図よりも精巧なもの。

二人が話している間、ずっと何かを書いているとは思っていたけどこれを作っていたんだ。大きな四角だけのネヴィさんの地図と比べれば、かなり見やすい。

「時間がなかったので綺麗には出来ませんでした、大丈夫ですか？」

「全然、充分です。ありがとうございます」

リカさんは机の上の物を退けると、ペンと石を取って精巧な地図を広げた。

「俺が作戦の確認してくんで、飛んだ内容や間違いがあれば言うてください」
やっぱり、リカさんはあの二人の話を理解してたんだ。

石を置いて動くルートにはメモをして、リカさんは図書館の二人が話していたことを、ゆつくりと分かりやすくまとめて話してくれた。



作戦を立てたあの夜から二日後の昼。

シノカ達は作戦を遂行するために、トルネマード家の前にいる。

全員が、ラルスが以前別荘に忍び込んだ時に着ていたものと同じ服に身を包んでいる。戦闘服だと説明されたそれは、東の三人とドグは自分に合わせてカスタマイズしたものを使っているらしい。

シノカはネヴィから、メイはラルスからその服を借りた。

ぴっちりとした肌に隙間なく張り付く服に初めは慣れなかったが、時間が経てば自然と馴染み、その動きやすさと軽さにシノカは驚いた。しかも防弾効果もあるというのだから流石だ。

全員の服装が違って、いつもと違うという事実がシノカの心を揺さぶる。

そわそわ落ち着かない気持ちに気づいたシノカは、気持ちを入れ替えようと作戦内容を頭の中で反芻する。

『ええか？ 初めは俺以外の全員は道を挟んでトルネマード家の前に集合や。ここから分散して門の警備を狙う』

シノカが頭の中で計画を思い出していると、ザザツと短いノイズの後にリカの声が聞こえてくる。小声で、しかも通信機を通しての声なのに、すごく聞き取りやすい。それはリカのもともとの声がすっきりと軽くて耳に馴染むからだろうか。

戦力としてリカさんを前に持つてくる案に対して、ネヴィさんが断固としてリカさんを後衛で指示と状況確認に回すと言い張っていたのはこれがあるからだっただ。後衛で指示と状況確認に回すと言いついては、これがあってはならない。

門にはドグが調べた通り、三人の警備員がいた。それを視認した記録者の二人は、すぐに散開する。

一人は中、外に立っているのが二人。中の一人をリカさんが矢で射貫いて、それに続いて記録者の二人が外の警備をそれぞれ倒す。そういう作戦だ。

『ラル、ドグ、ええ？』

『おけ』

リカの声に二人が反応したのを確認して、向かいの建物のベランダに身を潜めていたり力が大きく息を吸う。

息を吸いながら矢筒から矢を取り、手すりの隙間から獲物を狙う。

矢先が獲物を捉えたところで吸っていた息を止め、矢を放つ。

真つ直ぐと門の隙間を縫って入っていった矢が警備員の肩に刺さった。

「うぐっ」

「は」

「なっ」

倒れた警備員に声を上げようとした、外にいた二人の警備員は飛び出してきたドグとラルスによって沈められた。

警備員を沈めた二人は、門を登って超えると内側から鍵を簡単に開ける。

開けられた門の中に図書館の二人とシノカは緊張しながら進む。

敷地内に入ってしまったことにシノカは緊張するが、ネヴィが楽観的に「あの木、変な形やな」なんて声をかけてくれたので、空気感に飲まれることはなかった。

茂みに身を隠した三人を確認して、ドグとラルスは屋敷の扉に手をかける。ガチャガチャと音を鳴らすだけで開かない。鍵がかかっている。

そんなこと予想の内だったのだろう、二人は目を合わせて笑うと少し下がった。

「せーの！」

声を合わせて、記録者の二人は助走をつけて屋敷の扉を蹴破った。



「キヒヒッ、ラルスキたで！」

「分かった！」

ラルスさんは槍を組み立てず、棒が二つ紐で繋がったヌンチャクのような形状のまま警備員たちを殴り倒していた。

しかし、ドグさんの声を聴いて両脇に振り回していた方の棒を挟む。紐で繋がっていた棒をかみ合わせ一つずつ二本の棒に変えると、さらにそれを繋げて一本の長い棒に変えた。

それを数度地面に打ち付けると上下それぞれの先端に刃が現れた。

ドグさんも同時に鉄板を仕込んでいるというグローブを外して、いつもの薄手の手袋をはめ直す。

腰から抜いたのは長めのナイフと短いナイフの二つ。刃の形すら違うそれは対照的で唯一の共通点といえばニヤリと歪んだドグさんの口元と同じ三日月を思わせる刃の形状だけだろう。

二人がジッと見ていた扉が勢いよく開いた。そこから流れるように先ほどとは数えきれない数の警備員が入ってくる。今度はちゃんと武装までしていた。

『外に逃げ出そうとした奴は皆誘導しとる、二人ともどんどんやってええよ！』

「「おうー！」

両手に持ったナイフで敵の足を切っていくドグさんと、槍の距離という利を活かして相手を近寄らせず切っていくラルスさん。

リカさんが弓矢とライフルを使って逃げ道を塞ぐ。リカさんの放つ矢の軌道は明らかにおかしくて急激に曲がっては窓ガラスに突っ込んでいく。

いろんな方向から飛んでくる矢と的確に狙ってくる銃弾。どこから射撃されているか分からなければ対処などできない。

逃げることを決めた相手も、狙撃手を狙いたい者も、まるで波に流れるように記録者の二人が待っている一階に集まっていく。

何倍もいる敵がどんどん増えていくのに、二人の顔は苦痛に歪むのではなく、むしろ高揚しているように見えた。

ぞわりと背に寒気が走ったが、ふと、作戦を決めていた時のことを思い出した。

『ドグ、ちゃんと聞いとった？』

『いろいろな言われても分からんもん』

作戦内容を説明し終わったりカさんに頬を摘ままれては、ムーっとしているドグさん。飽き性なところは確かにあるけど、仕事となれば真面目なのに珍しい。

『じゃあドグはこれだけやってくれたらええよ？』

『なにを？』

不敵に笑ったりカさんは、ドグの鼻を軽く人差し指で押す。

『簡単なことや、家の中入ったらまずラルと遊んでな？ 次に俺と遊ぶだけ』

『二人とあそぶだけ』

『おん、どうや？ 楽しみになつてこん？』

『めっちゃ楽しみになつてきたわ！』

顔を見合せて笑いあふ二人とそれを見て、微笑んでいるラルスさん。

あの時、二人の会話とその会話を当たり前とするあの空間に違和感があった。

遊ぶというのは軽い冗談での表現だと思つていたが、戦うことを『遊ぶ』と評価するところが彼らにとって当たり前だとしたら？

俺が創造していたよりも記録者という存在は戦闘に特化しているのだとしたら。

大量の敵を相手にラルスさんとドグさんの頬が緩んでいるように見えるのは、錯覚なんかじゃないかもしれない。

「シノカくん」

視界が覆われて黒くなつて、名前を呼ばれていたことに気が付いた。そこで二人の戦いに見入つていたことが分かつて、視界を覆うメイさんの手に触れる。

「勘違いしてはいけませんよ」

厳しくも聞こえる言葉なのに、どこまでも優しい声は俺を包んで強張つていた目の力が抜けていく。

「たしかに少し異常です、怖く思うのも分かります。でも貴方はいつもの彼らを見ていたでしょう？ 本当の彼らを知っているでしょ？」

「はい」

「なら、恐怖というペールをかけずに事実だけ見てください。今回の任務はなんでしたか？」

今回の任務は放火犯の特定と、放火犯の捕獲で、えっと、それと……。あつ。

「誰一人殺さず全員を捕まえる。です」

「そうですね、彼らは人を殺すことに喜びを感じてはいません。自分の特技を存分に生かせる状況を喜んでしまっているんです」

「特技……」

「戦闘という特技を活かして私達を護るために頑張ってくれている人たちを、図書館を目指す者が一方的な視点から見て怖いと判断しちゃダメですよ」

「そうだった。司書という立場になって忘れてしまいそうになっていたけど、俺は図書館見習いだ。」

図書館は全てを公平な目で見て、事実だけを記録していく存在。

「うん、メイさん。俺、もう大丈夫だよ」

目を覆っている手に軽く触れれば、メイさんの手がゆっくりと離れて、見えなくなっていた戦闘がまた目に入る。

殴りかかってきた相手を躲して、その後ろにいた奴を殴り倒す。蹴って吹っ飛びそうになった男の足を掴んで他の敵にぶつける。

二人とも武器を持つてはいるが、それで相手を殺そうとは全くしていない。

ドグさんがナイフで敵の剣を弾き返して、相手が立て直す前にその腕にナイフで傷をつける。だがそれも深い傷なんかじゃなくて、健わざと避けているようだった。

「殺すのつてな？ 案外簡単なんやで。人間つてのは脆いからな」

戦っている二人をジッと見ているとネヴィさんが肩に腕を回してくる。

「やから殺さないって難しいんや、深い怪我を負わせないように、そして自分も負わないように。これはどんだけ強うなつても一番難しいことや」

いつものふざけた明るい声じゃなくて、落ち着いた低い声は、その言葉の重さをずっしりと伝えてきた。

「殺さない難しさも怪我をしないで守る大変さも、俺らは本当の意味で分かってやれへん。せやから、せめて二つともできた時は俺らの護衛をちゃんと褒めたるんや」

「ドグさんはもちろんですけど、ラルスクンもりカくんも褒められるのが嫌いな人はいま

せんからね」

「っはい！」

俺の返事を聞いて、捕まえていた俺の肩を痛いほど強く叩いて笑うネヴィさんと俺の頭を重さすら感じないくらいの手で撫でるメイさん。

正反対の二人だけど、やっぱりどっちも俺の憧れる図書館だ。

『警備員の誘導が終わって撃つの止めたら、コイルさんが移動し始めたで！』

身を隠しながら、玄関の方へじりじりと寄っていたところ、リカさんから通信が入った。その内容は俺達が待っていたもので、ネヴィさんが通信機を掴んで声を荒げた。

「分かった！ 全員動くぞ」

「了解」

俺達三人はリカさんの到着と同時に家に入り、ラルスさんを連れて進行することになっている。

リカさんは今どこかな、と彼が隠れていた建物に目を向けると、建物の出っ張ったところや凹んだ場所に上手く足を引っかけてベランダから飛び降りてくる姿が見えた。

「えっ」

「ちっこくて柔軟なアイツだからこそその技やね。町での追いかけっこならアイツ負けなしやから」

驚いている俺にネヴィさんはそういうと、服の中から拳銃を取り出した。装填の確認を
していれば、すぐにリカさんがやってきた。

「お待たせしました。入りましょ」

以前ラルスさんが持っていた装飾の多いトンファアを持って、リカさんは俺らの前を行
く。それに続いて中に入ると俺達に気づいた警備員が三人、走ってきた。

「フィーロ、右」

「いいよっ」

ネヴィさんとリカさんが同時に飛び出した。

リカさんはトンファアをくるつと半回転させ、前腕部分にあつた棒で左の敵を殴る。そ
のまま体をひねって真ん中にいた警備員の剣を回し蹴りでふっ飛ばした。そして、その足
で地面を強く蹴って距離を詰めると相手の懐に思いつきり拳を埋める。

ネヴィさんは右から来ていたの足を撃つ、ガクツと相手の足が力をなくしたのを見てソ
イツの腕を掴むと背負うように地面に叩きつけた。

俺はメイさんの手を掴んで、走る。この戦場の奥にある階段を駆け上がるために、敵が近寄ってこようとしても無視して足を止めない。

「ラル！」

「交代ね！」

警備員を伸したりカさんとラルスさんが入れ替わる。

ネヴィさんが後ろにいて、ラルスさんが俺達の隣にいる、三人で一緒に階段を駆け上がった。

階段を上っているときに覗き見た、ドグさんとリカさんは背中合わせに立ちながら口を動かしては笑っていた。

笑って話すだけの余裕があるんだろう、その様子に安心して、心の中で二人に声援を送りながら目的の部屋にたどり着いた。



両扉のドアノブの左右はラルスさんとネヴィさんが掴んでいる、俺とメイさんは壁にくっついて身を屈ませた。

「行くで」

ネヴィさんの言葉に全員が頷く。

大きく息を吸って、勢いよく二人が扉を開けた。

「なっなんだお前らは！ 早くやれ！」

コイルが大きな声を出したが、その時にはもう遅い。

四人の護衛の内、二人はネヴィさんとラルスさんに捕まっている。

護衛の腕を背の方にかけてきて、その体を盾にするようにして二人はじりじりと残りの護衛に近づいて行く。

「なにしてる！」

コイルの指示など無視して、銃を構えたまま撃つことができずにいる護衛の二人。

急にネヴィさんの前にいた一人が、銃をネヴィさんに向かって投げつけた。

ラルスさんは盾にしていた護衛を自分の前にいた護衛に向かって蹴り飛ばす。槍を使つてネヴィさんに向かって投げられた銃を、銃を投げた男に打ち返した。

「あがつ」

銃が顔面に当たって怯んだ男にネヴィさんが二度発砲。両足を打ち抜かれた男が崩れ落ちると、盾にしていた護衛の首を後ろから絞めた。

「うぐうっえ」

重なつて倒れていた奴らが起き上がつてラルスさんに撃つが、半歩下がったラルスさんにそれは当たることなく、代わりに発砲した奴に向かつてラルスさんが槍を投げつけた。

その護衛は顔の横すれすれに刺さつた槍に驚いたのか、静かに固まつたまま動かなくなつた。

「ちつくしょうがあああ！」

「よっと、ほい」

ラルスさんはナイフを持つて走つてきた男の腕を掴むと片手で捻り上げる。男が痛みから呻きながら膝をついたところに笑顔で顔面にグーパンを食らわせて沈めた。

「邪魔者はおらんくなつたな！」

四人もいた護衛が一気に使い物にならなくなつたことに恐怖しているのか、コイルは口を開けては閉じてを繰り返すだけで何も言わない。

「二人とも、入つてきて」

ラルスさんに誘導されて中に入ると、護衛の四人は全員縛つた状態で放置されていた。

両足から出血してた人も止血された状況で気を失っている。多分ラルスさんが殴つたりしたんだろう。

「えっねっ、ね……」

「え？　ね？　何が言いたいん？」

言葉になっていない声を上げ続けるコイルにネヴィさんが首を傾げて近づくと、急にコイルがネヴィさんの足に抱き着いた。

「うわっ」

「ネヴィ様っ！」

ラルスさんがネヴィさんのもとに駆け寄ろうとした時、コイルが顔を上げて、嬉しそうにどろどろと纏わりついてきそうな顔で笑った。

「ネヴィクイーズ・エトール様！」

そう叫んだコイルはまるで神様を見ているかのように目を潤ませて涙を流しながら、ネヴィさんの足に抱き着いたまま離れない。

「はっなれる！」

ラルスさんが無理やり引き離すが、コイルはネヴィさんに近づこうと藻掻く。

その狂氣的姿に顔を引きつらせながら、ネヴィさんが「来んな」と一言いうと、コイルは動きを止めた。

ネヴィさんの言うことには従順なようで、コイルはネヴィさんの足を掴むことは無くなったが、その目はずっとネヴィさんを捉えている。

ネヴィさんを背に庇い、槍をコイルの喉元に突きつけたラルスさんは、本気で怒っているようで今にもコイルを殺しそうだ。

「なんでお前が俺のこと知ってるんや？」

「ネヴィクイズ様をずっとお慕いしておりました！」

「きもい！ 俺と会った事なんかないやろ？」

「ええ、お会いしたのは初めてですが、私は知っています！ 貴方様が図書館でいらっしやることも、富裕層のトップに入る家柄のお方で有らせられることも！」

祈るように両手の指を交わせて、コイルはネヴィさんのことを語り続ける。

「王族の血を引く高貴な御方でありながら東の下賤な言葉をわざと御使いになるお優しいところも、司書を経験せずに図書館になられたことも、全部知っています！」

コイルは懐から出した写真を並べだす。

その写真はネヴィさんを映しているものばかりだったが、数枚ほど他の図書館の写真が撮られていた。

「これどうやって撮ったんや」

「ワタシは富裕層です！ 図書館の情報も少しなら耳にすることもあります。その情報をもとに調べたのです！ そして、貴方という素晴らしい人を見つけた」

「お前、もしかしてこの写真売ったりしてへんやろうな？」

一瞬目を見開いたネヴィさんが怒気を孕んだ声で聞けば、コイルは首を傾げて「ああ」と零した。

「売ってませんが、他の図書館とかのいらなくなった写真は譲ってほしいといった男に譲ってやりましたよ？」

悪びれた様子もなく、コイルは当たり前のことのように語る。

「そいつが写真と交換に渡してきたルビーが貴方の瞳とそっくりだったんで、いらぬモノもなくなるしちよいどいいと思って交換しました」

宝石と交換。もしかしてあの闇商が持っていた写真はここから？ そう思ってメイさんを見ると「かもしれませぬね」と険しい表情で答えてくれた。

「火事はお前が起こしたんやろ？」

「はい、ワタシがやっております」

コイルは濁すこともなく、はっきりと答えた。

「ネヴィクイーズ様の担当されている場所にあんなゴミを放置したままではいけないと思っただのです、ゴミは燃やさないと」

まるで自分が正義だというような口調に吐き気がする。

「命をゴミと言うとは……。貴方は自分のしていたことの重さが分かっているんですか？」
「分かっているさ、でも俺は人を殺してはダメだぜ？　ちゃんと逃げれる余地は残してやってた。火事の後に飢え死ぬのはそいつらの責任だろ？」

怒りを隠さずに話すメイさんに向かっては、高圧的な態度で嘲笑しながら答えるコイルにイライラが募る。

「火事の後、住民たちが飢えて死んでしまうかもしれないことを分かっているながらやったなら、それは立派な殺人です！」

「うるせえ！　平民風情で図書館を名乗りやがって！　俺に意見できるのは南の図書館様と東の図書館様だけだ！」

落ち着いた感じで話していたコイルが急に叫びだした。首元に刺さっている槍にも怖がることなく、メイさんの言葉に噛みつく。

「うるっさい」

言葉が続けようとするコイルにネヴィクイーズさんがそういえば、グツと唇を噛んでコイルは静かになった。

どこまでも、ネヴィさんの言うことしか聞くつもりがないんだろう。

「ワタシはシヨボい放火犯、人殺しじゃない。捕まっても金を払ってすぐに出てくるさ」
ケタケタ笑ったコイルは、変わらずネヴィさんに熱い視線を向けている。

「はあ……」

大きな音をたてて、わざとらしくため息を吐いたネヴィさんは自身の頭を乱雑にかき混ぜ、コイルを睨みつけた。

「何個か間違つとることがあるで、教えたるわ。まず、お前が俺の情報だと思ってるもの一つ、王族うんぬんは俺やない、他の図書館を指すもんや」

「え」

「二つ、俺は確かに王族に近い部類の家の出や。でもそれは俺の家以外が貧しかったから、商業で成功しとった爺さんの爺さんだかが金持つてて当主なんて呼ばれとったからや」

片手で額を抑えて、心底面倒くさそうにネヴィさんはコイルを見下ろす。

「口ぶりからして、お前は俺のご先祖やら俺の出身やは『北』やと思ってるみたいやけど。俺は東で生まれて、俺の一族は東で繁栄した」

「そ、そんなわけっ！ そんなわけない！」

「俺が東の言葉使つとるのは真似しとるわけやのうて、生まれた時から聞いて育った自分

の出身地の言葉からや」

あわあわと手を空中で動かしては、驚きと苦痛に歪んだような顔でコイルはネヴィさんに手を伸ばす。一瞬目を見開いたコイルが縋るように「でも！」と声を荒げた。

「エ、エトーカじゃないですか！ 貴方はネヴィクイーズ・エトーカ様、東の名ではありません！ ワタシを騙そうとしても、だっだめですよ！」

「ネヴィクイーズ・越灯歌」

「え？」

「聞いたことあるやろ？ 東で一番の富裕層、東の当主『越灯歌』家。それが俺の本当の姓やで？ 名乗とった『エトーカ』は姓だけで馬鹿にされることを防ぐために、他国に名乗る用で爺さんたちが作った姓や」

絶望したように固まったコイルにネヴィさんは「残念やったな」と吐き捨てた。

なぜそんなに『古くからの富裕層』『北の富裕層』に盲信的だったのかは分からないが、信じていたものが間違っていたと分かった彼の気持ちは想像もできない。

「今と昔では富裕層と呼ばれる人間には違いがあります」

静まり返った部屋の中でメイさんの声だけが響く。

「貴族や王族の制度の名残りで、そういった家柄の人を富裕層と指すのと同時に、今ではお金持ちという意味も込められています」

確かに、富裕層という言葉は『古くからの高貴な家』と『最近成功してお金持ちになった家』の両方を指す。そしてトルネマード家は後者だ。

「貴方は古くから高貴な家柄である人に図書館をやらせたかったんですね」

高貴な家の出を図書館にと考える者は少なくないし、富裕層になった者が古くから高貴な家柄の人間に憧れを抱く者も少なくない。

コイルという人物はその二つが異常に強いのだろう。

「図書館とは、この国の象徴だ。国王という制度無き今、事実上の国王が図書館だ！ ならその図書館は高貴な血筋であった方がいいに決まっている！ かつて王国として豊かな国を築いていた北の富裕層こそ、図書館に相応しい！」

先程までとは変わって、ネヴィさんのことも鋭い眼光で睨んだ。ネヴィさんが彼の思っていた高貴な血筋ではないことが分かったからだろう。

「放火をしていたのは、それと関係あるんですか？」

「東の司書と西の記録者が東の貧民だと知ったからだよ、あんな人間以下のゴミがこの国の顔に仕えているなんておかしい話だ！ 最古の図書館、西の図書館も北出身ではない。おかしいだろ、そんな平民ではなく崇められるべきは北出身の高貴な図書館だろう？」

「このっ！」

「シノカ」

リカさんとドグさん、それにメイさん。三人を馬鹿にするその物言いに腹が立つ。

殴りかかりそうになったところをラルスさんの静かな声に呼び止められた。

「今の図書館たちが一掃されたとき。もう貧民が選ばれないようにしておく必要がある。施設に貧民が入ることが無いようにする必要があった！」

「だから貧民自体を減らそうとしたんですか？」

「そうさ！ 貧民自体の数を減らすには火事が手っ取り早かった。図書館や司書、記録者を平民が、ましてや貧民がやっていいわけがない！」

ラルスさんから槍を取り上げると、それを回して刃のない部分でコイルの顔を殴った。

「うがあっ」

「図書館は国を治めとらん、お前のそれは勝手な理想の押し付けにすぎん。それにお前は図書館である俺らに危害を加えたんや、金で出てこれると思うなよ」

ネヴィさんの言葉に両手を握りこんで血が滲む唇を噛んでいたコイルが。急にねっとり

とした気持ちの悪い笑みを浮かべた。

「捕まって罪人になり下がるくらいなら……。今、ここで図書館にふさわしくない人間たちを消してやる」

「は？ 何言って」

顔を顰めたネヴィさんが言葉の意味を聞き返そうとした時、しゃがみ込んでいたコイルが急に走り出した。

何する気だ！ メイさんの前に立って守ろうと身構えたが、コイルは俺達には目もくれず、捕まえて縛り上げていた護衛達のもとに行く。

ラルスさんもネヴィさんも急に走り出したコイルの攻撃に備えて身構えていたため、出遅れた。

護衛の懐から何かを取り出したコイルを捕まえたが、その時にはコイルは高笑いをしながら、俺達を馬鹿にしたように楽しそうに笑っていた。

「何をした！」

「さあ？」

ラルスさんに抑え込まれたのに、ヘラヘラとしているコイルに答える様子はない。

その手に握りこまれているコイルが護衛から取ったものを取り上げる。
スイッチのついた四角い機械。

何のスイッチなのか分からないが、コイルがもうこれを押したことと、これが何かよくないものであることは明白だ。

「これを押してなにかを引き起こそうとしていた……?」

スイッチをジッと見たまま、一切動くことなく思考に沈んでいったメイさんの隣からそれを覗き込む。

なんか、見たことあるような……。

あっそうだ。

「爆弾?」

俯いていたメイさんがバツと効果音がつきそうなほど勢いよく顔を上げた。

「シノカくん、今なんて!」

「え、爆弾のスイッチみたいだなんて」

「それです! ドグさんリカくん! そちらが片付いたならすぐに家の中の搜索をしてください! 爆弾が仕掛けられている可能性があります!」

俺の肩を掴んで、メイさんが通信機に叫ぶ。

『了解！』

「メイさん本当に爆弾なの？」

「ええ、多分。スイッチを押されたのにドコモ爆発してないということは、時限式だということでしょう。爆弾によつては解体してしまいたいところなんですが」

「俺は爆弾の解体なんてやったことあらへんよ」

「私もです。その辺の知識なら北が強いはずなんですけど、浅知恵でどこまで対応できるか」

親指の爪を噛んで目を閉じたメイさんは、焦ったように同じ場所をぐるぐると歩き出しました。

ネヴィさんもその場に座り込んで、目をキョロキョロとせわしなく動かしながら人差し指の背で下唇を押しながら口を尖らせて唸り声をあげている。

いつもと違う、図書館二人の様子に本当に焦っているのだと分かった。

『片っ端から部屋を見てっけるけど見当たらん！』

『どこに仕掛けとるんか目星はないんか！』

通信機から聞こえるリカさんとドグさんの声はかなり乱れていて、二人が走り回ってくれているのが分かった。

皆悩んでる。困ってる。

ラルスさんはコイルから話を聞き出そうと頑張ってるし、リカさんとドグさんはこの広い家を走り回ってくれている。

ネヴィさんも考え込んでいるし、メイさんだつて記録を読み返してどうにかしようと思いをフル回転させている。

皆が、自分のできることをやっている。

この状況で何もできてないのは、俺だけじゃないか。

考える、思い出せ、記憶を引っ張り出せ。

引っかかっているんだ、なにか、ずっと違和感があつてそれが拭えない。

通信機のノイズ、人の呼吸の音、ラルスさんとコイルの声、メイさんの歩く音。

全ての音が振動となつて、脳を揺らす。

ああ、もうっ邪魔！

首を振つて、しゃがみ込んで膝を抱える。両手の掌で隙間なく耳を覆い隠せば、何の音も聞こえなくなつた。

爆弾をどうにかしなきゃ。解体するにしても爆弾自体がいる。

じゃあ爆弾はどこにある？ 時限爆弾ならいつ爆発するんだ？ 今したらどうなる？ いや、そんなことよりも、なんで俺は爆弾が置いてあるかもって思ったんだっけ……。

そうだ。

村の別荘で見つけた地下室。

あそこで見たからじゃないか。乱雑に置かれた何かの部品たちに工具箱、そして空のお菓子の缶箱。

あの地下室に行ったときは違和感の正体に気付けなかったけど、あれは爆弾の材料にもなるものが沢山あって気になっていたんだ。

実際、俺は地下に行った次の日から、武器や爆弾について詳しく調べている。

トンファーという見たこともない武器が気になったからだと思っていた。けど、今思えば爆弾の材料を見たことで爆弾にも興味が湧いてたんだ。

あれ？ じゃあ、爆弾についての知識なら俺が一番あるんじゃない。

記録きおくした爆弾の知識を引っ張り出して、この家の構造と合わせながら考えてみる。

爆弾をなぜ仕掛けていたんだ？

逃げるため、放火に気づいた騎士団がこの家にやってきたときに爆破して逃げるつもりだったんだろう。

それも踏まえて、この家に爆弾を仕掛けるならどこにする？

やっぱり中央部分かな。あんなスイッチでは遠くから起爆スイッチを稼働できないから、爆弾のある場所の近くには逃げ道もあるはず。

逃げ道があり、中央が一番近いのは？

「……そっか、わかった」

耳から手を離れたとき、大きな音をたてて扉を蹴破るようにドグさんとリカさんが入ってきた。

「もう無理や！ ネヴィさん、ラル！ 諦めえ！」

「メイさんとシノカも、早う逃げよ！」

ずっと走り回っていた二人は、流れ落ちる汗で頬に張り付いた髪を払いながら、図書館の腕を掴んだ。

二人に引つ張られていく図書館の二人を横目に、立ち上がった俺は部屋の中を見回した。

「シノカ！ タイムアップや！ 逃げるで！」

ドグさんの手が差し伸べられたのを見た時、視界の端に探していたものが見えた。

「あつた！」

部屋の隅、カーテンレールの上に置かれたお菓子の缶。

「ドグさん取って！ あれ爆弾！」

「な!？」

「はやく！」

差し出された手を引つ張って、お菓子の缶を指させば訝しげな顔をしながらも、ジャンプして軽々取ってくれた。

ゆつくりと地面に置かれたその前に座る。

俺を囲むようにみんなが缶を見ているのが分かって、緊張で手が震えた。

「開けます」

蓋を外すと、そこには時計のつけられた爆弾があった。

「本当にあつたやん」

「シノカくんなんで分かつたんですか？」

驚いた様子の図書館達に爆弾なのだからあまり近付かないようにと注意しながら、自分が立てていた予想を簡単に説明する。

「俺、爆弾のこと気になって最近調べてたんだ。その時覚えたことと、あのスイッチとこの家の構造から設置する場所を自分なりに考えてみました」

「すごいな」

ラルスさんが小さく零した言葉に、緊張していた手の震えが治まった。

ドグさんに借りたナイフで奥の方も探りながら導線を確認する。

「シノカくん、大丈夫ですか？」

「はい、構造は分かりました。調べたものの一つです」

造りは分かっているんだ、慎重にやれば絶対に大丈夫。

「切ります」

まず時計に繋がっている一本目の導線を切る。時計の針が動きを止めたが、爆弾が爆発

する様子はない。

「つふうー、次行きます」

時限式ではなくなったのでゆっくりと確実に作業する。他の導線を傷つけないようにしながらナイフの先端でネジを取り、導線を隠している邪魔なものを退かしていく。

俺が爆弾と向き合っている間、皆も一緒にその場にいてくれた。

東の三人は水を持ってきてくれたり、影ができれば手元を照らしてくれたりサポートしてくれている。

緊張で手が震えればドグさんが腕を支えてくれたし、じんわりと額に滲んだ汗はメイさんが拭いてくれる。

それがすごく心強くて、時間は掛かっているが着実に解体作業は進んでいた。

「よし、ラスト」

最後の導線。これが厄介だった。

三つの黒い線。これを同時に切らなければならない。

「あとはこの三つを同時に切る必要があるんです」

黒の導線は固く、片手で切るのは難しい。しかも離れた箇所にある三本を同時に、となればまとめて一気にということもできない。

「じゃあ、頑張りましょうか」

「二人とも、ちゃんと切れよ？」

ナイフを持ったメイさんとドグさんがそれぞれ一本ずつ、導線を摘まむ。

二人の表情に恐怖なんて一切なく、むしろ俺を安心させてくれるいつもの笑顔で。

「メイさんは両手で行き、線は支えたる」

「そういうドグはちゃんとタイミング合わせんと駄目やからね？」

そんな二人の背から顔を覗かせたのはネヴィさんとリカさん。メイさんの後ろから導線を支えているのはネヴィさんで、後ろから抱き着いてドグさんの腕に手を添えたのはリカさん。

「シノカ」

「ラルスさん」

「みんな、信じてるよ」

後ろから声がかかって振り返ろうとするとラルスさんの左手が俺の肩に置かれて、右手はナイフを持つ俺の右手を上から覆うように掴んだ。

ここにいる人は皆、俺の指示が間違っているなんて一ミリも思っていないんだ。

「よっしゃカウントはフィードの役やな！」

「なんでや！ そんな大役無理やって！」

「リカが適任だって俺も思うなあ」

「私も賛成です。全員が合わせるにはやっぱり聞きやすいカウントが必要です」

「これはフィードで決定やな」

「ええ、これ拒否権とかないやつやん」

頬を膨らませて文句を言うリカさんに皆が笑った。爆弾が目の前にあるなんて思えない空気に、俺もつられて笑ってしまった。

皆は何もできない、俺を、信じてくれてる。

静まり返った部屋のなかで、いくつもの呼吸の音だけが木霊して、爆発なんて起きなかった。

「いつ、やったああああ!!」

リカさんのその声で止まっていた時間が動くように、全身から力が抜けて、緩くなった口から歓声が零れた。

「よかったあ、よかったよおおお」

「シノカくん!」

「シノカ!」

メイさんとドグさんが寝転がっていた飛びついてきて、俺を強く抱きしめた。

「すごいです! 本当にすごいです!」

「シノカ、お前やるやんけ!」

凄い速さで頭を撫でられて、二人に左右からかき乱されて髪の毛はボサボサだ。

でもそれが嬉しくて仕方なかった。

これ以上続けられたら髪が無くなっちゃうと二人を止めると、ネヴィさんがメイさんに

手を差し出した。

「メイさん、お前んとこの司書やるやん」

ニヤニヤと悪そうに笑っているのに優しい顔のネヴィさんの手をとって、メイさんは煽るように笑って立ち上がった。

「だから言ったじゃないですか、西を舐めないでくださいって」

「ドグ、西の司書も俺に負けんくらい良い奴やん」

ネヴィさんと同じように手を出したりカさんに、口を三日月にしたドグさんが勢いよく飛びついた。

「クヒヒツ、せや！ シノカも凄いんやで！」

「うわあっ」

ドグさんに抱っこされてくるくと振り回されているリカさんに心の中で合掌してれば、俺の前にも手が差し伸べられた。

「シノカ、お疲れ様」

その手の主はフルスさんで、優しく目を細める彼の手をとって立ち上がる。

「ありがとうございます」

「いいんだよ、お礼だつて俺らが言わなきゃ」

「え？」

「あはは、なんで分かってないの」

困ったように笑つて、ラルスさんは俺を抱きしめた。

「シノカ、ありがとう」

「つつ」

「シノカがいてくれて本当に助かった。俺達皆の穴をシノカの知識と探究心が埋めてくれたんだよ、シノカじゃなきゃできなかつた」

あの夜、星を眺めながら考えてた。

俺が皆の役に立てることなんて本当にあるのかつて。

よかつた。あつたんだ。

目が熱くなつてきたところで眼鏡がラルスさんの手に攫われて行つて、彼の意図が分かつてそれに甘えさせてもらう。

「ううっあ、ひっ、うっく」

滲んできた視界が真っ暗になって、ラルスさんの肩を濡らしていく。安心と喜びとでぐちゃぐちゃになった心が治るまで、優しく擦られている背の手が増えていつても、俺はなかなか顔を上げられなかった。



「おっと」

「あつぶない、もう、メイさん？」

「ごめんなさい」

転びそうになったメイさんを支えて本の読み歩きを注意すれば、メイさんは眉を下げて謝った。

二人で書室の椅子に腰かければ、窓から飛び込んできた人影が一つ。

「ででん！ 帰ったで」

「おかえりなさい」「」

肩を揺らして笑うドグさんはメイさんに今日の記録を渡す。

それを受け取って資料に目を通したメイさんは、新しい記録に楽しそうにしている。

「シノカはこれな」

「ありがとう！」

ドグさんから渡されたのは色んな草について書かれた本。

分厚くてレンガのようなそれを捲れば、見たこともない植物が溢れていた。

あの放火魔爆弾事件から、俺は気になったものとはとことん調べて、新しい知識をどんどん入れてくようにしている。

「この調子じゃシノカは、どんどん色んなことに詳しくなっていきそうやね」

「えへへ、それを目指してますから！」

「それはいいですね」

「俺はちゃんと二人にとって必要な司書になるって決めたからね！」

資料から目を離れたメイさんが俺の頭を優しく撫でてくる。嫌じゃないけど、その子ども扱いに少しムキになっちゃって高らかに宣言してやった。

叫んだ俺にびつくりしていた二人もすぐに笑って、弄るように絡んできた。

「なんか生意気やなあ」

「あははは！ それはシノカくんの成長に期待しちゃいますね」

「ふふん！ 大いに期待しててくださいよ！」

立ち上がって、エッヘンと胸を張れば、二人はもつと声を出して笑った。

俺には弱点がいっぱいある。

記録者と一緒に動いて現地調査なんて無理だし、頭の回転も早くない。

パニックにもなるし、記録だって一瞬で出来ない。

『オールラウンダー』ともいえないし、司書としてはかなり未熟だ。

けれど、俺には長所もある。

いろんなことに興味があつて、気になったことを理解するまで調べるっていう探究心を俺は持っている。

まだそれがどこまで役に立つかなんて分からない。けど、それがあつて役に立てたことがあつたことは事実だ。

だから、今の俺が目指すのはなんでも熟せるような凄い司書じゃなくて、メイさんとドグさんが困ったときに二人を助けられるような、二人にとって必要な司書になりたい。

メイさんとドグさんのための司書。

今の俺が目指す『西の図書館の司書』は、それで充分だろう。

としょかん み せかい
図書館の視る世界

著者 杏唯 淳

キャラクターデザイン・イラスト よん

カバーデザイン はなぶさ まこと

2022年2月発行

発行 名古屋デザイン & テクノロジー専門学校

印刷 オンデマンド

連絡先 TEL(052)242-0035

名古屋市中区栄 3-20-4

無断転載・転記禁止